

み、腰を据ゑ、體を極め、大手を前方へ衝擴げて、拔足、差足、幸ひ砂地に音は立たず、大廻りにじり／＼と寄つて、及腰に透かすと、扱こそな。

綾の鼓に氣を取られた、工學士と哲學者は、洩れ来るや知らず水の彼方の、高き土塀の内ながら、花橘の香をこそ偲べ、田舎酒の芬々たるをも、松の露の薫るとばかり。

不二太は思はず衝と退いた。

工學士はつかまつたま、面を背けた、あはれ袖あらばと思ふらむ、肱を曲げて額を隠した。愈々仔細ありと見て取つて、傳内の力ます／＼強く、

「さあ、汝、面見せい、何奴だ、やい、誰だと思ふ、塚原傳内を知らんかい。此の唐人め、さあ、最う恚うなつたら覺悟をするだ、汝が、面を見せんとありや、可えわ！私が面を見せて遣らう、鬼だと思へ、棟瓦の面だと思へ、恐しい伯父御と思へ、驚いて目をまはすな、何うだ、やい、面を見せるか、面を見るか、地獄の道に二ツはないぢや、棄置かん、此のまゝぢや濟まさんぞ。」

恚りし時、唯其の酒の香を厭ふやう、顔をあらぬ方に向けたるのみ、手を垂れて、冷然としてイんだが、傳内には目もかけず、腰に絶つた海水帽の天窓の上から、慌しく向うを呼んで、

「危い！止せ、止せ。」

「強ひて、強ひて連れ出した僕が濟まん。何、もう人を殺すなんざ何とも思はん。」

と忍び音ながら急込んだ、村岡は再び手に短銃を構へたのである。

工學士は叱していふ。

「自重せい。」

途端に傳内、屹と振返つて不二太を見たが、其時疾く、ぴたりと背へ隠したから、飛道具は目に着かなかつたが、眼を瞋らし、たけり立つて、

「何を、汝、何を殺す。」

不二太、

「しかし顔を見られては悪からう。もし、知れると、……」

「未練らしい、外聞だ。恥入る。」

といつて、工學士は、

「えゝ、」振切らうとしたのであるが、いつかな放れず、したゝかに拳健也。嘲笑つて、

「はゝゝ、はゝゝ、猪口才千萬。」

六十

「何を汝、白髪首が抜けようとも、此の方の目の黒い内に摺んだ手が放れるかい。」

「放れる！」と此時ぬいと出た、黒い影、いきなり、拳を上げたと思ふと、傳内の手は手首から振いで取れたやうに放れたのである。
すらりと躲して工學士は、退いて村岡とくつついたが、二人ならんだまゝ、五六間歩み去つて立留まつた。

あはやと傳内飛越つて追ひかくる、眞中へついと立塞つて、一人自若として突立つた。
不測の邪魔を屹と見た。其の目の黒い中はと自ら信じた、腕の力を拉がれたれば、心に認むる處あり、身構をして、睨めつけて、

「やい、何處から出た。」

かすれた聲して、

「鞍ヶ嶽よ。」

「何ぢや、柚か。」

「うんや、天狗だ。」

「やい、獸。」

といふより疾く、曳！ 自然木を振被つて立身上りになつた瞬間、件の漢は、今、一拳を施したなりに、破半被のはだかつて、顯に露出の胸のあたりへ、弛やかに腕を拱いて、棒のやうに立

つて居たが、一刀上段に構へたと見る、其の下へ、ぬツと毛の伸びた天頭を突出したので、はアと氣が抜けて傳内、あとへ、一步引退ると、のツさりと此方は進んだ。

ト又腰へ、振下して構へ直し、

「料簡せん、命知らず奴！」

這度は杖に氣が入つて、流水の如く一揺れ揺れる、其の時手を解くと、袖の下に、ぎらり斜に輝いたのは、弓張月の刺繍ならず、固より好む鍼である。

捨吉が此の獲物を使ふ自在さは、軽く片手で使ふより、宙に投げて弄ぶより、頬摺して愛するより、それよりも寧ろ是を携ふる手段の如意なる事に因つて證せらるゝ。渠は恰も柔なる絹を扱ふが如くにして、一度び身に着くる時は、巨大なる殺人鐵、人の煙草入を提げ、紙入を持つたに齊しい。

片手で軽く提げて、大まはしにぐるりと振つた。

「一番來るか。」

「參るぞツ。」

雙方砂を蹴つて颯と分れた、相去ること八九尺、正に其の間の白砂は、血一斗を染めずしては、人を去らしめざらむとす。

「まあくく先生、飛んでもない。」と何處に控へたか、傳内に飛びついたは、多見五郎畫伯であつた。

「何でございますな、貴下、對手は狂人です、狂人ですわ、否さ、狂人に刃物ツていひますが、馬鹿ですよ、馬鹿に鍼です。お怪我でもあつては悪い、然うですとも、酔つちや在らつしやらない、否最う、そりや最う、ですが、馬鹿々々しいぢやありませんか、かつてえに棒打でさ。」

曲者ツて、曲者ツて何も、塵一ツ葉取つたのぢやありませんや、お城を何うしたつてこともないぢやありませんか、まあさ、まあ、まあ。」

又一人暗がりから出たのがある。

傳内は旅畫師に、兩の手で胸をおさへられながら、目を赫と丸くして、

「又、松の木が人に化けたわ、おのれ！」

「まあさ、何だつて、お對手ぢやありません。」

彼の男は姿をあらはすと、直に、捨吉の肩を軽く叩いて、傳内には背を見せつつ、彼方に並んだ兩親分に、

「御介意なく、御介意なく。」と極めて小聲でいつたのは、屋島藤五郎。

二人は無言で、其まゝ、砂に靴の踵を返した、其の姿が、遙になると、又躍上る傳内を、しつ

かと留めて、旅の畫師、

「お前さん方も、引いたり、引いたり。」

鶯籠

六十一

「幸之助さん、鶯の聲が聞えはしませんか。」

高樓の一室閑なる處、ありのまゝの燈も、此の美人を映しては、清き白菊の花かと輝く、名にし負ふ芙蓉夫人、巨山の令室美樹子は、打澄した鼓の手を、表皮にかけたまゝ、ものに驚いたやうにいつた。

相對に舞袴の折目正しう、綾の鼓を合せて居たのは、此の篇のはじめに見えた、杉坂幸之助といふ少年である。

「否、」

夫人はうつとり打傾いて、黒髪の鬢の艶かなのを、紅い調の緒にかけた。

「鶯が今時分。山奥へ行くと夏も啼くつていひますけれど、こんな里近い處ですし、最う夜ぢや

ありませんか。」

「然うでしたね。」

「姉の使に來ましてから、恚うやつて長い間、御厄介になります上、お内のものも同一やうに、我儘をさして下さいますから、御本でも繪巻物でも、自分でずんく、お藏の中へも入りますが、まだ何處にも、鶯の飼つてお置きの處を、見たことはありません、此處にも籠ばかりぢやありませんか。」

幸之助は鼓を肩のま、振返つて然ういつた。床の間の片隅に、高等に堆い、繪時ものの臺に据ゑて、一個粗末な鶯籠、飾も艶もないけれども、恚るあたりにある器の、おのづから法華經の、妙なる聲や啼き出づると、思ひやらるゝ奥床しさ。

夫人も齊しく目を注いだ、見遣つたばかりで、倅寂しう、

「其の籠があるもんですから、心の迷かも知れませんが、眞個です、幸之助さん、内にも居ない鶯が、今時啼くわけはないのですもの。」

「それでも、何ですか、此の籠は、自然に鶯の聲がするといふやうないはれがあつて、飾つてあるので、それでお心が迷つたのではないのですか、もしそれだと、聞えないこともないでせう。」
「そんなぢやありません、唯私の氣の所爲ですよ。ですがね、籠は然ういふ折紙のついた品ぢやありませんか。」

やありませんけれども、出來たのは、名人の内て出來たのです、あれ、幸之助さんも御存じ。

貴下のお宅のお隣だつた、水上さんのお師匠様は、一時御内職に、鳥籠をお拵へ遊ばしたではありませんか。」

幸之助は聞いて、鼓を袴の上。

「では、あの、お師匠さんがお拵へになつたんですか。此間から拜見はして居ますが、些も氣が着かずに居たんです。然ですか、お師匠さんが」と見直して然も懐しさう。

「まあ、幸之助さん、水上さんのお内で出來ましたには出來ましたのですが、これはお師匠さんのお細工ぢやありません。」

彼處にね。

規矩夫さんとおつしやつた、お師匠さんのお子様がおいでなさいました。

幸之助さん、獨樂にも凧にも竹馬にも、貴下とは年が違ひますから、よく覺えてはおいでなさいますまい、貴下のお姉様などは、おなかよしだつた方ですよ。

其の規矩夫さんといふ方がね、まだ東京へお學問に行らつしやらない前に、此地で學校へ通つておいでなさいました。お内があつして、お困り遊ばしたもんですから、見やう、見真似に、お父様の御内職をお覺えなすつて、お手傳ひにお拵へ遊ばした籠なんです。

いつか、お歳暮だとおつしやつて、私に此の鳥籠を下すつたの。竹を削るぐらゐの内は、手傳もさせましたが、こんなものを拵へました、悴の不料簡。品物に絡まつては、是を賣るとお錢になります、私が手足が利かねば格別、どうにか貴嬢方のお禮は貰ふ、内職にも馴れました、粥を啜つても生命はつなげる、たとひ志にもせい、鳥籠でお錢を取らうなどは、少い者の癖に、情ない心がけ。以來はならぬと、叱りました事ぢや、と其時、お師匠さんが、しみ／＼お話をいしました、もう、久しい事になりますよ。」

と、いつのまにか聲が曇つた、時鳥の啼く音はせずや。

六十二

月はなけれど湖の晴れたるは、障子の外の松風の音にも知れるが、芙蓉夫人はしめやかに、物打語るうち弱々となつて、調を絞つた手首もたゆげに、指環も鼓も落さうとしたが、折かへした褌が揺れて、なよやかに力が入つた。やがて、

「幸之助さん、もう一度、綾の鼓の一調を。」

いざと少年も膝を構へて、齊しく白い手が閃いて、トンと同時に打ち初めた。「あれ、」

「……………」

「變ですよ、」

再び氣を奪られたか、うつとりする。

「また、鶯が啼くんですか。」

「いゝえ、をかしくはありませんか。」

「何うして？」

「私の鼓は鳴りません。」

「何爲ですな。」

「何爲か、恚うやつて、打つても、打つても、自分に音が聞えないの。それに何だか寒氣々々しますよ。」と肩なる鼓を外さうとすると、支へた腕は胸から斜に、衣紋に附着いたやうにて放れず、掌を開いた右の手は、徒に、水にも紛ふ薄紫の縮緬の長襦袢の袖に垂れて、打たんとしつつ猶豫らへり。

此の折から、門の外なる橋を隔てて、宵闇の小松原に、工學士と村岡と、身を忍んで居たのだけれど、素より夫人の、夢にもおもひがけぬ次第であるから、身に染みたのは湖を渡る風の音信であつたと見える。

けれども美樹子は、派手な薄衣をして、夏も姿のあからさまな質ではない。此の日黄昏の湯あがり、化粧の間に扱帯の時さへ、裳も襟も淑しう、四邊に人なき姿見にも、鬢の縫れを差する人の、衣換ふるにも心するものが、分けて幸之助に鼓を習ふに、教ふる少年も袴を着くれば、此方も唯戯のやうにはせず、其の薄紫の長襦袢を、白茶の地に兼房で子持縞のお召縮緬の單衣に襲ねて、江戸紫の縮珍に野川の萩を白抜なると、黒縮子を打合せの帯、きり、として、白の紹縮緬に秋草を墨繪で染めた半襟の衣紋正しく、水浅黄のはつかの、裳を深く坐したれば、白山嵐すればとて、夏や、半ばならんとするに、未だ夜は浅し、襖は閉ぢたり、何者ぞ敢て襲ひ入りて、仙境の雪の膚を犯すや。

「怨くと聞いて幸之助は、しばらく、夫人の状を瞻つたが、心思ふ處ありげな顔して、

「あの、何ですか、それでは、私の打つのも聞えませんか。」

「貴下のは、聞えますとも、眞個に佳い音がしますよ。」

「それでは私の打つのは聞えて、御自分で遊ばす鼓が、些とも音がしないとおつしやるんでございますね。」

「然うなんですよ、何うしたのでせうね、幸之助さん。」

少年は清い目の色勇める如く、面を正し、故とならず軽く袴の膝を打つて、

「立派に打てます、鼓は其でお見事です。」

私がいふまでもないのですが、此の綾の鼓といふ謡は、鳴らぬ鼓を打つのですつてね。

……とは知らずして、老の衣手力添へて、打てども聞えぬは、もしも老耳の故やらむと、

聞けどもく、池の波、窓の雨、いづれも打つ音はすれども、

とシテの幽霊が、思ひ入つて耳を傾けても、音がしません處ですもの。其の地を打つのが、綾や、燈心草ではない、立派な鼓だつたつても、打ちながら自分に音が聞えるやうでは、業の未熟なものだつて、水上のお師匠さんが、いつかお話をなさいました。

夫人もお弟子、私も弟子、同一師匠で、私の方は、弟弟子ですが、貴女は早くお止めになつて、年数は私が多いのですから、いくらか多分に教へて頂いたこともありませう。生意氣をいふやうですが、眞個に夫人、貴女は出来るやうになりました。」

紫 しらべ

六十三

「さあ、貴女の持つて在らつしやるのが、音がしませんなら、取換へて進げますから、此の鼓を

打つて御覽なさい。」

幸之助は心に堅く信ずることのある面色で、聖がものを語るやう、頼母しくいつて膝を進め、自分の鼓、美樹子の袖に差向けた。

「もの強請をしたやうですが、餘り不思議でなりませんから、それでは幸之助さん、少々拜借の床しや紫の雲の上で、羯鼓を打つ二人の天女が、姿も見えず、すらりと行違ふ趣して、鼓が二ツ手から手へ、白菊の燈に、塵なきあたりを入交る。

「ですがね、どうせ、私の手が鳴りませんのですよ。」

と静に取つて肩の上。幸之助が手の跡へ、優しく頬を傾けたが、鬢がはらりと、掌の雪に映り、袖の縞に映り、就申したるばかり深緑艶やかなる圓鬘に映つて、たらくと朧の月の水に流るゝ装なる、白き瑪瑙の中差に、濃かに色を宿した、其の調の緒は、紫の絲にこそあれ。夫人は一目見るや否や、顔をかはすやうに鼓をはづした。

「幸之助さん、貴下の、此の鼓の緒は紫ですね。」

如何にやしたる、少年も容を正して、

「あの、些と考へがあつて、今夜は紫をかけて持ちました。」

「否、貴下がなさいますのは、別に際立つても見えなかつたものですから、うつかり取換へて頂

きました、なか、私が持つものではありませんよ。」

「構ひません、なさいまし、夫人。」

「飛んだことをおつしやいます、勿體ないではありませんか。貴下、幸之助さん、此の紫調べと申しますのは、重いことだと存じて居ります。」

「ですから、貴女だから構ひません。全く、なまやさしい事で、紫調は出来ないのですが、貴女の御技倆は、私が拜見したのですもの、なすつても可うございます。」

それですから、黙つてそれを進げました。お歿りなすつたお師匠さんが、私に此の紫を許すとおつしやつて下さいましたのは、矢張綾の鼓を打ちました時。

其時も丁ど、夫人、今夜の貴女と同一やう。私で自分で打つ鼓が、些とも自分に聞えませんが、打つても打つても聞えませんが、なぜか音がしませんと、其の通り言ひますと、まあ、お前も、どうやら一人前には打てさうだと、お笑ひなすつて、一度遣らしてやらう、紫の緒をかけても可い、と然ういつて下さいました。

師匠も同一お師匠さん、ものも同じ一調で、そして同一やうなことがあつたのですから、何爲といふわけは知りませんが、屹と出来る處まで、お出来なさいますに極つて居ります。ですから御遠慮なさいとはしない、さあ、其で打つて御覽なさいまし。

私がお手傳ひは一月ばかり、何のたしになつたのでもありませんが、存じて居りますだけは、一生懸命に教へました。貴女も毎日、座敷まで更めてお習ひだし、前にもう、お師匠さんで、丁と出来上つておいでなさつたのですから、申分はありませぬ。

お師匠さんになりかはつて、私が許して進げませう。」

と傍目も觸らず屹といつた、凛々しくいつた。幸之助は貌も容も凛々しかつた。

芙蓉夫人は差俯向き、

「それでも、風説にも聞いて居ります。幸之助さんは何ですもの。習つてお覚え遊ばしたのではないのですもの。未だお乳を召し上げる時分から、お隣でお師匠さんがお打ち遊ばすのが大好きで、おむづかる時でも何でも、鼓の音さへすれば、直に御機嫌が治りましたさうですし、お小さい折はお弱くつて、御病氣の擧句に、一度、絶息してお了ひなすつて、水でも薬でも不可ませんかつた時、私が見處があるとおつしやつて、お師匠さんが、一手お打ち遊ばした、其の音で、目をお開きなさいましたさうですから、幸之助さんのお上手は因縁事。

然ういふ貴下がお打ちなすつて、御自分の鼓が聞えませぬのと、私のは違ひますよ。どうしてねえ、これが持てますものですか。」と、つく／＼と打視むる、胸に受たる調の紫、位も、色も、此人ならで誰かせむ、帯の模様、白萩に鼓を掛けた其の風情。

六十四

幸之助はなほ熱心に、

「夫人、貴女は私を、お世辭をいふやうなものとお思ひなさるんですか。否、屹と胸に當ることがあつて然ういひますのですから、どうぞ、其の紫のを使つて下さい。」

「はい、私もほんの慰に習ひますのなら、直ぐに喜んでお受け申しますが、お師匠さんが歴然とした水上さんでございましたもの、花や茶とは違ふんです。私も一心に、斯道ばかりは眞面目に教はりたう存じますから、ねえ、幸之助さん、そんなことをおつしやらないで、いろはから手ほどきを遊ばす氣で、もつとお教へなすつて下さいませね。」

「それが御遠慮です。夫人、貴女は然うやつて、私に教はるのだとおつしやるではないのですか。教へるものが、もう可いといふのに、何を疑つて、そんなことをいふのです。貴女矢張私を、可い加減なことをいふとお思ひですか。」

「幸之助さん、然うぢやないの。」と詮方なげに微笑みながら、あどけないまでに謙遜して、指を豊に突反し、座蒲團に膝を斜めに、遺瀨なささうな姿になり、

「だつて、今もいひます通り、幸之助さんの、御自分の鼓の音が聞えなくつて、其の時お師匠さ

んからお許が出たのとは、私のは違ひますよ。

貴下のは、自然、其の道にお達しなさいました印です。私のは手が利きませんので鳴らないのですもの。もつと、どうぞ、叱つてお稽古を遊ばして下さいましな。」

「そんなに私のいふことを、貴女お肯きなさらないくらゐなら、お習ひなすつたつて無駄でございます。試験に及第をさして進げましたら、おとなしく卒業なさるが可い。」

詰め寄るばかりに推していはれて、

「どうしたら可いでせうね。」

「大事ないんです、もしも私の目が違つて、これがほんの當座のお世辭で、許すまい、紫を、貴女に持たせたが悪かつたら、私があゝの草葉の蔭から、お師匠に叱られませう。鼓の緒の紫をお嫌な神様がありましたつて、貴女に御罰は受けさせません。」と二十歳に足りぬ言にしては、鬼がいはする口氣であつた。

芙蓉夫人は打案じて、やゝあつて面の色、晴やかに頷く状して、

「幸之助さん、そんなら譲つて頂きます、嬉しい〜、こんな嬉しいことはありません。」

と紫の緒をソツと抱き、

「私は、あの最う此頃ぢや、世の中に、慾も望も何にもない、一心に修業をして、些とでも上手になつたと、鼓を貴下に賞められたばかりですよ。」

「何かいひますと、何かねえ、お言を眞に受けて、自分でも佳いと思ひますやうで、さげすまれようも知れませんが、どうぞ、それでは、一度これを、持たせて見て下さいまし。而してね、幸之助さん、」

と居座を直した。

「私にね、あの何うぞ澤山、お禮をいはして下さいませんか。」

「夫人、何のお禮です。」

「實に貴下の御丹精で、不束なものに紫調べが出来るやうになりましたお禮です。」

幸之助さん、貴下が此家へおいでなさいましたから、主人と一所に、無理にお引留め申してさ、恚うやつて、鼓を教へて頂くのですもの。どんなに我儘を、遊ばしても宜しいのに、貴下は何事もお控へ目で、御飯を食るといつては御挨拶を遊ばす、湯を召すつても御挨拶、お寝るにもお行儀をなさいます。家來どもにまで、優しくお禮をおつしやつて、大抵お氣兼を遊ばすではありませんか。

主の恩、師の恩、親の恩といひますもの。貴下は私を同一お師匠さんにつきました朋輩とお思ひなすつて、お温習をすとおつしやつて、教へる振はなさいませんが、私には先生でおいでな

さいますよ。

齊眉きます心からは、お雛様にも手を支きます。綾の鼓の一調を、お譲り下さいましたお師匠さん、どうぞ今まで、貴下がおつしやつてばかり在らつしやいました、お禮のかはりに、精一杯、禮をいはして下さいましな、幸之助さん、どんなお禮をいたしませうね。」

六十五

夫人は然も嬉しさの餘りに、同一言を繰返すのを、心着かざるものの如く、「眞個なんです、幸之助さん、此の事に限つては染々お禮をいひますよ。而してどんなにもお禮をします。」

然らばと開き直つた處で、望むのは、庭の池なる菖蒲の影に、紅の流るゝ、金魚が精々と思ふばかりに、如何なる事もと心易さう。

もし此際、一たび幸之助の顔を見たら、夫人は思ひ切つて、恚る輕忽をいはなかつたに相違ない。世にも慎み深き女性、對手の少年が渠なれば、偏に紫の調の緒に心を結んでうっかりした。「夫人、貴女は眞實から、そんなに喜んで下さるんですか。うそに喜んで、何うしませう。」

「而して、あの、推つけがましいやうですが、眞個禮をいつて下さいますか。」

「更まつて何ですね。口でいふばかりでは濟みません、どんなにも、お禮をしませうではありませんか。」

「そんなら、何うぞ下さいまし。」

「幸之助さんの事ですもの、何でも欲しいものをおつしやいませね。」

又、一度其の杖を動かし、手を放てば、金、銀、珊瑚、瑠璃、瑪瑙、花もよし、雪もよし、月さへ、星さへ、はらくくと、留南奇の薫を慕ひ來て、座に寄るべくぞ見えたりける。

幸之助は耳に颯と血の色を染めながら、

「實は、それでは、此のお邸へ參らぬ先から、私は欲しいものがあるのです。」

「お、何がお望みなのか。」

時に、じり／＼と寄つた、膝を引いて、

「もしか其が、下さることの出来ませんものだつたら、貴女、何となさいます！」

「出来ないものとおつしやるかと？」

「否、夫人、貴女に、貴女に出来ないといふはありません。此のお邸を、そつくり下さいましといつたつて、お心にさへ濟みましたら、持つて歸れとおつしやるでせう。貴女が可いとさへおつ

しやれば、お言のまゝ、巨山様も否とは決しておつしやらない、それは私が存じて居ります。それに又、お生命を、頂きたいといったつて、

「えゝ、」

「貴女が死んでさへ下さいますれば、それも出来ないのではありません。爲さらうとお思ひなすつて、出来ないことはありますまいが、爲さらうと思つても、出来ない

ことが、もし、あつて、それを私が望みましたら、貴女は何となさいます。といひかけて少年は、清らなる額に汗。

「まあ、貴下は、」とばかりで夫人は心安く微笑みたるのみ。首をと言つても驚くまい、幼き人のねだりものを。

「否、申戯ではないのです、そんなものを強請りしましたら、婦人といふものは何でせうか、綾の鼓を見たやうでせうか。」

「何爲、綾の鼓ツて、幸之助さん、どんな事、」

「否、其の綾の鼓を下さいませうね、其の無理な望を申上げたら、夫人は、私に、望むものは下さらないで、綾の鼓を渡すでせう。」

「なぜですネ。」

「否、そして其を打てとおつしやるでせう。燈心草で拵へた、鼓を打つて音が出たら、いふことを背いて遣らう、鳴らぬ鼓が鳴らないやうでは、出来ないことは、出来ないとおつしやるに違ひない。」と、やゝ急ぎ込んだやうになつて、少年は、我が頭を振りつついふ。

夫人は静に温容に、

「それは貴下、昔語の女御の上、私のやうな身に取つては、どうしてそんな事が出来ませう。たとひ生命を取られても、鳴らぬ鼓は差上げません。」と思はず悚然した様子で、鶯籠を見遣つたが、其のまゝ襟に伏目になり、願深く俯向いた。

六十六

其の状を熟と視ながら、

「夫人、それでは、どんな御難題を申しましたが、屹と背いて下さいますね。」

夫人は何か恍惚して、他に物思ふ風情であつたが、恚う幸之助がいつたのに、フト心着いて顔を上げて、然も待構へて居たらしう、

「えゝ、何なりと背きませう、私に叶ひます事ですか。」

「いつれ最う、貴女の身に叶ふ事には極つて居ります、叶へようとなさへ、お思ひなすつて下さる

ならぬ」

「何を？」

と差覗くやうにした、幸之助は肩を堅くして、首垂れて居たのである。

「幸之助さん。」

「夫人」といつたが、聲も小さく咽喉を絞つて、單衣の上に、胸の躍るのが明白に透いて見えて、顔の色も一層蒼白くなつたので、夫人も心に迷の雲、月の眉の薄曇り。

「貴下、一體どうしたの。」

「……………」

「お待ち遊ばせよ、今も私がいひます通ね、幸之助さんのお望みなら、大抵の事はして上げます。ですけれど、ひよつとかして、もし出来ませんで、私が断るやうでしたら、……………」

「直ぐお暇をいたします。」

幸之助は豫て期したるものの如く、一秒も猶豫はないで直ちに應へた。

「あの、此家には居て下さいませんか。」

「あとでは、どんなになりませうとも、兎も角も此場から、直ぐにお暇を頂きますばかりです。」

「まあ、」

と清い目を睨つて、

「そんなに思ひ詰めた事、否お歸し申しません。まだお耳には入れませんし、入れます上は否とおつしやつても、無理にもお願ひ申さうと、内々巨山とも其の話をして居ます、幸之助さん、貴下のお姉様。」

お妻さんにもお願ひ申して、貴下は杉坂様へは歸しますまい、一生、宅の者になつて頂きたい、と巨山もいふのですもの。貴下其のお望みが叶ひませんと、直ぐにお歸りなさいますなら、どんな事でも肯きませなければなりません、幸之助さん、肯きますよ。」

「それでは、」

「はあ、」と輕ういつた。

少年は引入れられ、

「貴女一所に、私と一所に、」

「……………」

「一所のお部屋で寝たいんです。」

「貴下と、」

夫人は艶麗に、

「寝ませうとも、」
「え、」と幸之助が愕然たり。

「何時までも放れないで居ませうね。一生、此家に居て頂くつもりは幸之助さん、私に兒が出来ませんから、貴下は兒、母親にするのが御不足なら、年紀上の私は姉、弟ですもの、兒ですもの、一所に寝ないで可いものですか。」

「違ひます、私のお願は違ひます。兒や弟にしないでなんです。貴女は巨山の夫人で、それで幸之助と、一所の部屋でと申すんです、命をかけて慕ふのです、打てなら綾の鼓でも。」
向うの襖がすらりと開いた、二人とも座を開いたのである。

「夫人、」

手を支いたのはお孝といふので、其のお孝の目に、座にあるものは皆端麗であつた。横に、斜に、姿の亂れたかの如く感ぜらるゝは、纒に、紫と、紅と、綾にかけたる鼓の緒のみ。

もし其の顔を出した途端に、夫人と幸之助が膝を動かさなかつたら、何時も見ろ姿ながら、其の美しさ、繪ならずや、兩方敷いた座蒲團も、薄色の一片の、色紙とばかり思つたであらう。

「塚原さんが歸りましたでございます、而して、晝工とか申します旅の方を、お連れなさいました。今夜お逢ひ遊ばしませうか。」

「寒、寒氣がしてなりませんから、お目にかゝるのは明日にしませう。」

革靴の中

六十七

鼯の音ぐうぐうと、足を踏張り、手を擴げ、眞赤な胸を露出して、仰様の傳内は、武者繪の尻が切れて来て、一夜假寐の形である。

「先生、お寝みですか、先生、もし獺之守様、もし〜。」

旅畫師の多見五郎は、枕を胸に突支棒にして匍匐、蒲團に押伏せて居た額を擡げて、傳内の寐顔を上目づかひ。

「夫人の御意だとあつて、更めて一獻頂戴は嬉しうがしたが、先生ありや酷かつた。年増が酌をしてくれる前で、人相が悪いの、手附が變だの、今夜は寐られねえのツて、御串戲も品に寄りませ。」

其の癖、直ぐに御寝なつたね、先生、先生、いや、眞個に寐ましたかい。

あのお辻とかいふのは佳い年増ね、お前さん何うかして居ませう、如何ですな。

はて、厭に森々として來たい。さあ、慙うなると、人相の悪い御當人が、反對に氣味が悪い、城見たやうな此の大な家に、女澤山で、肝心のお前さんがたわい／＼と、來た日にや、心細いちやありませんか。

第一床が變つた處へ、慙うお絹布ぐるみで寝かされちや、逆上せて眠られるもんぢやありませんや、もし些とお話しなさらねえか。」

密と肩の處を壓へて見た、傳内たわい／＼。

「不要心ぢやありませんかね、いくら陸を掛け離れて居るからつて、狼や病犬は、橋がなくつちや渡られねえでも、水にや河童が居りますぜ。ありやもし、よく女中が小用場へ入ると、戸を閉めたりなんか悪戯をしてならねえとね、お氣をつけなさいまし。」

煙草盆をぐツと引寄せ、煙管を取つたが、煙草を繼がうとして、不爲、額に手を當て、

「え、と、何とかいつたつたつな、何とかいひましたね、先生。お城にやお前さんの他に、庭掃除の爺や、走使の丁稚は別にして、もう一人、海の手の番をして、棧橋の上下をする三太とかいふ、鐵砲の上手なのが居るつてお話しだつたね。しかも、偏盲で、いつでも片目づゝ、寐て居るから、寐ねえで五日でも眠がらねえつて、いふぢやありませんか。」

とひそめて獨言、件の煙管を傳内の目の上で、くるりと廻して、

「慙うなりや、其の野郎が頼みでせう、チヨツ飛道具は些と氣障だが……何を、」

といふまゝに、飲みもしないで、煙管を筒に、貰入もろとも、腹巻の中へたくし込むと、俯向になつたなり、扱帯をきり／＼と兩手で緊めた。

もてなしの夜の衣、一度手を通したと見えるのが、脱いで傍に抛り出してあつた、豫め自分のと着換へて居たものであらう。

そろりと半ば身を起すと、革靴を手許へ、四邊を眺し、ばくりと開けると、上には地方の新聞紙、ちやんと疊んだのが八九枚。

手を突込むとがさりと音、虎を描き、馬を描き、猪を描き、鼠を描いた名工の奇特は聞いたが、未だ、青田を描いて米が收れた、物語は傳はらぬに、如何なる畫伯ぞ、今引出したのは藥である。藥の中にもこのそあれ、短刀一口、目釘を握ると掌に消えて、直ぐに懷中へ、ト左の手で襟をすツと扱いたが、片膝を丁と立てて、傳内を見た目の鋭さ！

革靴を向うへ突放して、

「心細いな、熟く寐たぜ、」

と打傾き、伸上るやうにして、襖越しに、部屋々々の寐息のありたけ、糸で手繰つて聞澄した、畫師は莞爾。

「もし、誰か寢像の佳い處へ、お言づけはありませんか、せめてものお禮だ。いつれお廊下を通ります、夢に行逢つたら途中すがら御挨拶だ。」

お前さん、あの年増ぢやねえんですか、お止しなせえ、人形見たやうな十六七のでも、何奴でも、皆此家の旦那が占めて居る。私が事を、怪しい人相だなんて、おつしやつたがね、いや、残らず、女中どもはお妾の相、御貴殿は案山子の相だ。又其でも足りねえで、畫工に別嬪をあつらへたつてな、へん、如來様が呆れらい。どれ、夫人に、といつたが、はッと横、疾いこと！ 掻卷すつぽり、棟で五位鷲が鳴いたのであつた。

六十八

「塚原様、先生様。」

外庭から聞の雨戸を、靜にトン／＼と敲く者あり。

「寐たですかね、塚原先生。」

傳内はがう／＼とばかりで、寐返り一つせず。畫師は猛獸の將に穴を出でんとして、先づ敵を窺ふ勢、掻卷の襟を頬被で、眼を八方に、さて呼吸を凝して黙る。

「はあ、寐つ了つたですね、先生様、時ならねえ堀外に近い處さに、小船が一艘見えるでがすよ。」

闇夜で判然とはしましねえが、五位鷲も鳴くでがす。」

物越に聞き取つて眉に稻妻、人知れず畫師は頷いたのである。

聲音で料ると、年紀の頃三十前後、志の堅い、氣の確乎した、性根の据つた、然も何處か、稚らしい處のある、壯漢のやうである。知らず、夜番に忠實な、鐵砲の名人ありといふ、此が三太か、と思ひ遣る、戸の外なる漢は、二三度繰返して、呼びかけたが、返事は固より、餘り靜まり返つて、此方の掻卷も動きさうな高躰、彼方へも漏れたと覺しく、しばらくして、

「や、こりや横臥らしたた。可えわ。」と、いうて身を退く氣勢、それに連れて、何かづツしりと重いものが、雨戸を放れて、共に徐るに、大跨に、一歩づゝ遠ざかり行く、——飛道具や提げたる。

「氣障な奴。」

と苦笑して、がばと起きた。畫師は再び、傳内の寐顔を流眄にかけて、脚を二本、一所にすつと立つと、すぐに襖。

此處で、どさりと疊へ片腕を投出したのを、半ば身を抜いた襖の透間から、じろり一目、燈火をフツ！

消えようとする時、恐しく粹な姿に見えた、畫師は廊下へ出たのである。

出ると直に、片手を懐に、油断のない、身構へ軽く、仰いで顔を振つて、右から、左から、一寸天井を視めたは、夫人の閨？二階の氣配。

柱にかけた残燈を透して、やがて片棲を浅く取つて、渚をひたくとぞ踏むなる足取。奥から玄關の方へ忍んだのは、廻つて壇階子を昇る料簡、敷詰めた疊廊下で、突當りに尉と姥、胡粉の友白髪、朦朧と、高砂の松の翠黒く、此の白波の寄るさへや、湖に間近う、二枚の繪襖、幅の廣いのが閉つて居る。

畫師は其の形、描いたものと知りながら、フト立竦んだ。丁ど柱の燈の名残に映つて、見る見る内に明るくなつて動いたから。

繪襖の傍の障子が開いて、手燭した蠟の火を、胸のあたりへ取つて、淺黄の扱帯腰に緩く、中形の白地の浴衣を裳長き後姿、襖の繪の松の梢に丸髻を据ゑて、出でざまに立留まつたのは、お辻といふ年増であつた。

此の婦人は例として、主人巨山の此の館に留守なる折には、夫人の次の室に伽をして寝るの習ひで。今夜も二階に寝る處、旅の客の酒の世話などしたものが、寝しなからキヤくと、胸が痛み出したので、持病ではあるが、又然うでもない、夜中に打惱む聲などして、夫人の眠を驚かすのも、といふ遠慮、聞を換へたが、廁へ起きた。

お辻は此方を背後にして部屋を出たが、ものの氣に襲はれたか、然りともなう、手燭を前髪の邊へ上げて、半ば身を向けて、透すと啊呀！

聲をかける隙もあらせず、畫師はつかつかと臆面なく擦寄つた。

空 薫

六十九

「あ、貴客、お小用場でございますか。」

お辻は乳の下を片手で壓へて、すり落さうな扱帯をかこひながら、會釋をしようとして頭を下げたのを、突然肩越に猿臂を伸し、頸を抱へ込むやうにして、容赦なく襟首を取つて掴んだ。

「あ、」

「黙れ、叱、と言つた片手には疾く既に短刀を抜いて、お辻の頬にかけて目前へ切尖。

「聲を、汝、聲を立てると、鱗突きた、女郎、此の板戸へ縫ひつけるぞ。」

お辻はハアと引呼吸で、ばつたり手燭を取落すと、押伏さつて、蠟の火は顔の色とともに眞蒼になつたが、一時消えもやらず、取亂した寢衣の裳へ、じり／＼燃え移らうとしたのを見て、畫

師は猶豫はず、サソクに爪尖にかけて、横ざまに蹴た、向うへボン。

手燭は火を點じたまゝ、するくくと廻つて、長く一條の赤い尾を曳きながら、遙に、件の繪襖から右へ折曲つた、同一疊の、や、幅の狭い廊下へ飛んだ。咄嗟の間に、横手に大きく凹んで暗い、階子段の光澤やかなのを一ツちらりと照して、やがて消えた。

畫師はお辻を引きつけたまゝ、ぢつと瞻つて暫時、寂——寞。

女は固より齒の根も合す、がたくがたく震ひ戦く。

耳へ口をつけるばかりにして、

「慫う、姉さん、慫う……仕様がねえな、宛然、身體から氷柱でも下りさうだ、震へるない、震へるない。お前を何もするんぢやねえ、どうもしねえから、きように案内をしてくんねえ、夫人は何處だ、よ、内の夫人は何處に寝て居るよ、二階だらう、な、二階だらう。」

二階は分つてら、さあ、一所に歩行んで教へねえ。些少でも聲を立てると、容赦なくづぶりだぜ、馬鹿な眞似をしやあがるな、分つたか、うむ、前へ歩行だ。密とだぜ、可いか。そらよ。」と放すと、最うぐつたりで、お辻は繪襖に背をつけたが、甲斐性なく、腰からすりこけて膝が疊まれさうになる。

「チヨツ、」と舌打、直ぐに緊平、小脇を搔込んで立たせると、足の尖を二ツ三ツ、向うへ突いて

拵いたが、踵も更に下にはつかぬを、其のま、抱立ちに押並んだ。

畫師は心中、案内は名所に着いての上と、直に階子段を志して、今の廊下を折曲らうと、拔足で出る、途端に、一壇低かつたのを心着かず、踏心地が浮いて空、ハツと思ふとづしりと音。

驚破琵琶音、深更の枕に響いて、前刻以心傳心で何事ともなく今夜を約した、幸之助の忍びしよ、と閨の内には夫人美樹子。

絹蒲團を合せた上に、勝色の羽二重、熨斗目の搔卷、唇の紅に含んで、深々と引被けた。

小夜衣厚うしては、胸苦しとて重きを厭ひ、幸之助の言、鶯の聲、鼓の音など身に染みて、寒氣立つたる宵のほど、寝衣は袖を襲ねて着て、粽の頃に取りのけた、屏風をさへ建てさせながら、夜具は猶輕らかに、薄きを一ツで打臥した、其効もなき物思ひ、琵琶胸を貫いて、心の曇ならねども、蒔繪の臺に薰きしめたる、薄紫の香の煙、縷々として濃かに、床の間の柱に活けたる、白き芍薬の蔓に消えんか、はたそれ、銀屏を漏れ出でて、忍ぶものの便宜とならむか、黒髪近き萌黄の紗の、行燈のあたりに唯、馥郁として立迷へり。

七十

幸之助は着たる寝衣の袖の色の、障子の紙に映るばかり、近々と夫人の閨に忍寄つた。物語は

前後したが、これは、旅書師の曲者が、革靴の中から短刀を出して、や、其の仕事に取懸つたよ
り、頃刻以前の事である。

裏階子から廊下を傳ひ、一步踏むにも心して、足の数は少ないが、憚り多い物音は、遠くから
枕を襲うて、次第に胸に轟くばかり、隔ての障子一重となんぬ。衾の中なる裳は何處？
寂然たりし夫人の寝姿。

此の時、搔卷の裙に花誘ふ、風少し渡るやう、身じろぎに揺めいて、枕にかけて纔に漏れた指
尖に、密と天鵝絨の襟を掲げて、するりと半身を起したが、勝色の熨斗目の袖すらくと蒲團に
垂れて、半ば肩を這つたれば、紅絹裏はらりと翻つて、雪なす頸を彩りたる、人柄に似ぬなまめ
かしさ、ひそかに然し氣は烈しう、急に枕を上げたる頭の、黒髪の濃きも、中差の閃くも、重き
に勝へで支ふる状に、細腰の邊、朱鷺色の、扱帯の端に支いたる手に、一通の文を壓へて持った。
唯見れば其の文、長きを緩かに巻き込んだ、末の方手に亂れて、今しがた讀んだのを、一度搔
卷の中に取隠したものらしい。

其のま、懐中に入れようとすると、胸の亂れにおのづから、衣紋や、寛ぎで、頸筋白く膚透き
たり。恰も可、空薫の煙一際立籠めて、恁る姿に吉野紙、霞を薄く蔽ひたれば、夫人は獨心易げ
に、唯行燈に顔を背けた。

障子の外にイむものは、未だ一聲も懸けないのである。

「幸之助さん？」

聞き馴れた夫人の聲も、恁る際には細きに過ぎた。

「幸之助さんなの。」

「はい。」

「あゝ、と受けたが、ほつと吐息したやうにも聞かぬ。」

「夫人。」

「……………」

「可いんですか、」

「密とよ、密とよ。」

廊下の夜風、音なく來て、香の煙が靡いたと思ふと、芍薬の花の傍に並んで、薄い光の行燈の
影に、フト立出でた少年も、品高く、姿清く、鶴に化したる神使の、夢ならでは見得べからざる
風情であつた。

開けた屏風のあとを寄せると、膝をついて擦寄つたが、指尖に動悸の傳ふのを、打震ふ袖に隠
し果てず。

「未だお就寝にはならなかつたのですか、こんなに遅く。」と口籠つて、先づ其の両手を支いたのである。

「幸之助さん、私は、」

と坐り直した蒲團の上、手で搔卷を揺りかけて、寝巻姿を包ましげに、

「あの、然うでなくつても、よく寝られませんが癖なんです。貴下が恚うやつてお出で遊ばすといひますもの、どうして寝つかれはしませんよ。」

「申譯がありません。」

「否、それにね、床につきましたから、つい今しがたまで、幾度も繰返して、前刻あちらで別れます時、私に下さいました書いたものをね。」

「唯、貴女に文なんぞ、汚しいとも思召さずに、兎も角も、讀んで見て下さいましたか、破つてお棄てもなさらずに。」

「はい、此處に持つて居りますよ。」と夫人は、いと切めて、もの優しく、其の胸をおさへていつた。

幸之助は曇つた聲で、

「堪忍して下さいまし、貴女には仇敵です、貴女には仇敵ですが、両親ともない私に、唯一人の

姉の事、貴女へ御祝儀に差上げるつて、あの、壽留女を革靴に入れて、金澤をたちます時から、もう死にます氣で参りました。」とはらくと落涙した、膝と膝とは遠からず、芙蓉に宿る月影に、白露の散るかと思ゆ。

七十一

「まあ、幸之助さん、此のお文の様子では、過日からお話の次手に、兄さんくとおつしやつたのは、貴下の眞個の兄さんぢやなくつて、お妻さんの、旦那様のやうですね。」

「然うです、其の義理のある兄と申しますが、此方の巨山様から、美人の繪を注文されまして、久い間、未だに出来上りません畫師なんでございます。」

「私は、貴下のお姉さんの、お妻さんとは仲よしで、堅川の宅へも来て下されば、お家へ伺ひましたことありますよ。其時分の事は、うろ覚えなんです、義理ではない、實のお兄様がお一方、おあんなさいましたやうに存じます。」

「え、多見次といふのです。其が眞面目にさへ世渡をして居てくれますれば、姉だつて身を恥ぢて、貴女に長年、お手紙も差上げませんやうな、賤しい稼業をするにも及びませんのに。散々人様に、顔向けもなりませんやうな不身持を仕盡しました。結局に、あ、彼是四五年にもなり

ませう、行方知れずになつたんです。」

とかことがましく語つたが、血統の事を身に受けて、極り悪さうで、あはれであつた。夫人は思ひ遣つて、染々頷き、

「誰しも然う、両親に離れますのが、何より不幸福なんですものねえ。」

「ですが貴女は、お幸福、お羨しいお身の上ではありませんか。」

「些少も幸福な事はありませんよ、何故？え、幸之助さん。」

「だつて、貴女は、世の中の人、神とも佛ともいつて、後影を拜みますやうな御主人がおいでです、未だ御両親もお達者ですもの。」

「否、両親には最う疾に別れましたよ。」

「あの、堅川のお方々は？」

「幸之助さん、私はね、此家へ縁附いて参りました、其の時に、親たちには別れたのです。」と物思はしくしをれし状。

夜風や厭ふと最惜く、却つて少年が慰め顔に、

「それでも貴女、巨山様が在らつしやるではありませんか。」いひも果てぬに夫人はや、物鋭くいひ返した。

「其の巨山が、どんな人？幸之助さん。」

と膝に手を置き、

「其の人は、貴下の兄さんにお金子を貸して、人前は、美術家を扶けるやうなことをいつて、自分勝手な、顔の佳い婦人の繪を描け、もしそれが出来ないなら、金澤の小屋（彼の所謂、お救小屋也。）に入つて、九谷焼の赤繪を描けと、催促をするといふんぢやないの？は、其は、否、幸之助さん、巨山が直接でなく、中へ人が入つて居ませう、居ませうけれども、使ふ者が、そんな情ないことをいひますのが、最う主人に、真心のない證ではありませんか。」

と少しく激した趣で、薄く脛に血を染めた。幸之助は幾度も、言はんとして、いひそびれたやうだつたが、此時、慌しう、

「だけれど、ですが夫人、貴女の清いお身體に、今夜のやうな、こんな魔が魅しましたのは、何も、必ず、巨山様の不徳なのが、お身の上へ及んだのではありません。全く私どもの心得違ひ、こんな事がありますから、ためしの少い、果報なお方が、不幸福だの、未だ生きて在らつしやる御両親に、分れたのと、おいはせ申すんでございます。」

夫人は寂しく微笑みながら、

「貴下は何も、然うお瘦せ遊ばすやうに、私のために、御心配には及びません。」

たとひ貴下と恚うした事で、私の身がどんなになつても、些少でもね、幸之助さん、貴下の所爲とは思ひませんよ。

貴下は鼓ばかりでない、舞も謡もお上手ですから、杜若を拜見すれば、業平と思ひますし、松風を拜見すれば、須磨の海女と思ひました。それと同一で、恚うやつて、忍んでお出で遊ばしたのは、幸之助さんとは存じません、私に深い罪障がありますために、ものおもひをさせようと、神、佛、魔か鬼かの計ひ事とあきらめますもの、なんで貴下を怨みませう。」と靜に手の上へ、人目を包む寝衣の片袖。

馬之部

七十二

「貴下、さあ、お心が濟みましたら、此處へ来て寝なさいまし。而して、お姉さんの處へ、不義ものとも、いたづらものとも、然ういつてお上げ遊ばせよ。

世の中にあるまじい、心得違をする人は、たとひ身を刻まれても、何處までもいたづら事を、秘すのが當前。

其に貴下と私とは、何暗い事もなくつて居て、浮名を立てますのも因縁づく。殊に貴下はお年紀も少し、これから御出世を遊ばすが、主のある年上の私などと、道ならぬのが聞えましたら、まあ、どんなに、お名前の汚にならうも知れませんが、それも御覺悟の上ですもの、私は自分の事なんぞ、庇ふ事は些ともない。

其のかはりねえ、幸之助さん、折入つて貴下にもお願がありますよ。」
幸之助は手を取られて、身を背けて俯向いたが、此の一言に向き直つて、

「夫人、どんな、どんな事でも、生命にかへて勤めます。」

「否、貴下のお生命を下さいましと申すより、最う一倍、御難題かも知れませんが、承知して下さいますかえ。」と夫人は藤たく打額いて今更ながら瞻つた。

「貴女が、口へさへお出でしたら、直ぐに、はいと申すんです。」

「屹と？」

少年はものいはず、唯張のある清い目に、一個誓の字を示して待つた。

「お、そんなら更めて申ませう、前刻も一寸いひましたが、貴下もう家へはお歸りなさらないで、一生此處に居て、私たち巨山の養子になつて下さいますか。」

「お宅の御養子？」

「巨山幸之助さんに、おなりなすつて下さいまし、主人も望んで居りました。」
幸之助は驚いて、

「こんな御大家の相續人に、
太く自ら卑しむ口振。

「勿體ないことをおつしやいませ。貴下は何か此の家を大したものに、お思ひ遊ばすやうですが、私から見ますとね、玉のやうなお身體を劍の山で砕くのですわ。」

「え、分に過ぎた、御養子にはなれませんが、何の仔細か知りませんが、劍の山で砕くんだとおつしやるのが眞個なら、お言に従ひます、何の其を厭ひませう。」

「あの、私の子になるんですよ。」

幸之助は猶豫ひつつ、今瞻めたる夫人の目に、無量の思の籠りたるを、打守り、打守り、呼吸を引いて、唾をのみ込み、

「貴女、貴女、それで、もし浮名が立ちましたら、母子の不義ではありませんか。唯これだけでも人ではないのに、然うなれば畜生です。」といふ唇も結ばつた。

夫人の頬に鬢がこぼれて、

「はい、畜生です。其の畜生に、成つて欲しいと申すんです。お生命をと申すよりも、御難題と

は此處の事。幸之助さん、人には見せないものですが、貴下、背入れて下さるなら、お目にかけてたいものがある、まあ、此處へ。さ、と身を背け、肩を落して、動きも得爲ぬ幸之助に、搔卷の片袖の、紅絹の裏の見えたるを、はらりと投げてぞ打掛けたる。絹蒲團に手を差入れ、枕の下から取出したは、一冊小形の覺帳。

「……」

「まあ、御覽なさいまし。」
「……」

「まあ、御覽なさいまし。」
「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

一……町……番地……………士族 何某

一……町……番地……………平民 何某

一……町……番地……………士族 何某

いづれも、何某とした傍に、生、年月、または歳幾歳と小書あり、族籍の下へは各自の職業が記してあつた。

裏を返すと、馬の部が此處へも續くを、何心なく祝めて行くと、人数凡そ三十七八、控の三枚目あたりから、

牛之部

一……町……番地……………平民 何某

一……町……番地……………士族 何某

これも同一くらの人数で済む、あとが、

犬之部

一……町……番地……………平民 何某

子丑寅卯と書く、十二支の文字とは異なつて居るが、恐らく是は救小屋に養はれる人々の、干支を部類分にしたのであらう。越路の雪にも、都の花にも、匹儔あるまじき美人の、湖の女王と呼べる、夫人と、同一閨、ひとつ衾の中にしては、これを讀むのが、天の命であるが如くに覺えて、幸之助は疎にせず、一人々々見て居たが、偶然歳は同断で、羊と猪、猿と犬と、部類が違ふのに心着いた。

やがて發見したのは、辰、虎などの類がなく、熊、鹿などの種類のある事。

これはと思ふ、枕許は障子の外とは夜と晝、二人の他には照らす人なく、仄ながらも銀屏に、映り榮えたる行燈なり。燻ものとても互の袖に香を留めて消えたる折から、芍薬の影も明鮮に、更くるにつけて、目も冴ゆる、敢て燈を寄するに及ばず、奇なる哉、帳簿の面に、猫が出た、鼯が出た、狐が出た、狸が出た、呀！貉さへ顯れた。

「夫人。」

讀むものに身を曲つて、打背いて居た夫人が此の時、膝の邊に頼杖した、幸之助の肩にソと手をかけて、耳許に鬢の薫、齊しく、控帳を差覗いて、

「見て、幸之助さん。巨山はね、養ふ人を、内證で皆畜生にして、其を樂にして居るのです。私たちが自分だけでも、畜生になりましたら、せめてもの申譯ではありませんか。貴下死ぬより辛い

でせう。

と近く囁くやうにして、顔とともに半ば其の口許を袖で蔽うたが、たとへば是が新枕の初言であつたのである。

「これを見た時の私の驚き。あ、勿體ないことだけれど、親の言に背いても、道や教には違つても、婦女といふものは、兎も角も、一度自分で思つた人に、添ひ遂げねばならぬもの、先方へ心が通じなかつたら、獨りで思死に死ぬものと思ひました。

幸之助さん、私は、あの、鶯籠がそれだつたの。學問をなさるとかで、暮に雪の降る中を何處へか行つてお了ひなすつた切、東京であらうと噂ばかりで、規矩夫さんのお行方のお知れない内、私は嫁入する年になつて、両親にも勧められるれば、自分もついで、何ういふものかうまれつき、蟲さへ最惜い心から、五百、六百の人を救つて、活きた佛といはれる人の、名も、行も懐しくつて、一所に働いて見たいばかりに、看護婦にでもなつた氣で、縁付いたのが悪かつたの。慈善だの、どうのつて、婦人が生意氣なからですよ。

幸之助さん、恚う愛い、辛い、屈託が重つては、疾く死んで了ひたい。

私が死んだら魂は、あの籠の中に行きますから、貴下、紫の調をかけて、綾の鼓でも打つて下さい。それこそ、眞個に、鳥が居なくつても啼きますよ。」といひかけて、笑顔になり、

「まあ、何の、私では、鶯の聲がしよう、こんなに罪が深いもの、大方梟になりませう。あれ、梟では、どんなでも、餘り私は情ないよ。木兎にでもなりたいねえ、晝の中は盲目だけれど、夜だけでも幸之助さん、せめて貴下のお顔が見たい。」

あはれ、あどけなきまで崩折れて、熱と瞻めた目に涙、瞻められたる目も涙。

七十四

暫時して否、否、否、否。

「最う、然うやつて、死んで了ふのが望たけれど、それでは一旦、兎も角も主人にした巨山に濟みません。

何處までも辛抱して、何にも知らないで、世話になつて、拜んで難有がつて居る大勢の人へ申譯に、心ちや、恚うやつて、生きながら畜生道。地獄へ墮ちた苦惱をしても、蔭になり日向になり、長い内には、主人の心を改めさせて、眞個の慈善者にしなくつてはならないと、思ひます。

また生意氣なやうですがね、神佛が悪魔になつては、どんなにか、世の中の道が廢りませう。

あ、いふ風で、恚うやつて、まあ、宛然國中の、道德の龜鑑になつて居る巨山が、實際恐しい人非人と知れますと、向後世間は何につけ、義理も情も疑うて、善人を陥れるやうにならうも知

れず、而した日には、通りがかりに年寄つた乞食の手へ、報捨をするものも、人目を忍んで、氣をかねることになつてもなつて御覽なさい、仁も徳もなくなりまますから、巨山一人の爲ではない、何うしても一心に、思直させなくてはならんのです。

え、幸之助さん、唯貴下だからいひました、餘所へお漏らしなんぞなさらないと、屹と見込みましたからですよ。

お身持も御氣象も、今時の方には珍しい、まるで昔の名僧知識の、幼立でも在らつしやるやうな幸之助さん、私は貴下を便りにする。

何うぞ私たちの子になつて、巨山の跡を繼いで、眞個の佛にも菩薩にもなつて下さい。

もしそれまでに事が破れて、私が死でもしましたら、今もいつた籠の中へ顔を見せて下さいまし。何事も、まあ、内密。貴下と今夜憊うした話も、お望み通り、お姉さんの處へばかり、あとは祕されるものならば、神佛にも祕したい。最う此の帳面といひ、私たちの此の姿、其處にある行燈の、消えずに見るのも恥かしい、芍薬も清い花、汚はしくつてしぼませう。」

と同一姿に打ちしをれて、また弱々と坐を崩し、

「あ、何や彼や思はうより、憊うした處を人に見られて、それがもとで離縁をされて、尼にでもなりたいやうな、それとも、些少の間、たゞ目ばたきをする間、何も考へる暇のない内に、一

思ひに死んで見たい。

なまじつか、ものの道理を教へられて、曲りなりにも婦人の身で覺えたのが怨めしい。それも眞に道に背いて、操を破るといふではなし、貴下とだもの、幸之助さん。浮名に立つて、罪を被て、殺されても死たうござんす。

と思ふ下から直ぐに自分で、自分が意見をされるもの、何といふ因果でせうね。」

身を震はした夫人とともに、幸之助はおろ／＼しながら、

「夫人、貴女のおためになら、私は畜生になりませう。畜生になつた上は、畜生に姉はない、義理のある兄もない、其の二人に頼まれて、前刻手紙で申しましたやうなわけで、貴女の操を名だけても、破らうとしましたが、最う私は義理ある兄にも、姉にだつて、何事も、一言もいつては遣りません。」

家へも是切歸りませんから、犬、猫でも蓄つたと思つて、お傍に置いて下さい。」

と膝に縋つた懐かしさ、抑、何といふ事ぞ。

「まあ、幸之助さん、勿體ない、飛んだ事。」

と取つき伏した背の上に、夫人は額を埋めたのである。

奈落へ響く針の音、慙る折には耳を打つて、幽な聲音聞えたのは、旅の畫師が疊廊下を彼の蹈

亡つた其である。

衾の蓋を拂つたやうに、幸之助は其のまゝするりと、絹夜具から身を落した。

思はず枕に手をかけて、夫人も安からず打傾くと、早や階子段にかゝつて響いた。ものをもいはず、ソツと手を取り、疾く疾くと目で教ふる方、——幸之助は入つた廊下とは反對なる、襖を開けて次の一間へ。

夫人は手疾く、控帳を桐の小形の箱に入れて、取隠さうとすると、其の暇もなかつた。

みだれ髪

七十五

「いや、おどろいたの候の、」

「多見的、まあ回生劑を一杯、そら、ぐツと遣つけねえ。」と小船の中で、茶碗を一個、濡鼠の曲物に突着けたのは力松で。

曲者は旅の畫師、即ち悪工夫の隨一人、屋島が稱へた水の手の豪傑で、河童の多見次といふのである。

「情ねえことをいふな、如何に仕事を遺損なつたつて、湖水を乗切つた處が、せめてもの取柄ぢやねえか、明智左馬之助といふ落武者だ、回生劑にも何にも、水を飲まされて堪るもんかい。」

「何か負惜みをいつてるぜ、何が取柄だ、お前の取柄は蒟蒻だと見えて、ぶる／＼震へて居るぢやねえか。」と力松は笑ひつける。

多見次は横頬の水を拂ひ、頭を掉つて、

「門天心太、時節柄寒くつて堪らねえ、こんなずぶ濡な奴を巻いてるより、素裸が薩張すら。ああ、もし、お嬢様眞平御免なすつて下さい。」と帯を解きながら一寸お辭儀をした、舳の方にはお龍在焉。

「さあ、おい、お嬢様がお心づけの回生劑だといふに、水なんぞ飲ませやしねえ、がぶりと遣んな。」

「然うか、」と圖はづれにいつて引手繰つて茶碗を取つた、多見次は紺緞の兩肌を脱いだので、大胡坐の腰に捲いたなりで、ぐいと呷つて、

「五臟六腑、難有え／＼。」

「小頭、むさくつても、もし、是をお着なさいまし。」

と、上に被つた筒袖を脱いで出した、櫓を操る者は駕籠舁の要藏なり。

力松が取次いで、
「眞個に此の人は重寶だ、駕籠も昇きや、船も漕ぐ、損料も貸すからね。」
「へ、へ、へ、船は冷えるでござります。」

「寒國の人は用心深えや。」

「一寸多見次さん、私も損料を貸さうね。」

すつぽり絡つた赤毛布を、お龍は臙然と脱いで出した。

「こりや頂きます、何、それには及ばねえんですが」と天窓から押頂いて、多見次はお獅子の見得である。

力松 傍より、

「被つた、被つた、水も被りや、仕事も被る、能く被る男だぜ。」

「慫う、力、然ういつてくれる事はねえ、然しこんな處まで、お嬢さんには御苦勞をかけて、代物を持つて來ねえんだから、面目ねえ事は面目ねえのよ。」

「其處で被つたか。」

「まあさ、面目ねえことは面目ねえが、旨く行つたにや行つたのよ。何だつて土俵際まで寄附いたんだ。まあ昔から、いくらも美女を盗み出す術はあるが、水潛をしてよ、心中を反對に、婦人

と抱合つて浮上らうといふ寸法は、私でなくつちや出來ねえ仕事だ、其處は憚りながら河童だからな。」

「む、其料簡が悪かつた、河童なら沈めば可い、浮上らうとしたから不可え。」

「此奴は凹んだい、」

「直ぐ其處へ水を装れ、」

船中哄と笑つた。行方も知れぬ艚の音のみ、ぎい——ぎいと、水に響いて、暗澹たる湖心のあたり、幻の影も見えず、聲は中空を音信れて、風が囁くかと物凄。

「だが、遣損ひにせよ、何だぜ、兎も角も要心斯の如く、嚴重な構の中へ、手でも付けて見ようといふのは私だからよ。力なんざ、いくら得手だつて、火もつけられるもんぢやねえ。第一、一本のやくざ兄哥で、化け方を知らねえからね。風てえ字の印半纏ぢや、門の際へも寄りつかれはしねえんでさ。え、お嬢さん、長靴の大將の、藤五郎さんで思ひついて、多見五郎と申す畫師、諸國一見の僧にて候あたりなんざ役者でした。」

いざといふ大事な場合に、ハタと出撞したのが、弟野郎、幸之助ツて奴だもの、いや驚いたの候の。」

「それも入口で見着かつて、胸倉でも掴まつたんだと、断念は好んだがね。首尾よく夫人の聞へ推參に及んで、計略通り、引抱へるとまでになつてからだから話らねえ。

またね、其の他にもどちを行つた事が一ツあります。何しろ、向うへ廻して、些は骨のあらうといふ奴は劍術つかひ唯一人。

勿論、話の中に、飛んだ者が最う一匹、偏盲で鐵砲が上手といふ、念の入つたのが顯れてね、是にや氣が重なりかけたが、何、犬同然の外まはり、中で仕事をする段には、そんなに驚きもしませんや。

あとは婦人ばかりぢやねえか、餘り落着き過ぎて、お前、二階へ行く途中でな、厠に起きた面の好い年増を一人、案内者に抱込んだと思ひねえ。腕が利き過ぎて、女郎め、足腰が立たねえから、するツカ引摺つて歩行かれるわけぢやなし、胴中を緊めつけて抱へながら、階子段を、みしりくさ。

胸すとな、灯影のさしてるのは一室ほか見當らねえ、確に其だらうと思つたが、くだらねえ身代にでも打つかつちや、氣が利かねえから、此の爲だ。

さあ、夫人の聞は何處だ、と嚙りつくやうにして、まあさ聞け、密と尋ねると、女郎め、抱いた腕に丸鬚をがツくりと仰向いて、ハアもスウもないこそ道理、冷い汗を流しやがつて、齒を喰メめて、お前、目が上つてら。驚いたのと、恐怖えのとで、氣絶つけたもんだらう。

べらぼうめ、山雀を締めたつて、恙う疾くは片附かねえ、人間の癖に意氣地がなさ過ぎると、小癩にも障つたが、言句をいふのは此方が無理だ。

折角の案内者役に立たず、強力を負つて上るも馬鹿々々しいから、直ぐに其處へ打棄らうとしたが、氣がついてな、最うするくになつて、爪尖へかゝつて居た、女郎の扱帯を引手繰つたわ、花を束ねて歸る氣よ。其のまんま横倒。

「亂暴だわねえ、とお龍が暗がりて聲をかける。

「え、何、亂暴は初手から通越して居るんです。第一水上さんの何なんだけれど、御當人は些とも御存じねえ。一體私達は、無理無體にも思つた事を思通りに遣つける宗旨なのに、お頭があんなに惚れた女を、何うする事も出来ねえぢや、だらしがねえ、何とかして其の巨山の夫人ツてのを、別荘から掴み出す法はねえかつて、お嬢様、貴女が亂暴の發頭人ぢやありませんか、は、は、は、。」と説破し得て多見次は笑つた。

「ほ、ほ、ほ、そりや、まあ、然うだけれど、だつたつてもね、」

「串戯ぢやありません、お祖師様の村岡先生の方が、未だ未だ、お頭を連出して、松原から、遠くで鼓の音を聞いて居なすつた位ですぜ、貴女から見りや、お手柔かな方だ。お、お手柔かといやあな、力。」

「うむ、」

「捨の野郎は随分よ、宵にな、既の事、白髪頭を一個、あの太斧で斜ツかけに破らうとしたぜ。」

「可いぢやねえか、新工夫の白髪染だ。」

「お前も直ぐ、それだ。まあ、待ちねえ、そりや又後の事よ。」

其處で構はず、縁を徐々、灯を目當に行くと、誰？といふ尋常ならねえお聲がかゝつた。

唯それだけで、最うちやんと知れた。どうしたつて、鼻の大きな腰元が、入らせられませうとは自然違つてら。

忽ち亂入に及んだがね、一目見ると、驚いた、いや、其の艶麗なことといふものは。一度此方のお嬢さんを見たものでねえと、人間とは思はれぬえぜ。

きやあといや抜いて見せる、あれと遁げりや、機會にふん掴めえるが、晝に描いた別嬪が晝に描いた強盗を見るやうに、恍惚として静まつて居られちや、取つき端がなくなつて手持不沙汰だ。

其處でな、枕許にあつた、小形の箱を壓へて居たから、先づ何がなしに其奴を攫つた、眞先に手を引捻らうと思つたが、餘り綺麗で行り切れねえ。

七十七

「それは！ツて、始めて、お前、夫人が何だ、驚いた顔をしてよ。其の搔攫の小箱をたくし込んだ、私が内懐の腹巻へ、夢中に手をかけたから、其處で漸と、ぐいと其の首を掴んだ。」

罪も怨もねえ人だ、お氣の毒なやうさ、こんな者に手を持たしたのは、恐らく娑婆以來だらう。」

「多見、手前だつて、、、、、だ。」

力が冷評すのを耳にも入れず、河童の多見は乗氣である。

「吃驚してお前、立てた膝を釣られたやうに胸を反して、弓形に顔を横にしたい。本来なら、此處で頬冠を取つて肩へかけの、湯ぢやねえが濡言句のある處だ、素的に粹だぜ、それとも有金残らずなら凄いがな、どツちも通用のならねえ役だ。だつてまさか赤合羽の化けたのぢやあるめえし、夫人、お迎、ともいへねえから、丁ど可い、件の箱よ。こいつは大事なものですか、と先づ遣つて見た。」

夫人顔をお上げ遊ばし、殺されても、其は、とある。掴まれた手にしろ、懐中の箱にしろ、執ち道こりやお前、お大事なものに相違ねえ。此方はいひがかりが出来たから、シイ、お静に、慥

う、私と一所にお來でなせえ、然うすりやお返し申します、ツていふとね。

あ、參ります、は優柔し過ぎたが、大分お覺悟の様子だつた。

直さま片手に用意して、それ一件の扱帯だよ、其のまゝ、手首に巻いて、淺黄の長いのを夫人の背へ引かけながら、腕を祕と捻ぢて、背後へ廻した。あれ、私は、私はおとなしく行きます、とおつしやるから、もし手籠にするんぢやねえんです。貴女を恠うやつて擔いだつて、こんなお邸だ、出口はねえ。向うの雨戸から、突然湖中へ飛込みます、尤も水練に覺えがなくなつて、掛つた仕事ぢやありません、其の上念のために、夥間の船が來て待つて居やす、お身體に別條は決して無えが、貴女の手足が利くが最後、じたばた遣られると、直に私が冥土のお供だ、斷念めて辛抱なせえと、裾へくるんで御足も一緒にぐるぐる巻。

「恐しく丁寧だぜ、御足ツていやあがる。」

「だつて勿體ねえやうな氣がしたからよ。ぐいと小脇に抱へ上げると、鬚ががツくりとなつて、中差がきらりと抜けた時は、悚然とした、後光が射して、目が潰れるのぢやねえかと思つてな。

しかし、此方の短刀も、抜きかけて居たのが、納まつた、尤も前方の出やうに因つちや、水上さんの名を出して、其で優柔くすれば可し、其上で、なほ人殺とか、きやあとか吐しや、お頭は片思ひだ。どうせ、引張り出したつて、おもしろくは行くめえから、然うしたら、構ふ事はねえ、搔首にして逃げようといふ肚だつたが、物事恠う穢穢に行きや、うつかりお頭の名をいふんぢやねえ、壁に耳だ、と思つたから、一切黙りで居たが此奴は大出來。

いはねえこつちやねえ、次の室に弟野郎よ。其時裏の雨戸をといふ氣で、次の室まで出ると、暗がりから、兄さんは、や、驚いたの候の。

四の五のいふ場合ぢやねえ、其處退け、といつたが背かねえ。悪くすると、お兄上、貴下様はな、と出かねえ代物なんだから始末が悪い。二ツ三ツ揉んでる内に、どしんばたんどた〜どたと恐しい音がすると、二階から轉げ落ちた奴がある、年増と見えたね。女郎め呼吸を吹返すと、場所が善くねえ、二階の上り口だつたから、一堪りもなく轉倒。

南無三と思ふも遅いや、人殺しいーと金切聲。

あ、不可え、苦手の劍術、傳内め、角鏢で五尺寸延び、無反といふのを、丸太握みで、眞赤になつて糺上ると、自分で手で連れ込んだのが、是だもの。

一言もなし、素破拔さ。

幸之助を搦みつくね。

これが以前の年増だと、楯にも銃丸除にもなるんだが、お大事のもので、然うも行かず、残念だが向うへ落して、さあ、身輕だ、畜生、一番立廻らうかと、逆上ちや見たけれど、なまじツか

抜いた處で、耳ツこじりに大刀ぢや、鯨に鱈といふもんだ。」

七十八

「其處で何事も扱置いて、命あつての物種だ、背後へ飛退りながら、雨戸を蹴外すと、照込んで乾いたと見えて、苦なしにばつたり。」

外れて落ちると、途中で行違つて、私はどぶん。あとは譚なしたが、此の船へ掴つた時は、些と飽氣なかつた、最う一息の處だつたからな、ものの五分と間があつて見ねえ、今頃は眞個の回生劑を、夫人に飲ませる處よ。

悪い事をしたといふのは、其の、年増の目をまはした奴を、段梯子の上り口に置いたこつた、何の最初不意打をくらつた時は、些少は手が鈍つたが、弟野郎だけだつたら、突倒しても來ようものを、あゝ。」

多見次は歎息するのであつた。
要藏は慰めぶり、

「それでも、能くお前さまの御氣象で、思ひ切つてお遁げなさりました。どうして彼の用心棒と來た日にや、かゝつたものぢやないでござります。前は、お城下の警察で巡査の指南番などを行

つた人で、評判の使ひ手だと申しますで。」

「だからよ、本人が旨いことをいつてるぢやねえか、ものに譬へりや鯨に鱈だ、はゝはゝ。」

「馬鹿をいへ、そりや獲物を較べたのよ。何、人間を並べて見りや、」

「對手は劍術つかひ、お前の方は河童さな。」

「不可えく、何しろ、恚う落武者では、一枚被せて貰つたのが見つけものだ、一言もねえ……が、待てよ、夫人が命と取替へさうだつた、其の小箱といふのは攫つたまゝだ。待ちねえ、いま取りはづした時、腹巻にくるんで置いたが、何ぞお土産にならうも知れねえ。」

と胴の間に蹲つた、膝のあたりを搔探つて、

「はてな、ホイ。」

「どぢめ、其まで失したか。」

「何さ、そりや確に此處にあるが、おやく、短刀も煙草入も落して了つた、だらしはねえ。」

「何も惜しいほどのものぢやあるめえ。」

「また生命拾をした癖にといふだらう。失したのは構はねえが、少々氣障だ、短刀は沈むから其で可しと、……煙草入だ、彼奴其處等に、ぶくく泳いではいしねえだらうかと思つてよ。」

「顔も隠さねえで仕事をしようといふ棄身な奴が、證據を上げられたつて構ひもしめえ、怯氣怯

氣するな、其處は已達が附いて居ら。」

「然うぢやねえ、然うでもねえ又、是で夜があけて、巨山の二階から、河童が沈んだあとを望遠鏡なんかで覗いて見てな、昨夜反返つた年増が、あれ、御覽なさいまし煙草入が泳いで居りますなんて笑はア。夫人御覽遊ばして、お池の鯉に、これよ、水門から出て、くはへておいでなか、好いなぶりものだアさ。嬉しくねえ。」

と船べりにつかまつて、然りともなく覗き込んだ。

力松貧乏動きをして、

「見や、星もねえのに覗きやあがる、餘程面くらつて居やがるぜ。」

と笑つたが、此の折から、人は船に其の姿を描いた、眞暗な湖は緑になつて、天の一方から地上へ此の大幅の水を横ざまに投げ擴げた、人々は急に雄大なる瀑を攀づるが如く感じたのである。無言で罅を押した要藏、ぎい——と肩を引きざまに空を仰ぎ、

「はあ、月ぢや。」

「お嬢様これです。」

と差出した小箱を受取り、蓋を刎ねた、お龍は眞先に白く照らされた月の顔、恰も龍頭の船に在る、艶麗な倅で。

「帳面だね、」

其の濡れたのを遠山に翳した途端に、ドツと一發、遙に浮城の土塀の上に淺黄色の煙が燦!

身動きもしなかつた、お龍の黒髪が、根から二ツに颯と分れて、はらり残月の下に肩に亂れた、

銃丸は、危く、元結を切つて外れたのである。

同時にざぶり激がか、つて、船が傾いたと思ふと、お龍の俯伏になるのを圍うて、三人すつくと立ち、呼吸を呑んで見るく内、其銃丸煙がフツと動いて、空に靡いたのが雲になつたか、月が隠れて、船も消えた。

時の石川縣の警部長、十時猛連、やがて此事を聞くや否や。

うたがひ

七十九

風流線

「貴官、台命に因りまして、私昨日、早速手取川方面に發向いたしまして、先づ其の取調に着手したでございます。」

金澤警察署詰の特務巡查大曲なるもの、十時に對して恭しく、

「え、豫て巨山家の塚原君から報告がございました、先夜たばかつて同家芙蓉湯の別荘に入込んで、夫人様を盗出さうといたしました不埒者は、今入村の小柳といふ飲食店で、知己になりまして、それから連立つて参つたのであるさうでございます。

で、其の知己になります節、同飲食店の娘松と申しますが、大に其の怪しい奴の爲に盡力して、取持つたといふ事は、貴官にも御存じの事で。

あとで氣が着きますと其時の様子は、如何にも飲食店の娘と、旅の畫師といふ奴と、情を通じても居たらしいと申します。

就きまして、最初松を取調べようと存じまして、界限の模様を聞合せます爲に、近頃傾斜地蔵の堂守を遣つて居ります、木谷の許へ立寄りました。」

大曲は此處で又深く一禮し、

「は、貴官の御精勵、御威光を以ちまして、近年、當縣下餘りに無事安寧でございます處から、

一時課者で鳴りました彼の木谷も、まるで見當違ひな、妙な事を遣つて居ります。は、」

時に生繁つた髻の中から口の幅充滿の野太き聲あり。

「そないな事は、まあ可え、疾く要領をいへ、どないにしたか。」

「はい、特別私への御命令、一身の名譽と心得ました上に、貴官に於きましては、巨山家とは御別懇で在らせられます。一分間も早く手懸を得ようと存じますから、機敏にも機敏を主として、迅速に運動いたしましたか、え、一體、私、演説意の如くならずであります、十町駆出しますより、一言申述べます方が、相後れまして、背汗の至、え、恐懼措く能はずでございます。」

「ごりや！」

「はッ失禮ながら、失禮ながら貴官に於きましては、豫て此の事を御承知くだし置かれます。」

苦り切つた長官の額を、密と上目にぬすみ見て、瞬いて眉を伏せた。

「はッ、」

「大曲、ぢやが成るべく急いでいへ、と詮方なげなる口調。

「恐、恐縮でございます。」

其處で堂守の木谷に面會いたしました、參詣も随分多數でございます。彼の男もなか／＼職務勉勵で、世棄人同然な事こそ勤めますが、野中に唯一人居りますやうではありませんで、以前此の探偵部屋へ三十分毎に顔を出しました、われ／＼の鋭い目の前で働きました時の様に、勞力を厭ひません。人に因り、柄に應じて、縦横に辯舌を弄びまして、一々慈善的寄附金を取立て居り

ます、と申しますのが、御別懇の間柄、巨山家のために、貴官お遣はしになりました、堂守の役目に就いて、決して其の、
「大曲」と少し急き込む。

「決して其の、不足がましい儀を申立てますではありません、自然また御鑑識を蒙りまして、表向き、私ども同然な探偵吏の端くれにも、お取上げが願ひたい、一生の望と申す事で、くれぐれ閣下の御健康を祝しましてございます。」

「敢て憤ることならず、健康を祝すといへば。」

「可え、そりや、可えが、急を要するは別荘の事件ぢや。大曲。」

「はッ、」

「き様、其の遅い疾には係はらんが、傍道へ入らんやうに注意せい。強ひてき様に早く饒舌れといはん、話を歩行けといふんぢや。」

と、十時猛連、我ながら警句一番して苦笑した。

八十

「丁ど私、地藏堂に参りましたして、木谷に用談をしました時は、十五六人、田舎漢の参詣がござ

いました。一々呼留めて、木谷が貴官、奉加帳に姓名を記させました、十五錢頭に七錢、五錢、其癖各々、國、所、郡、村、字から分家、本家、年齢まで、蠶々と饒舌り立てます。

貴官、どれも我勝でして、背中へ押累りますやら、肩から面を出しますやら、手の上へ手を出すやら、三面六臂の大奇觀でございました。はい。」

警部長は兎にも角にも、斷念めて、

「……………」

ものもいはず、黙つて聞く。もし、其の談話の本筋に關を据ゑて一喝せんか、大曲は例に因り、益々岐路に迂回して、流汗淋漓、山越をしようとするから。

「で、其の又それが必しもでございます、先を争つて寄附するではありません。唯我勝に名告を擧げるでございます、え、私心覺えに書留めました。」

と手帳を袂から取出して、嵌込んだ鉛筆を抜くと、薄い小さな耳に挟んで、やがて二ツにばらばらと開いたのを、兩手で持添へ、眞直に立つて、

「一、金七錢也、能美郡串村、字串トノ三百二十一番地農、鹽原金右衛門五十七歳、一、金六錢也、江沼郡動橋村字、……………」

十時はドンと洋刀の鐙を床に突いた。

「き様、そ、それは、き様、本件に就いて必要のある人物か。」

「はい、否、次の姓名をお聞き下さいまし。え、手取川架橋工事工夫中、柴田甚平、六十一歳、

「何い!？」

大曲は彌が上に口重く、

「此は其の、嘗て貴官が、巨山家の救小屋からお引取りになつて、お邸で小間使にお使ひなさいました、露といふ女の實父でございます、はい。」

「うむ、」と聞く耳を立てて警部長、卓子の上に、官服の腕を曲げたり。

「此の者が救小屋を遁げますと、直ぐに、五月十七日の午後十時前後に、お邸を出奔して行方知れず、目下おなじく台命に因つて、捜索中の女の父で。」

十時の眼は輝いた、其の髻は蠢いた。

「あ、何か、彼奴は何か、親父と一所に居るんかい。」

「は、それを聞きます前に、未だ事件がございます、……」

「大曲々々、」

と小聲に、更めて呼び懸けた、警部長は眉を擧めながら、口が裂けた笑を含み、

「君、君、といふぞ、君、もそツと疾く話せ。あ、何うぢや。到底か、き様、否、君其の迅速

な健脚で、此の室内を廻るやうにぢや、手取早くは言へんぢやらうか。」

「は、は、承知いたしましたしてございます、は。で其の事件と申しますのは、彼の親仁、柴田甚平と、奉加帳に姓名を記させまして、矢張、是は、木谷が注けましてございます。」

「其處ぢや、其處ぢや大曲、帳簿に姓名を留めたらば、唯留めたで解る。き様が代書したとは思はんで、なう。」

「恐縮でございます、はッ。」

名を留めましたは可いですが、扱寄附金となると出しません。志の日で地藏様を拜みに來たが、誰が、巨山の、と恚うでございます。

怪しからんことをいふのみならず、私顔はうろ覚えでございしますが、名は存じて居ります。

柴田甚平——露の實父。

些と取調べて見ませうと存じて、木谷に目配せをいたしました。

其處へ貴官。

私のお取り下さいまし、と申して、二十錢の銀貨を出した、所謂丸ぼちやで色白な女がございます、先刻から込合ひますので、控へて居りましたのが、歸途を急いだと見えまして、甚平のごたくが濟みますのを待兼ねて出ました。彼是日の暮時分。

例に因つて姓名を尋ねますと、小柳亭の松といふので、即ち晝工事件の當人でございます、はい。」

八十一

「木谷も其氣でございませぬから抜りませぬ、女の名を聞くと、直ぐ私に目で知らせます、私も丁と心得まして、暫時、……一寸尋ねたい事がある、と申して、歸りかけるのを留めました。」

極く溫和に申聞けましたけれども、後で其の、些と手荒い拷問やうをいたしましたのが、何となく蟲が知らせたと見えまして、あたふた取急いで歸らうとしますから、勿論、私、御覽の通り、角袖でありましたけれども、引捕へるやうに、松を掴へましてございます。

百姓ども、歸りかけたのが、じろく立つて見ますから、御堂を閉めますぞ、と木谷が申して、聊か權柄づけに追立てますと、どやくと小屋を出ます、其の混雜に紛れて、甚平もするりと抜け出して参りました。」

十時が目の色 穩ならず、

「大曲、其時は未だ露の所在を検べんぢやつたか。あゝ？」

「否、ぬかりましたではございませぬ、松の方が目下差迫つた事件でございませぬし、何の道最初

から、直接に今入村の小柳に参りまして、娘を引揚げようといふ方針ではありません。もし然ういたすと又、他に漏れまして、犯人が遁げますまいものでもございませぬで、内證で、手段を用ゐて、おびき出しますつもりで居る。」

「分つて居る、分つて居る哩。」

と荒かなり。

「はッ、地藏堂で捕へましたは註文どほり、機逸すべからずでございませぬ。甚平の儀は、追つて取調べまして差支へございませぬまい、工夫に交つて居りますれば、廣い中でも袋のもの同様と存じまして、見遁してございませぬ。え、失、失禮でございませぬが、私其の邊は……」

「ちよッ」と唯舌打して、警部長は激しく眉を上下した、それ斯の如く、速に後談の口を動かせとて。

「で、其小屋は掘立てではございませぬが、表の戸だけは出来て居ります。木谷が、がらくと眞暗に閉め込んで了ひました。」

眞蒼に溪河の水が見えまして、あの大巖の傾斜地藏は、がらんとした小屋ぐるみ、此處で闇魔の廳となりましてございます。

貴官、然うすると、茫乎して居た娘は、わッといつて泣出しました。

直に私役目を聞かせて、突然、申上げると、啖はして置いて、木谷と入交つて、先づ其の帳場見たやうな臺の上へ、私押直つて、木谷が嫌疑者の背後を塞いで、直にも捻上げようといふ意氣込でございませう。

一度其筋の探偵であることを申聞けましてからは、唯わななくと震へて居りますから、は、あ、此の様子では、強情も度胸もあるまい、直に縮こまつて白状をするだらうと思ひましたが、さて取懸りますと案外で。

奴等の癖でございませう、知らぬ、存ぜぬで泣くばかり。

容子を見ますと、迎も悪事の下働をしようなどとは思はれませんが、又其の初心らしい、生地らしい處が、却つて曲者でございませう。え、一寸申上げます。

といつて大曲は此時卓子の上で、手で壓へて居た手帳を見る。警部長も髯を長やかに突出して差覗いた、焦れ込んで、聞きよりも先づ讀み取らうとしたのであるが、ななく了解し得らる、やうな字體ではなかつたので、著しく額に皺の數を増しただけ。

「帯こそ紅入友染の唐縮緬處でございませうが、縞の銘仙の單衣を素膚になぞ着しまして、薄化粧で貴官、緋縮緬の蹴出に至りましては、今入あたりの田舎料理に、大根おろしを手傳つて居ようといふ風ではありません。いづれ旅人に情夫でもありさうな、的切曲物と睨みましたから、泣い

たつて、詫びたつて、拜んだつて許すことはありません。

それでも婦人でございませう、なりたけ手柔にいたして、宥めたり、すかしたり、おどかしつても見ましたけれども、はい、ななく強情でございまして。」

八十二

「唯何處までも、知らないくの一、張、泣いてばかりで、まだるこく、口で聞く位では埒が開きませぬ。で女の紅指と、人指を揃へて引伸ばしまして、貴官、尖を緊乎擱へて、指の間へ此の鉛筆を突込んで、ぎうく抉るんでございませうが、薄皮が火のやうになつて、こりや五體を貫きます。」

大概野郎でも音を上げるんでございませうが、澁太い女郎で、それでも呼吸を引いて痛がるばかりで、口を開かんでございませう。

此上は縛し上げるぞ、と木谷が威かしの持出ししました、捕繩が實物になつて、背手に緊め上げると、繩の端を梁へ潛らして、ぐいと四五尺、

「何をしたか、」

と警部長は髯を反して仰向いて、直立した大曲の額と一所に、圓かな眼で、室の天上を睨め上

げた。

大曲ハツと又頭を下げ、

「え、私も内々、些と手酷からうと申しました處、木谷が警部長殿へ御奉公、後日何事があらうと、自分一了簡にして其筋の名は出しますまい、一時も早くお檢の届きますやうにといふ熱心の餘り。

其も然うか、と私も同意いたしましたのですが、しかし又、木谷のした事がお氣に入りませんやうでございまして、同人立身の妨げに相成ります。其處は私から幾重にも、はい、實は警部長閣下、御内命にも、あの露は強情で不可ん、追つては骨を拉いでも、と申戲にも仰せられました、嫌疑者の松、何、これほどの事はと私も存じました處から。」

警部長口早に、

「あ、あ、構はん、構はん、どうもき様は、」

とばかりで厭な顔色、笑ふに似たり。

大曲も安心の風で莞爾、

「さあ、思ひ切つて釣上げますと、發奮は恐しいものでございまして、きやツといふと貴官。白脛がぶる〜と右左絡みついて土間を離れて、裾の眞赤なのが宙へ燃え上ると、髪が黒煙のやう

に天井から渦いて落ちました。

縛つた繩から火花が飛んで、屋根裏へ、幾筋も赤い襷を投げた形、めら〜と炎を吹きます。」

一喝して、

「大曲！」

「はッ、」

「き様も、き様も、木谷も、木谷も、うゝ、強情な奴を拷問は、時に因るが、人命に及ぼしては大事ぢや哩！」

「貴官、何を仰せられます。」

「何をとは何か。き様たち、梁に釣るちゆッて、嫌疑者の女に、洋燈など浴せたンぢやろ。うゝ、と呻る。

大曲は怪訝な顔で、

「否、放火でございます。」

「放火い！」

「放火をされたでございます。洋燈は唯假に小机の上に置きましたばかりで。

丁ど其の、松を釣上げました途端に燃出しましたものでございまして、呆氣に取られて二人

とも見て居りました。

戸が一枚鶴來街道へ、煽つて横倒れになりますと、火が廻つたと見えまして、戸外から、どつと黄色い煙が吹き込みましたが、赤くむら／＼と小屋一杯、屋根裏の炎と一所になつて松を引包まうとしました時、

(可哀相だよ、可哀相だよ、力さん。——)といふ婦人の聲が、道端で聞えますと、一文字に飛込んだ、年紀の少い工夫があります。

私は一目工夫と見ましたが、並んで遁げかゝつた木谷は貴官、一息に其奴に撲倒されて、わつてツて打倒れたのでございます。

直ぐに火に包まれさうでございいますから、腕を引摺つて遁げますと、戸口で摺違つて、今の其の工夫が、松を負つて飛出しました。

屋根がドンと落ちますと、火の柱の中に、歴然と水が流れて、向うの巖に色が映つて、極彩色の傾斜地藏。

向合つて貴官、街道の並木を小楯に、凄いほど佳い女と、大斧を擔いだ脊の高い工夫と二人で、悠悠見物をするではございせんか。」

浪裡白跳

八十三

「き様は何かい。」

「私は若い者でございませ、と鶴背を支いて手を休めて、けろりと答へた。

荒く詰るやうに尋ねたは、十時猛連、劍長く、氣短に、凄じい髻の勢である。

附添つた大曲は、紺緋に白の兵兒帯、脚絆、雪駄穿、尻端折、烏打帽を浅く被つて、見た處、

是で口さへ重くなくば、宙でも飛歩行きさうな身軽な探偵、手ぐすね引いたといふ意氣込。其の

鼻息の荒いのは、金澤から此處へ五里、手取川の架橋點まで、馬で乗立てた警部長に、徒歩して

然まで後れなかつた爲ばかりでない。

さて刈るべきはいづれぞや。見渡す限り磧と工夫と雑草ならざるはなき、大河と嶮山の間眇たる

哉其の一方に、深さ八九尺穿つた穴の、掘上げた大石小石丘の如きに貫かれて、串刺に長く八

ツ九ツ土手へかけて連つた、中央あたりに突立つて、彼方に石を鑿る火花は見ゆれど、此方に鐵

を打つ煙は立てど、遙に砂を運ぶ道は通へど、流は縁に翻れど、蜻蛉の留つた笠が、それかと

も見え分かず、眼を瞋らし睨めたるのみ、戀には子の日の小松さへ、鬼の醜草引煩らうて氣疾な
十時は、愈々焦つた。

「何を、こら、何かちゆうに、あゝ、き様何か。」

「私は若いものでやんすてえばね、
髻を嚙んで、

「うゝ、」と唸る。

大曲は堪へかねて、

「おい、おい、若いものは分つて居る、何であるか、とお尋ねに成るのである。き様一定の職務
があらう、職務がよ？」

「はあ、仕事かね。」

と仰山に分つたが、答ふる處は愚にもつかず、

「土方でさ、御覽の通りだ。」と道具の切尖を草鞋で一才踏んで見せる。
大曲が鉛筆を突出し、晝で描いてでも教へたさうに、

「そんな事は聞かんで可い、き様が土方であるのは面を見ても知れるのである。況やだ、本官が
此處へ來た時に、き様其の鶴背でコツコツ行つて居ただらう。いはずとも土方と知れたが、

例の歩行くのとは逆比例に、緩慢な大曲の口述を待つこと能はず、聲を勵して警部長、

「止せ！駄目だ此奴は。やあ、何奴か引捕へて聞け、大曲疾くせい、疾くせい。」

「は、は、唯今、唯今。」

といつてきよろゝ胸す、居まはりに七八人、同一やうな工夫等。耳の端に轟くばかりの鬼十
時の鬨聲叱咤を、空吹く風に聞き流して、猶且つ涼しさうな顔もせず、澄して仕事をする中に、
兩膚を脱いだ奴があつた。

先づ其をと、大曲が目をつけた時、却つて穴の中から半身を糺り上げて、ぬつと面を出した向
う顔卷の一漢子。

掘りかけの土に爪尖を踏張つて、底に溜つた蒼い水をものともせず、

「何ぢや、」と仰向いて聞く。

若い者でやんす件の工夫、

「何だか知らねえ、警察の旦那が無暗にブツブツいつてるんだがね、私ぢや分らねえとよ。」

「はゝ、はゝ、手前や方角だつて分らねえ。えゝ、もし、其の野郎は、から、父や母の顔だつ
て分らねえんで、はゝ、はゝ。旦那の其の洋刀を見て、飴ン棒と間違へなかつた内が未だ見つけ
ものなんですぜ。」

厭な事をいつて、また笑ひ、
「は、は、は、何か用かね。」

八十四

十時は即ち又唸つた。

「う、ぢやあ貴様に聞くが、水上といふものが居るな、鐵道局の技師、工學士ぢや、水上規矩夫といふのが、此の工事をやつとるぢゆうは、本官心得とる、うむ、居るか。」

彼の漢子、固より野人にして禮を知らず、這の顯官に對しながら、顛卷も取らないで、ぞんざいに頷いた。

「はあ、お頭だね、棟梁はおいでなさいますとも。」

「棟梁か、頭が知らんけれども、水上規矩夫といふ技師は居るのか。」と大曲が念を入れる。

「お前様ツたら、棟梁がなくなつて片時も仕事が出来るもんぢやねえんで、ちやんとおいでなさいますかね。」

十時は早や思ふ敵の、目前に顯れたやうに吼り立つて、
「何處に居る、其、其の水上は何處に居る。」

烈しく問ふと、遣りばなしにきよとんとして、

「そりや分らねえさ。」

「何だ！」

「分らねえよ、何處に居なさるか、そんな事を此方人等が知るもんか。」

十時は指を曲げ、己が胸を我手に擱んで、満面に朱を注いだ。

大曲が引取つて、

「可い加減なことをいふな、これ、頭がなくなつて、片時も此の仕事が云々と、自分の口でいうた

ではないか。居所を知らんなんぞと、これ、一體誰だと心得て、そんな事をいふ。此處に在らつ

しやるのは、警部長殿であるが分らんか、目が眩んだか、馬鹿め。」

「何だか知らねえけれど、恚う穴の中から覗いた處ぢや、お太陽様と髻ばかりが見えますがね、

は、は、は。」

彼處でもクスリ、此處でもクスリと笑ふ。

大曲悲痛なる音調で、

「警部長殿、先づ此奴から捕縛いたしましたは如何でございます。何時も此の術を遣るに相違ございませんから、と下役の探偵が、却つて堪へ兼ねるばかりになると、さすがは一署の長官であ

る。洋刀の柄を握つて、開き直り、嚴然として威儀正しく、

「こら、土方、こら、私は短慮ぢや、嚴酷ぢや。き様なぞは即座に捕縛すべき奴ぢや、寧ろ一刀の下に打放すべきぢやが、土方、き様を對手にするやうな、本官身分ではない、大目に見て置く。こら、能く見い、本官であるぞ。

本官が自身に此へ出張したのは、輕からぬ事ぢや、是までき様等工夫どもが、諸種の亂暴を働

きをつたは一再でない。うむ、土方、工夫夥間が此の手取川へ着いたといふ報告と同時に、本官の耳へ入つたのは、三

宮村に貞ちゆう婦人が、恐しい辱を蒙つた一事件ぢや。以來、違警罪一ツない日と雖も、當縣下に二件三件、き様等の罪狀を耳にせぬ事は嘗てない。

此の天下の本街道を、白日さへ人民が通行を憚るのみならず、村々は戸毎に枕を高うして寐られ

ないちゆう、何事かい！即此の附近、所轄の責任ある派出所に於て、任務を空しうしたために、職を退き、官を免ぜ

られたものも澤山ある。が、これだけの多人數、其の上また工夫は磧ばかりでない、五六里があひだに蔓つて居るのぢ

やから、何者を當てに取調ぶる次第にならん。

兎も角も工事を監督する水上に面談しよう。敢て今此處で其の水上に逢つたといつて、直に捕縛して引立てるといふではないのぢや。工夫

が亂暴をするに就いて一應技師たるものに其の心得を問ふのであるが。と怒氣横溢せる音吐壯に、屋根あらば震ふべく、此の廣濶なる磧に立つて、正に五十人の耳に

八十五

響いた。時に其の傍なる鹿毛の乗馬が、高くヒ、ンと嘶いた。驛路の馬の聲とは異なり、何とな

く警部長の威を叫んで、恐ろく五百人に其の主公の英名を告げたであらう。猛連は、一土方一工夫に對ひて説くよりは、寧ろ大衆に演ずるかの態度を以て、馬を鞍ヶ嶽の

裾に控へて、磧一面に大音聲。「其處で、鐵道工事に於てはき様等の棟梁ぢや、社會の安寧を攪亂する暴行に就いては、警視に

於てき様等の首領と見做し、教唆者を以て目して居る。其水上に尋問の筋あつて、屢々召喚状

を發したが、音も沙汰もない哩、其筋から人を遣はした事も、五度七度に留まらんが、更に要領

を得ん哩。不埒極る處に、此度又獺瀉巨山の別莊に、旅の畫師と稱へて泊り込んで、同家の夫人を強奪

しようとした悪漢がある。仕損じて逃亡する際、湖の中へ飛込むと、豫め同類が小舟を寄せて待ち居つた、船は今入の川口に繋いだのを奪うたのぢや。

時に午前三時半、一片の月色の下に、同家雇人、大巖三太なる者土堀の上から、遙に漕離れた船の中に工夫體の兇徒に交つて、確に一人の婦人を認めた。

のみならず、昨夜の事、此の鶴來街道の地藏小屋を焼いたのは、明かに工夫の夥間ぢや、特に婦人も又交つて居つたといふからは、犯人は此の中に居るに相違ない。

能く聞け、き様をはじめ何の工夫も不殘嫌疑を蒙らうより、皆心を一にして、罪人を吐出せよ。

又水上も同断だ、一應面を合せた上で、辯解があらば聞いてやらう、挨拶があらば承らう、狐疑して逡巡して、一寸遁れをいたし居ると、警視に於て猶豫はせん。直に令状を發して捕縛するぞ。やあ、水上には限らぬ哩、放火犯、強盜以上の奴等、何奴此奴の容赦はないぞ。」と高らかに疾呼した。

其の豪邁なる、短慮なる、嚴酷なる、強情なる、我慢なる、配下の警官も人民も、十時を十時とは聞かないで、十時を打てば泣く兒も黙つて、轟と渾名に呼ばれた薩摩出の赤鬼は、日々胸中に鬱結して、刻一刻に破裂せんとする叱咤の聲を、味方に對して鳴らさむには、大に威嚴を損ずる條件なきにあらざるを憂ひて、不如、内情を熟知せる敵に向つて響ると同時に、慙くして渠等に

の心膽を寒からしむる事の、幾分の得策であることを豫知したのであつた。

時に石山の背後より、のそく、(流)の字を白抜の、半被の染は新しいが、面も風采もぼやけ男、白晝の狸に背たのが、向つて、逞しい馬の鼻頭と、嚴しい髻と並んだのを見ると、太陽を背負つて、一ツ驚いたやうに反つて、直ぐに小腰を屈め、揉手をしつ、ひよこくと近寄つた、是駕籠昇の良助なり。

「へい、え、申上げます、彼で旦那様お言を承りましてござりますが、其の何事に就きまして、手前どもお頭は些も御存じはないのでござりまして、へい。なるほど此へ向けまして、お召喚状の参りました事もござりますが、誰もく不精の極めまして、つひぞお頭まで取次いたものはござりません。過般の夜も、何ぢや、警察の手紙か、と申して大川へ投げ込んで居た、怪しからぬ爺などを見受けましてござります。

それに旦那方が見えまして、これまで水上様へ、其儀、取次いたものはござりませんが、何も其のお頭は、後暗い事があつて、其で逃げておいでなさるのでござりませんに因つて、へい、此の事を私心着きましたについて、へい。

「む、き様取次ぐか。」

「へい、それが旦那様、何處においでなさりますやら、此の廣い積の事でござりまして。」

十時の目の色は血を漲らした、洋刀と共に靴を踏張り胸を反して、
「此奴等縛れ、大曲！」

「は、」

「居ます、居ます、あ、彼處に見えます、棟梁が、」と大聲を發して石山の上につきくと立ち、
日和見の體で、遙に小手をかざしたのは要藏、小高い處に半被黒く、(風)といふ字を翻した。

八十六

小石はぐわらくと壞れ落ちた、靴は陽炎の如き黄なる砂埃を踏んで、官服の姿斜に、洋刀の
色炎天に赫と燃えて、十時は丘の上に躍り上つた。

「何處に居る、何奴だ。」

風の字の半被で、要藏、傍に並んで立ち、

「旦那、彼處でござります、彼れ、御覽なさりました、向うに十四五人立働いて居ります中に、赤
い切が見えませう。手巾を持つたものではござりません、旗でござります。」

「う、赤い旗が何うしたか。」

「彼が其の、棟梁がおいでなさります私等の目印でござりまして、へい、水上さんは彼處に居る

のでござります。」

屹と見渡す、目の下豁けて、描ける霞、斷れたる緋、隨處、磧を残し、草を残して、大綱小綱、
鎖の鐵、蜘蛛の網八方に渡れる他は、見るものとして三々五々、工夫の群にあらざるなく、數
百の鶴鶯を亂して、五六の大斧雲を招けり。曳乎と地形を築くあり、應々と畚を運ぶあり、唸
喊の聲哄と起れば、草鞋と、顛卷と、鳥打帽と、石と、草と、皆動きて、川浪颯と逆捲くばかり。
近くは大きく、遠きは小さく、磧は前方へ斜に低く、流は手許へ凸に、北國の幽境、山河の狭間
に、此の熱鬧地ある中に、大蛇のとぐるを卷いたる形、象の蹲れる姿して、雄大なる萬力を据ゑ
たる際に、八人ばかり一列に黒くすらりと並んだ、其中央あたり一人の手に、あれ、一流の
赤き旗。

十時は踴躍一番、

「彼か、」といふと、左手に洋刀の鐙を引上げ、右手には要藏の腕を拉つて、

「來い！」

と一喝してつるくと丘を迂つた。

來い！と響いて聞えた聲は、此方なる大曲の耳にも轟いたけれども、探偵は今實際、乗馬の始
末に困じ果てて居る處。

覺束なげに轡を取つて、蘆毛の鼻頭の向くまゝに、右左に顔を振つて、全身に汗を流し、
「おい、これ、何處か此の馬を繋ぐ處はないのか。警部長殿と一所に行かんけりやならんのであ
るが、打棄つて置かれぬ。」

工夫の一人、

「成程活物だからね、何處へ押走らねえとも限りませんね。」

大曲厭な顔をして、

「き様等屹と又、悪戯でもするんだらう、怪しからんわけだ。」

「だつて、お前さん、悪戯をする分にや繋いで置いたつて不可ませんや。」

「まあ、番をしておいでなさいまし。」

馬が前足をボンと揚げる。

ハツといつて大曲、轡を壓へたまゝ、ふらこのやうに飛び退いて、

「畜生。では其の、此馬を置いて行つたら、き様等、悪戯をしようの料簡であるな。」

「當前さね。」

「何を、」

「別に大したこともしねえんでさ、一寸此の、尻ツ端をぐわん、ぐらゐだ。」

「え、汝、」

飛びつきさうになると、鬣を高く振つて、ヒ、ンと嘶く。

「畜生、畜生め、此奴等！」

良助が打笑ひ、

「何なら、此の穴の中へ藏つて置くが可うござります、併し蓋をするわけには参りませんで、御

安心なりますまい、はゝゝはゝゝ。」

「今に見ろ、汝等、勝手にせい。」

と投げに出たが、打棄てて置かれぬのは、磧の向うに砂煙、猛連警部長がまつしぐら。

「やあ、赤鬼め、駈けるわ、駈けるわ。」と背後で手を拍いて囃す者あり。

探偵忙しい中に振り返ると、何時の間にか別に一人、小股の緊つた勇な兄哥。

八十七

さすが大曲は棄て置かず、馬には遁足に構へつつ、雑言暗く兄哥には、飛附きさうな擬勢を示

して、

「畜生、何をいふ、汝、赤鬼とは何の事だ。」

頬被のは反身になり、左の腕を突出しながら、

「鬼だから鬼といはあ、昔からお前達や、鬼と相場が極つてるんだ。恠う、然ういつたからたつてな、聞きねえ、強い、恐怖えのといふんぢやねえ。吝な、慾張な、弱い者いぢめの好色鬼よ。第一十時とかいふ彼の野郎は、湯の巨山と共謀になつて、貧窮人でも、乞食でも、片端からお救小屋へ掬ひ込むのは可いが、其奴等を助けるツて名聞でよ、大比羅に奉加帳を回して、しつきりなくたくし込まあ、それで重湯を啜らせるのを恩にして、小屋の奴等を引撲いて、夜の目も寐かせねえほど仕事をさせて、其賃錢まで、しこためやあがる、何の事あねえ、乞食の上前取といふもんだ。そんなら其で、蒲鋒小屋に籍を置き、高利貸と同居でもしやあがりや可いに、警部長殿が聞いて呆れらあ。

「やい、五月のお節句にや、鍾馗様に搦んで出る、珍畜類の笹葉鬼、手前探偵の癖に、彼の赤鬼が、お救小屋からお露ツて娘を掴み出して、頬邊をシヨコ舐めようとしたのを知つてるか。此處を何處だと間違へやがつて、こけな雷干を見るやうに、眞晝間此方人等のお目にぶら下りやあがつた。

「恠う皆も聞きや。」
と八方睨みで、

「そら、此の先の鶴來街道の地藏堂でな、彼のお松姉をぐる／＼巻でよ、天井からぶら下げたのは、其處においでなさるお役人様だぜ、お検べが聞いて呆れる、笑かしやあがら、馬丁め！」
然ればこそ際どい折から煙の中にも見覺えた、此奴放火の當人と、大曲は火の出るばかり。くる／＼と目を剥いたが、轡を離すと荒れさうなれば、あしずりして堪へたが、刑法第百何十條、眼前に見て堪忍ならず、しばらく熟と狙をつけて、

「動くな！」

一聲して飛蒐ると、對手も動けば馬も動いた。

身を蹴したのは力松で、遁げまじき此の兄哥の一目山に駈出したは、大曲を釣るためか。

周邊に居た八九人、手を叩いて哄と笑ふ。

馬は驚いて高嘶、ヒ、ン中空へ躍らむす、鬣を颯と掉る、横あひから、

「どう」といつて押並んで、びたりと鎮め、悠然として立つて、警部長の走れる前と、大曲が追つたる後とを、左右を見送つて微笑んだ、身の丈高き長靴は、是なむ屋島藤五郎。却説、鬼十時は、要藏を引立てて、靴も砂利も飛ぶばかり、丘の上から睨み詰めたる、赤旗の的に風を切つて、大雁股のうなりをなし、七八間此方から、
「水上！」と呼んで眞赤になつた。

其處に^{いちちつ}一列、涼しさうに並んだのは、仙人の群かと思えて、落着いて澄して居たが、啊とも、應とも答ふる者なし。

十時の力は益々固く、要藏の手首を扼つて、

「規矩夫は何れか。こら、水上は何處に居るか。」

要藏故とどぎまぎ。

「あゝ、あなた方、此の旦那が、お頭に御用がござりますさうで、唯今、旗を目印に彼方から参りましたが、此處には在らつしやりませんでござりませうか。」

「然うよ、最う旗と一所に、何處か傍へおいでなすつた、今まで在らしつたにや在らしつたんだ。」と一人がいふ。

「何を、何を、」

要藏うろ／＼と四邊を向し、吻と息。

「あれ、御覽じまし、御休息と見えて彼處へ。」と伸上る、磧を北へ二三町、土手の上なる天幕の屋根に、旗種々の色ある中に、赤きが高く翻れり。

八十八

「へい、旦那最う御免蒙ります、何うぞ御勘辨下さりまし。要藏汗を流して逡巡なし、

「お頭の水上さんが、お在なさりませんと申して、はあ、私どもの存じた事ではござりません。又眞個、何時でも其の、赤い旗の見えます處には、在らつしやるに極まつて居りますに因つて、つい存じただけを申し上げましたのが、飛んだ災難。方々駆づり廻つて、大概ぐつたりになりました。旦那も御迷惑でござりませうが、お供をいたしますも、容易い事ではござりません。彼方に居ない、此方にも居ないで、其の度に業を沸して、こらッ、とお怒鳴りなされますで、へい、いや最う膽が轉倒つて、壽命の毒でござります。恐しいお腕力で、痲癩紛れにお引立てになりますで、腕節が痺れます、手首も抜けさうで、」

と苦い顔で、ぶらり陰に下げて自脈を取る。

「うゝ、汝、汝」といきまくのみ、十時は怒心頭に上り、舌の根も鈍くなり、堪忍袋の緒を切つて、黒煙を吐き出すべき、鋭き言葉を發見す能はず。

檜は觸れて火を放つ。こゝに手取の水ありて、足許に、一掬清涼の風を翻すなかつせば、憤怒の炎の柱となつて、十時の身體は倒れたかも知れぬ。

「彼へ行け。土方、船を呼べ。」と汀にすつくり、流を正面に仁王立ちて、戦くばかり地たゞらを

踏んだ。

要こそあれ一流の赤き旗、這度は河中のフケスに集うた、四五艘の船多數の労働者の間に、躑躅の花の浮べる如く、折からの風にさらりと、日の夕春く方へ靡くのである。

はじめ萬力の傍に、其の形を見て以來、天幕の屋根に翻つて、恠く船の中に飛べるまで、旗の所在を變ずること、數ふれば、やがて八回。

彼處よ、此處よ、といふまゝに、其の都度、十時は益々怒り、愈々激して、右より左に、前より後に、更に同一ことを繰返す徒勞を顧るに違あらず。砂利に靴の跡の遍きにつけても、草をわけんず心焦りて、長く、短く、或は圓く、焼石原を旋風、工夫の中を閃き通つて、旗の行方を追ふほどに、日も黒く、水も黒く、積も黒く、烏が飛ぶのをそれかと思見るまで、十時は眼が眩んだが、纜に流の縁を認めて、夕日の赤きを知るとともに、船なる旗を知つたのである。

「旦那、お待ちなさいまし、妙でござります。前刻から幾度か分りません。私どもの参ります時分には、お頭の旗が傍へ行つて了ひますで、一足おくれに、後へ後へと回ります勘定でござります。はい、稀有なことでござります。」

然うかと申して、お頭は何も御存じはござりませんで、旦那を見懸けてお遁げなさるわけではなし、まあ其の、マンが悪いのでござりませう。

これではお見合せなさいました方が宜しうはござりませんか。へい、否、お供を厭ひますではないでござります。船へまで行らつしやつて、彼處にお頭がおいでなされば可うござります。が、また然うでもない、唯今までのやうに、行違ひにでもなりますと、其の時のお顔といふものが、何とも一生忘れられませんが、實に恐しうござりますで。」

「土方、こら、其でも己の顔が恐しいちゆうか、あ、可えわ、恐しくば船を出せ、早く出せ、十時猛連が命するんぢや。」

と屹といふ。

問答無益、要藏は伸上つて、

「お、い、船持て來い、やい、船よう。」

天に二ツの日はないけれど、

何故か一人ぢや寝られない。

人は揺れつつ、聲は震へず、石を鑿る音、岸打つ川浪、丁々滔々として鞍ヶ嶽の姿幽に、手取川の暮る、中に、雪のやうな裸體の漢、禪一つで、棹さして、鼻唄で漕いで來た、小船に一人河童の多見。

「ぢや、何、此の旦那を向うの洲まで送りや可いのか。おい、合點だ、わけやねえ。さあ、もしお乗んなせえ。」

多見次が言未だ終らず、十時靴で舳を引寄せる勢で、すばと乗つた。要藏は、づつと退る。目も遙に、飛脚體の人の姿が小さく見えたが、また、く間に、面前へ飛びついた大曲。足の惰力で駈けつけたばかりの状、失心の形で、

「は、警部長殿、是に。」

「乗れ！」

「はッ、」

「言語道斷ぢや、大曲、」と思はず衷情を漏して勵聲一番。此方は然らぬだに冷汗なれば、自分の過失を叱咤されたかと、狼狽して、

「え、お馬の儀につきましては、私幾重にも、は、重々死罪でございます。は、確に轡を取つて、嚴格に番をいたしました。放火の犯人を見ましたに就きまして、直に其の者を捕縛しようと存じましたために、つい……其、」

「何うしたッ」

「其、其がために、貴下に於きましては、船でお引揚げでございますか。」

「こら、こら、」

「何とも、何とも以つてお詫の、」

「呀！馬が遁げたッ？」

「はッ、」

「え、い！馬は放しても人を縛れば用は足りるわ、間拔め。」

「はッ、」

「疾く乗れ、今度は片端から許さんのおや、乗れ、え、！」

「は、は、はッ。」

「おつと、お静に、」

ぐつと突く、船はぐるり舳を流して、要藏は岸とともに、持つて去つたかと遠くなる。大曲はドンと尻持。

「これは、」といった。

十時は洋刀の鐙を支いて、仰ざまに揺れたが、踏張つて突立つて、

「彼奴を、」

と要藏を睨んだが間に合ず、船は流に従うて、斜にフケスに漕ぎ進む。

「ありや、何ちゆう奴か、あゝ。」

多見は小粹に棹を使うて、稻妻の閃くやう、水脚を颯と切り、颯と切り、

「何てますかね、兄弟分ぢやねえんですから、七だか、八だか分りません。大勢の工夫でさ。」

けろりとして頤で反り、

天に二ツの日はないけれど、

何故か一人ぢや寝られない。

「何だ、何だ、手前の乗せて来たな、何處のお客様だ。」と此處に集つた船の中から、一人高らかに聲を懸けた。

調子を張つて、多見が應じ、

「お頭に御用だとよ、警察から故々おいでなすつたんださうだ。おゝ、兄弟、水上さんが在らつしやるなら、一寸ツて、然ういや。」

「然うか、お頭にか、其奴アお生憎だな、棟梁は此處にや居ねえぜ。」
「黙れ、」

十時は胴の間を一踏ぎ、船の外まで彼の鬚を吹塵かし、

「今まであつた赤い旗はありや何か。隠立てをするよ許さんぞ。」

「こんな船で、何處へ何を隠しますね、眞個に指圖をして居なすつたつけ、此奴等が上ると、直ぐにお見えなさらねえんです。やい、皆、顔を出してお目にかける、まだ、お疑ひなさるなら、此等を引剥いで御覽なさい。」

船から船へ指しをする、工夫どもに取圍まれて、いかさま今浮いたらしい潜水夫が三人、海豹見るやう、づぼりと寝て居る。

「大曲、」

「は、」

「構はず二三人縛つて了へ。」

「どツこい、急に立つちや揺れますぜ。」

といったが、どうした拍子か、杭の中を衝と抜けると、中流へ一文字に乗りかけた、船は唯水に揺れて、岸倒に流る、哉。

十時は堪らず膝を折つて、撞乎と胴の間に脚を投げたが、其のまゝ洋刀の柄に手をかけた。
「船を何うする、工夫、漕戻さんか、汝、叩き斬るぞ。」

素裸な多見は、怯氣ともせず、

「不可やせん、こりや不可ねえ、彼處等工事をするんで、杭が打込んであるから堰留まつて居て漕げますが、此處へ乗出しちや海へ行くまで留りやしません、漕ぐも壓すもあつたもんか。」と肩に傳ふ雫も拂はず、涼しい棹を夕暮の峰より高く引擔いで、小音で、そつて曰く、

水の流を見て暮すツ——

「大曲、」

「は、はッ、」

「棹を取れ、取、取らんか、き様、き様漕ぐんぢや。」

「私、私こと、船の儀に就きましては……」

「え、役立たず奴、馬、馬は放す、放火は遁す、船は漕げん？」

「警部長殿、死罪、」とばかりで船底に平伏した。

「き様、人間か。」

「死罪でございます、死罪であります。此の上は、此の處へ、直に、投身をいたすより他に、最

早一點の爲す處はございません。」

「死ね。」と喝して躍り上ると、ドンと傾いて轉げて落ちさう。両手を舷に掴つて、其髻の凄じきにも係はらず、嬰兒が、搖籠に乗つたる有様。

唯口を開き、眼を怒らし、齒齧をして、世は倒かと思見る岸の方、磧は隔ること約五十間の汀に並んで、數多き工夫の中にも、特に我がために撰み出されたる趣の、態度に嘲を帯び、輕蔑を示し、憐愍を含み、弔意を表したかの如きが、すらり一列に十四五人。

手を叩くあり、翳すあり、船の流るゝ方をさして、ふら／＼と歩行くもあり、中に最も許されないので、白脛長く紅の裳をか、けて、描ける松風の倂なるが、此方を指す工夫の傍に、嬌羞を含んで立つのであつた。

「警部長殿、」

と大曲は聲も震へて、

「お露でございます、彼に居ります。」といつた、探偵は、恚くして長官が其の（死ね、）なる言のあとを、他に轉ぜむことを願うたのである。

「出來んでも構はん、漕げ。汝、其の棹を、」

と猿臂を伸ばすと、船頭は身をかはして、ざぶりと棹を水に棄てた。

「呀！」

「旦那、断念めてお了ひなせえ、幾度おいでなすつても、此の通りだ。迎もお頭にや逢へませんや、何、お頭はお逢ひなさらうたつて、私どもが逢はせやしません。」

眞個の事ですがね、私等がする事は、夢にだつて、水上さんは御存じぢやねえんですよ。旦那、棟梁はね、優しい、眞面目な、立派な學者です、先生だ。お前さん方に用のあるやうなんぢやありません。別にあります。私等の親方は別にあります。萬端其の人の御指揮ですがね、それだつて、形があるやうな、無いやうな、手で掴へようたつて行けるんぢやねえんです。

何もこれ、火もつけるたつて、町中焼き盡すわけぢやなし、婦人の兒を倒すたつて、お前様の母親まで、疵物にするんぢやねえ。打棄つてお置きなせえ。

雨も降りや、風も吹く、豊年もありや凶年もありやせう。稻にだつて蟲がつきます、其の蟲はまだ防いだ處で、早や霖が何うなりますね。御當所にや、今年、悪い病が流行るんだと思つて、まあ、往生をなさいまし。力づくぢや不可ません、え、旦那、それよりか御各々が、天窓の蠅でも追ひなすつて、御信心が肝要だ。危え！」といったが背後飛びに、白く翻つて、藍のやうな水の中、底まで透いて、雪の膚が少時見えたが、劍を抜いた鬼十時と、呆氣に取られた大曲を、流域五十里の大川に、一片の孤舟に遺して、あと白浪とぞなりにける。

寄 手

九十一

三宮の村長九郎次が住居へ、朝がけに飛込んで、權柄づけ、いきなり其筋からと名告を揚げたのは、地藏堂の焼出され、刑事志願の木谷轉倒太、此の者本名別にあるべし、爰に轉倒太は何太、假太、尙何某といふに同一。

木谷其の日の扮装には、縞のちゝみの襯衣、手を緊めて唯一枚、小倉の袴を裾短に穿いて、足拵へ嚴重に、手拭を疊んで後顛卷、一振櫻の皮で張つた、日本杖を提げて、朝涼から最う汗ばんだ其の風采、此頃でも此あたりには間々見受くる、西南の役に皺だらけな、賊兵の繪に異ならず。先づ早や、此の形装に仰天して、豫て見知越の堂守ながら、九郎次は縁側に、處斑な鶏の糞の中に両手をついた。

「これは、おいでなざりまし。え、先夜は又飛んだお騒がしい儀でござりまして、村方からも、直ぐさま駈けつけてはござりますが、何分、毎夜々々、高張で工夫の用心をいたしまするやうな次第、若いものどもも、おいそれとは村を空けかねましたで、行届きませず、はや。」

「いや、それに就いてだ。」

「御意にござりまして、そりや早や、お地藏様のお屋根でござります。何は措きましても、當村方で、何分のお手傳をいたしませねば成りませぬが、御存じの通り、はや、昨年来、誠に不作でござりまして、萬端届きませぬ事ばかり。過般、東髪娘が擔がれました件について、學校の教師が村に居さしやらなくなりました、其のかはりさへ、未だ此の、矢張村費不足でござります處から、其のまゝに棄て置きますやうな仕儀で、はや。」

木谷は茫然として聞いて居たが、

「おい、おい、未だ顔を洗はんのぢやね。私はね。石川縣警部長十時殿の命に因つて、多日傾斜地藏に書記兼會計を行つて居たがね、其が本職といふんぢやない。馬鹿にしちや不可ん。誰が屋根普請や、再建の勸進になんか來るもんか、詰らんことをいつちや不可んぜ。」

「苦り切つたが威儀を調べ、」

「今ね、此處へ警部が一人、巡查が三十名ばかり來るんぢやから、其の積りで。」

「ひやあ、」

「何を周章なさる、何もお前さんを縛らうとはいやしな。悪工夫を縛りに本署から出張になつたんだ。」

「え、え、成程。」と顔を上げて、莞爾々と打領く。

「ぢやからね、早速湯を沸して、茶の支度を爲んけりや成らん。此處で暫時休憩に成るんだ、昨夜から鶴來街道を徹夜だぞ。」

「それは又御苦勞様にござりまして、はや、然うありさうな事でござります。まあ、お掛けなさりまし、貴下様も御一所で。」

「む、私もな、彼處が焼けてから、一先づ芙蓉瀉の別荘に立退いて居たんぢや、」

「へい、生如來様の。」

「然うだ、するとね、警部長殿から急なお召出しで、私でなくつちや不可いといふんで、すつかり捕縛方を委託されて來たんだよ、うむ、茶を一ツおくれ。」

「お婆々、お茶を早う、こんな時に何も、孫めのおしめを嗅いで居る事はない。これやい、嫁ン女も帯ひろ解けて、蚤を見て居る處でないや。權藏、何といふ大な欠伸だ。與太よ、與太よ、そんなものを持出して朝から蜻蛉を釣るではないわい。」

え、もし、それでは警部長様、又御出張でござりますか。」

「何、部長は見えん、萬事私がお引受けた。」

「はあ、然やうで。いや、高い聲では申されませぬが、警部長様は、御自分に一昨日此へおいで

なさりまして、何か間違がござりましたやうに、はや、内々承りましてござりますが、何は、お身體はハア御無事でござりましたか。」と九郎次は額を寄せる。

九十二

木谷も聲を低うして、

「何しろ、警部長殿は火の玉のやうな、恐しく唯烈しい一方なんだからね、傍に居るものが餘程落着いて、拔目なく行渡らなけりや不可いのに、一體今度附いて行つた、大曲といふ刑事巡査が間拔けたからさ。

又工夫等のする事といつたら、何と、今時ありさうな仕種ぢやない、警察處か、石川縣にや、晝間といふものがないやうな悪事を働くんだものな、大概佛のやうな人間だつて、赫とせずには居られんのだ。其處へ持つて行つて名代の鬼十時と來たんだから、辛抱がなるものか。

部下を遣るも、巡査を出すもあつたもんぢやない、突如身體を持つて行つて、工夫の中へ打附けて、手でも足でも觸つた奴等、片端から焼殺す腹立ちやうで、一向前後の分別をなさらなかつたもんだから、とうとう何だね、大川の眞中へ小船で突出されるやうな、飛だ目にお逢ひなされる。」

「ぢやさうにござりまして、早や、何とも申されん不埒な悪人どもでござります。ハアそれでもお身體には。」

「そりや別條なし、しかし何しろ、あの恐しい流だから、川中へ突放されて、棹も櫂もなかつた日にや、何うする事も出來やしない。生憎又、警部長殿は、些とも水心なしさ。それでも流れるだけ流されてね、海へ出ようとする處を、美川の濱の漁師船に助けられて、こりや佐渡ヶ島までは行かなんだ。」

「滅相な、佐渡まで流されて何うなりませうぞ。」と目をぱちく。

「けれどもだね、一所に乗つて居た大曲刑事は非業な最期。」

「え、まあ？」

「是もおなじく、水心は皆無だからね。それでも唯黙つて見ちや居られないから、自體、無理な事には、岸へ寄つて流れた時、突出した巖を目掛けて、手を伸ばした。掴まへて踏留めようと思つたんだらう、堪るものか、船は飛ぶが如しだから、一ツ引いて置いて、大曲の身體を宙へ、伸した形で刎出したんだと。直ぐに寂滅。死骸は但し未だ見當らない、元來間拔なんだから。」

と冷かにいつた。(大曲の事此の下に談話なし。)

案ずるに、世は、北陸道ばかりでも、古來、許多の英雄と美人を葬つたのであるが、又怨る人物をも、幾萬といふことを知らず奪ひ去つた。歴史は、番場の忠太をさへ傳ふるのである。けれ

ども、アリヤノと舞臺に並ぶ、捕吏については語らない、渠等の多くは、好い若い者である、中には年配、妻子もあらうと思はるゝのも少くない。然も一人として、未だ神人の怒に觸れて、死すべき罪惡を犯したといふ事實を知らぬに、なんすれぞソレ左團次の一太刀にばらりと斬倒されて、中には目の球の飛び出づる、無慙の最期さへ遂ぐるに到るや。

我が刑事巡查大曲氏の如き、職に忠なること彼が如く、部長に柔順なること彼が如く、木谷に對する、友誼に厚きこと彼が如くにして、(は、はッ、はッ)とばかり、一片の憎むべきなく、難すべきあらざるに、うたかたの泡と消えて、人弔ふなきは如何。もしそれ妻もあり、兒もあらむか、天は爾く心なきものにあらず、恐くは救ひを得て、命を完うしたに相違ない。

「さあ、是だから大變だ。誰彼の容赦はない、(風)の字と、(流)の字の、半被をさへ着た奴なら、珠數繋ぎにして引立てる、と邸へもお歸りなさらないで、直ぐに一統へ嚴達だ。

又ね、彼奴等の中に婦人が居るよ、僕は仔細あつて丁と其顔を知つて居るんだ。一度地藏堂に駕籠を横づけにした事があつてな、何ともいへない佳い女の癖に、大ッレた奴ぢやないか、放火の中にも交つて居たし、巨山様へ忍び込んだ、犯人と謀じ合せた、船にも乗つて居たやうだ。決して其などは遁さんやう、僕が引受けて見知人さな。此の村も、大分彼奴等で痛んだらう。今に見い、歸りがけにや、蜈蚣のやうに繋いで通るか、然もなけりや、首の團子を串刺にして、齧りながら田畝道だ。」

九十三

「もし、あの女中は、地體彼は何者でござりませう。」

「彼とは、」

「惡ものどもの暴れる中に、出たり消えたりする、美しい娘のことでござります。」

と九郎次は心得顔で、

「駕籠で地藏様へ、お參詣をしたとおつしやれば、矢張先達つて、此の村を通りまして、鞍ヶ嶽へ入つた女中に、違ひないでござりますが、金澤にも、小松、大聖寺にも、まづ、都は存じませぬものの目からはござりますが、評判の、活如來様お裏方を除けましては、譬にする花もないほど、艶麗ぢやさうにござります。早や、其が貴官、放火の時にも、押込の船にも、人の目に見えますといふは、何といふ解せぬこととござりませう。

地藏堂の焼けました節、逸疾く駆けつけましたものなどは、いつか駕籠で通つたのが、松の樹の蔭に立つて、屋根の落ちますのを、恍惚と、早や、見惚れるやうに莞爾して、視めて立つて居りましたのが、何となく物凄く、火のほてりで、焼けるほど熱い中にも、悚然として、水を浴び

た氣になりますと、歸つてから、瘡に憑かれましてござります。早や最う、束髪娘以來といふものは、村中病人澤山。

よく此の、鶴來街道を、夜のしらくに通ります馬方が、あ、いふお女中が、屋の棟の、樹の枝の、高い處に腰をかけて居るのを、ひよいと見ますると、……」

九郎次は額に皺。

「早や其の、馬が倒れますさうで、悚毛を震ふ事でもござります、變な、もし魔でござりますな。其か、然もござりませねば、金劍の比咩宮様は、先々代の神主が、嚴禁ぢやといふに、密と奥の院を覗きますと、比咩神様か、其のお腰元か、肌をお脱ぎ遊ばして、お化粧の處、傍にござりました毛筋立を倒にして、覗いた目をお刺通しなされた氣で、神主は代々偏盲でござります。

其か、何にいたせ、人間業ではあるまい、早や、凶年といひ、何や彼や、何ぞ加州に、悪いこととがござりまして、怪しいお手傳が入つたのがな、と申すものもござりますなり、此の邊が荒れ果てますと、追つて又お城下なども、」

「これ、これ、何をいふんぢやね。馬、馬鹿な、詰らんことをいふもんぢやない。今時そんな事があるもんか。僕なんざ、彼是一年も、傾斜と同居をしたが、地藏彼の大な圖體で、夜中に噓一ツした覚えはないのだ。追つてお城下などと、怪しからん。これ、然ういふ心がけだから、新造

を素裸にされて、阿容々々と見て居るわ、謙言を。」

「ではござりませぬねど、如何にも早や、餘りといへば、泣く兒も黙ります筈の、警部長様がおいでなされましてさへ。」

「黙つて！警部長殿が何うであらうと、對手がまた、魔物であらうが、何であらうが、僕が承つて來た上は、見事打縛つて、これ、あの別嬪をな、いちや〜どツこい、と見世物にして、木戸錢は取らんが何うだ。」

「まこと然うなりますれば、村々は赤飯でござりますが、積は廣うござります、皆様でおいなさると聞きまして、遁げると、それまでではござりませぬか。」

木谷は心地好げに一笑着して、

「其のため夜徹した。これ本署からはな、此の鶴來街道ばかりでない、本街道の口からも、同一人數で押して來たわ。鞍ヶ嶽へは遁げられまい。船で出りや河下に、巨山様の先生と、鐵砲打の三太が、強藥で待つて居るんだ。尤も手向ひをしたが最後、切棄ては御免だからな、目星い奴等一人も残らず、袋へ入れて、口を一ツ、ぐツと緊めたのは誰だと思ふ、其處は僕が承りだ。」と日本杖の柄で胸を叩いていつたのであるが、戸外に靴の音が聞えると、飛上つて、あたふた、庭口から迎に出た。土藏の彼方を、白い帽子が、烏瓜の花に交つて充滿に押して來るのが、カンガ

ルーの立つた身で縁側から伸上る村長の目に見えた時は、木谷が、ひよこくとお辭儀をして、又眞先に駈込んだ時であつた。

扱一名の警部が率ゐた巡查三十の隊は、暫時此の家に休憩して、朝霧の田畝道八方から寄つて集かる見物の中を、やがて砂煙を立てて、どつと進むと、積が見ゆる山の根に、犇々と積並べた、兩側の切石に、七星の座の如く、向ひ合ひ互違に腰をかけた、眞先に急先鋒。

九十四

力松は一番槍、意味もなしにすつと立つて、棒のやうに歩行き出したが、寄せて來た警吏の隊を、味方を去る事凡そ十五六間ばかりの處まで進み迎へて、體を斜めに、頬被をした横目鋭く、ぎろりと瞳を動かすと、眞前なる、木谷の胸に、突如ドン。

出足を不意に中てられて、思はず、よろ／＼と後退り、礮と尻をついた妙な發奮で、胡坐を搔いて、膝の上へ大和杖を横へたが、パチリと一ツ、瞬をしたは何ういふものか。

「汝、曲者、」

喚いて背後から飛び蒐る、巡查の向う脛をした、かに、力松は新しい草鞋の裏見ゆるまで高く蹴つた、其の身は仰げざまになつて、背に持つた鳶口をブンと振り、

「來やがれ。」 向う見ずに拂つたので、續いて懸る一人の官帽を、片頬裂いたやうに引かけて、

「状態、」

大地に叩きつけるが早い、得物を曳いて颯と引く。

呀！呀！ 哄と此時はじめて、寄隊は一度に聲を揚げ、

「遁がすな、其奴、遁がすな。」

といふ警部の聲して、白き雲の動くやう、波がしらの翻るに似て、わつと追つた多勢の中、力が(風)の字の印半纏、風といふ字が廻ると見えた。

何事ぞ、地を崩して、倒に大空より雨の如く降りかゝるは？

良助と要藏と、猶別に三個に工夫、手手に悪魔の掌の如き、大なるシヤヴェルを揃へて持つたが、土を揃ふこと穿つが如く、砂を飛ばすこと煙の如く、其働くこと風車に似て、赤き瀧か、黒き吹雪か、小砂利まじりにざら／＼と、寄手の天窓から浴びせたので。

目を打たれ、耳を塞がれ、鼻を弾かれ、口を閉ぢられ、昏昏濛々として咫尺を辨せず、人々は大地震のために、目の上なる鞍ヶ嶽が、其の座を移して、須彌山の方へ飛ぶよとて、砂煙の中にふら／＼と泳いだ。

「地雷火ぢやツ。」

抜いた腰が立つや否や、木谷が一散に駈け出すと、是を機會に三十人、浮足になつて引返す、後に犇々と詰め込んだ、見物の百姓、人雪顔を打つて退る。

「静まれ—静まれ、—」といふ警部の聲。

やがて天日蒼海なる空に赤く、露もや、砂の雨霽れ渡つて朝の道一筋清く山の裾に通ずる只中、瑠璃色の朝顔露をかけて、はらくと咲いたる、村はづれの、一軒家の垣根を横に、巖かと瘦せて脊高き將軍、味方をあとに唯一人、破半被に禪白く、毛だらけの胸を寛げて、繩の帯を尻下り、股引を穿かず、空脛の跣足にて、面蒼く髪の蓬なるが、一挺大斧を提げた、鋭き刃は残月、軒の蜘蛛の網を拂へるありさま、肅然として亘りたり。驚破と見て備を直し、魚鱗に構へる寄手に向うて、ニヤ／＼と氣味の悪い、片頬笑を洩したが、先づ其の、大斧を揚げて、ト顔の前額を下げて押頂き、

「や、」と聲をかけると、片手上段、はつと寄手を斬る眞似して、其のまゝぐる／＼、ぐる／＼ぐる。時に大斧と人と唯、微塵にちら／＼、將軍の姿、千に化し、萬に變じ、紛々亂々として一陣の黒き胡蝶に髣髴たり。

「喝采々々／＼、」

ばら／＼と手を敲いて、工夫等の賞めたる中に、力松は早や頬冠を顛巻にかへて控へた。寄手

も餘りの早業に、堅唾を飲んで見る／＼中、大斧はフト空高く、屋根の上へ衝と飛んだが、瞬く間、づんと落つる、柄を、そらさず、丁と受け、取り直して、曳と投げ、閃く處を緊乎と取り、又投げ上げた五度目に、受けるも取ると擔ぐも一處、大斧ゆらりと肩にかけ、左の腕を長く伸して、懸れ、とばかり小手招けり。

九十五

二名の巡查洋刀を引そばめ、路の左右より百姓家の軒下を縫ひつつ、靴の尖で小刻みに、踵を浮かすやうにして急々と、捨吉に近づくと、兩方から直角を描いて、じり／＼と詰め懸けた。

目前に寄つた一人の捕吏の、早繩を抜いて、や、突出す、腕を躲して抜けたが疾いか、捨吉の大斧裏を返して横ざまに片手業、對手の膝を引きなぐりに拂つたので、苦と朽木倒れになる、見も返らず、返す大斧の同一背で、今一人の脊骨のあたりを、ドンと當てて退るとともに、打たれたものは、うむともいはず、夥しく、鼻血が流れた。

「抜け、抜け、」

と聲忙しく、語急に一喝して、十時猛連ならざる警部も、此の形勢に烈火の如く、堪へず佩劍をすらりと抜いて、眞先に武歩を進め、身構して近づくと、齊しく抜いた八九人、きらき

らと鞘を拂ひ、一團になつて殺進す。

捨吉は些とも遲疑せず、未だ起きも上らない左右の捕吏を躍り越えて、静々と立向へば、
「抜きやがった、」

「抜いた、」

抜いたりやといふまゝに、力松、要藏、良助など、後陣に機會を待つたる兇徒、猛然として動き出す、あとから、あとから、二人殖え、三人増し、鶴背に手唾して、森慘と押並ぶと、這奴、ござんなれ、寄手の方も一齊に抜き連れる。

彼方は警吏の劍の稲妻、此方は外道の鐵の黒雲、妖氣を籠めて自然立ち蔽ふ塵埃、醒し。彼の頭人なる警官と、此の兄哥なる捨吉と、相近くこと十歩になんぬ。

容易ならざる光景なれば、四邊に動揺めいた百姓衆、近きは早く家に隠れ、遠も速に走り退いたり、將に火花散り、血の飛ばむとする、兩側は家毎々々、戸を閉ぢ、木戸をメめ、雨戸を繰る、中には煙窓さへ塞ぐがあり、静まり返つて呼吸を詰めた、渠等は五十年來の平和今破れて、三宮の亂爰にはじまれりと、戦くのである。

時に天より降つたる敷、柿の青葉にばらりと音して、軒に近き枝から翻然、捨吉一騎陣頭なりける、件の茅屋の家の棟へ、靴のま、下り立つて、すくつと姿を顯した、一個汚れたる洋服扮装

の、目鼻立、殆ど大斧の其に肖て、短銃持てる青年あり、誰か忘れむ村岡不二太。

一は地上の猛獸の如、他は天來の妖魔の如き、要するに、下なるは戰鬥を司り、空なるは破壊を命じて、ともに敵を卸けむとするのであつた。

危機間一髪。

殷々として車の響、とばかりありてがら／＼から、凄く寂寞を破ると同時に啜を颯と三人曳。

輪は唯彈丸の舞走る、綱曳に後押で、入口の橋を衝と乗り入り、一揉揉んで此の腕車、村半ばに飛び込むや否や、車上なるが、帽を脱いで、高々と差上げながら、

「待つた、待つた、待たつせえ。」

曳きつけると飛んで下り、寄手の中を一文字。

背後から潛つて出で、警部の肩にひたと身を附け、

「待たつせえ、しばらく、しばらく。」

といひながら、捨吉の中を押隔てた、大聲よりは身體の小さな、小肥の緒ら顔で、五分刈、白髪まじり、膝の抜けた紺緋、裾のよれたのを胸擴げに被て、な、つ下りの薄羽織、懷中につツしりと、帯の下の太ッ腹、素足に穿いた藁草履で、地から生えたやうにづいと極めた這の親仁は？と驚いて是を見れば、末法救世の活如來、浮城の主人巨山五太夫。

是より前、路を岐つて本街道より、手取に押寄せた一隊にも、又略鶴來口と同一やうな出来事があつた。

路は近いから約一時間ばかり以前である。

工事は既に、大河を跨いで、筋違に長く渡つて居るので、其の本街道に臨んで一口に金澤を呑まむとするは、此の恐るべき毒蛇の頭で、鶴來に曳いたのは即ち尾に當る。

然れば、寄手の謀計は、川の兩岸より、迫りて、一舉に、首尾ともに、屠り盡さむとしたのであつて、鶴來路なるが迂回して川の東岸に出でたる間に、本道を進んだものは、流を前に、早く

既に東雲の雲の濃き中に、累々として大なる鱗の形の隠見する、工夫の姿を認たのであつた。

問答無益と、流の聲に、靴の音を沈まして、驀進に寄り進む。

此の隊は、三宮と地勢異なり、水島の驛を背後にして、一目廣潤なる積なれば、同勢此處も三十人、はらりと天の網を擴げて、霧の中に打つて入ると、思ひがけざる小川一條。

工事の水はけに新たに出來た、幅二間ばかりなるが、浪を翻して落下る。躍らば越えつべけれども、不意に勢を挫かれて、一同ハツと足を留めた。

對岸に一騎あり。唯見る蘆毛の三才駒、太く逞ましきに跨りて、古び且つ色褪せたれども、紅の筋目正しき、騎兵の服をつけたる偉丈夫、帽は被らず、手に一根の鞭を取りて、手綱をきり、と引緊めた、襟に挾める緑の旗。

白山嵐の朝風に、すら／＼と細く靡き、靡くとすれば、はら／＼と廣く煽つて、朱筋の軍装、蘆毛の綾、風采堂々、威儀凛然、四邊を拂ふ其の中にも、蛇體に燃えて鱗を漏る、毒火炎かと物凄。

寄手はいづれも見覚えたり、豫て警部長が自慢の逸物、昨日掠奪されたる乗馬、と慚ぢ且つ憤ること大方ならず、馬、人とともに生捕れと、警部が指揮を待つ間もなく、我勝に今、流を越えむと身構ふる。

爾時馬上に一揖して、騒ぐな方々、日の昨は警部長十時閣下の、賁臨を忝うす、我等下賤の土方輩、光榮是に過ぎたるなし。然るに水草を追ふ身の上、爰に御覽せらるゝ如く、ゴビ、サハラ

の沙漠とやらむに、起臥すると一般なれば、何の風情も候はず、恐縮此の事と存する處に、十時殿の御好事、捨小舟にて御歸館あり、御乗馬此方に遺されたり。小生馬丁を承り、此より

返上致さんする折から、使の御人數御苦勞千萬、否、其方よりお越に及ばず、唯今推參、と會釋

線流風

して、一反ばかり、うしろざまに、早調子に乗つて退り、發と一鞭、蘆毛は飛んで、小川の上を空行くばかり、備の中に躍り込むと、これは、と驚く寄手を割つて、眞圓に乗廻し、八方に蹴て通り、巴に、卍に、雪紛々と攪亂して、緑の旗色鮮明に、流を再びつゝと引き、駒の頭を立て直して、

騒ぐな方々、人に手数をかけながら、御用呼ばはり奇怪なり、尋常に受取つて、禮を陳べて歸らるべし、無用の腕立せられむか、得こそは渡さじ、と微笑して呼はつた。

倒れたるは起上り、轉んだのは立直り、退いたるは集つて、警部も遠くから駆けつけたが、互に稻妻の如く目くばせ一遍。

今は、と手ン手に抜き連れた、篠や、芒や切尖を、きりり〜と翳し揃へて、哄と揚げたる鯨波の聲。

やあ〜、河内の國富田林の住人、大和田の太郎、同じく次郎、兄弟のものこゝにありと、風と流と半被一對、二人の工夫、大なる麻袋を等しく肩から引かけたが、屋島の左右に顯れつと見れば、寄手の白刃から火花が散つた。

雨、霰と飛び出す礫、また、く間に五六人、額を破り、頬を裂き、前齒を缺き、唇を曲げ、血だらけになつて敗走す。

洵や、河内なる富田林石川邊は、兒童等が命を賭くる、石合戦の名所である。

九十七

「如何にも喧嘩ではありません、ないともな、貴官、喧嘩處の沙汰ではない。其の喧嘩でもないものに、仲人の何のといふ次第では毛頭ないのぢやよ、はあ、何ういたして。

けれども黙つては見て居られん、御尤ぢや、貴官はじめ皆様が、斟酌をなさればこそ、手向ひもいたし居るやうなものの、恚うやつて、鞘をお拂ひなされた日には、何として一支へも出来るものぢやない。

ぢやがな、對手も此の通りの無法者ぢやに因つて、抵抗は屹と爲る、爲る段か、何處までも、蟻螂の斧ぢやけれど擽げますわ。

さあ、然うなつたが最後、朱い雨ぢや、血の川が流れますで。

何と黙つて居られませうか、御覽の通りの大勢、一人や二人お斬りなされて、事が納るわけではない、行掛りとなれば死人の山ぢや、情ない。眞晝間の修羅道ぢや、あらう事か、あるまい事か、宛然これ戦ではなからうかな。天ヶ下日の照る中で、血の川、死人の山、此國に大騒動がござつては、第一諸國への聞えも如何。

穩便々々、平に穩便になされたい。が見ますれば、旦那方に御怪我もござる、容易ならぬ事ぢやに因つて、此のま、お引きなさり憎いは萬々ぢや、私が命がけて歎願する、拜みますわ、是、是ぢや。」

五太夫は片手拜み。

「巨山殿、無念、……」

とばかりで、警部は蒼くなつて震へるのであつた。

「お察し申す、お察し申す、が貴官、何とぞ、せめて今日だけは佛になつて、はて、其の御服の手前もあるが、其をぢや、忍辱の法衣と思召されて、目を眠つて頂きたい、劍も繩も不動明王。」

巨山五太夫、一、一生の歎願、お慈悲を頼む、是ぢや、此の通りぢや。」

と警部の前に立塞がり、捨吉等を背後に庇うて、再びちつと首を垂れた。

茅屋の屋根に村岡不二太、悪き神の偶像の如く突立つたが、巨山が此の體を傍目も觸らず、屹と見澄し、短銃をすばと衣兜へ、身を回して蹲んだが、柿の枝に手がかゝると、姿は葉隠れ、フツと失せた。

名残に揺る、樹の梢の末だ戦ぎも留まなずに、遙に背後なる方に、工夫等が驍し交へた、鶴背の尖の並んだ中に、ひらりと黒き旗の擧ると齊しく、ざわ／＼と動き出して、次第に繰り引きに

磧の方へ。

しやんと構へた、捨が大斧の手が弛んで、同一く、じり／＼と早や四五間。

寄手の殿に唯聲のみ高く、御用だ、御用だ、と前刻から、続け様に怒鳴つて居た木谷轉倒太、

爾く大斧の遠ざかるを見ると、ばら／＼と駈けて出て、

「御用だッ、」

「先づ、まあ、」

巨山は遮つた。

警部は拔劍を握つた手に垂々と汗しつ、

「巨山殿、無念ですわ！」

「實に以つて、何とも申さうやうはないですがな、川の西へお向ひなされた、御同役も早やお聞濟み下された、成らぬ處をお引上げ下された。尤もな、此の風説を聞くと直ぐに、駈けつけて来ましたで、警部長閣下の内命を以つてお留め申すではない、十時殿さへ説き附けて、其の命令さへ持参いたせば、一も二もないのぢやが、一刻も疾うと氣が急いたで、未だお目にはかゝらんが、其の段は私が胸。恚やう申しては異なもんぢやが、な、別懇にして頂くで、如何やうにも計らふぢや。來がけに今一隊の方も宥めて参つたが、何か警部長が御忘れになつたとかいふ、乗馬は對

岸の隊へ戻りました。其だけでも、御機嫌は、と存するで、萬々其の方は心得ましたわ。
平にお引上げ下されたい。決して、法を曲げ、掟を無になされといふではない。唯其の仕方を
お變へなされと申す事では、あ、幾干もある、渠等を懲す術は幾干もござる。」
といった時、巨山は四邊を眊したが、工夫の姿は一ツもなかつた。
能く巨山を知り、且つ警部長との間をも知つた警部は、やゝあつて頷いたのである。

禮ごころ

九十八

警部はするりと拔劍を納め、
「いや、非常な場合、貴方には飛んだ失禮でした。」
と更めて禮を施す。

時に悲壯なる聲を揚げて、

「警部殿、此のま、お見遁しになるですか、實に口惜いです。是非とも私にお命じ下さい、是か
ら一人で踏込んで参つて、我が、我が警察の體面のために、此の木谷は死にます、誓つて斬死を

いたします。」と大和杖を叩いて詰め寄せていつた。

流石にかけて、警部は、打棄るやうに、

「負傷者の始末をなさい。」

餘計な事をといはぬばかり。

テレ隠しに、然も長官の命、轉倒太、承るといふ調子に、

「諸君、手を貸し給へ」といつて巡查とともに、彼の大斧のために打倒されたる一人は腰が立つ
た、其の手を引き、のめつたまゝの、其は肩。

「え、先刻御休憩に成りました、村長の許まで引上げませう。」

「宜しい、行け。」

「はッ、」

「いや、止むを得ません、行係り上、如何に貴方だからというて、我々、恚やうに官服を着け、
拔劍までしたものが、直ぐに引取る次第には参りませんで、人の見る前です。貴方に頭を下げさ
せて恐縮でした。」

勿體ないです。

巨山殿、御容赦下さい、私一人としては、何、貴方のおつしやる言は、天の命、神佛の令と

も思ふ、たとひ、其がために職を空うした責に因つて、進退伺ひをいたすまでも、直ぐにお従ひ申すのですが、何分兇徒の前があつて、つい然うも行かんで、實に……劍も繩も不動明王、とおつしやつて、拜まれました時には冷汗を流しました。」と心からいふのである。當時巨山の徳は、名は、恠る向の人達にまで、實際是程のものであつた。

五太夫 聊も誇れる色なく、

「是は、痛み入つたお言ぢや。悪人にいたせ工夫どもも同一萬物の靈長、西瓜や南瓜と血になつては餘り不便、又、怪我にいたせ、巡查諸君にお痛があつてもならず、五太夫、命にかけてもと存じましたに、速に御許諾下されたは偏に貴官の御仁心、こりや、數ならぬ私が眞心の天に通じた事と思ふ、先づ、祝着でござる、祝着でござる。」

「というて、ほくく嬉しさうに莞爾々々。」

「いや、しかし、十時殿の方は、御心配下さるな、私がいかにやうにも取計らふ。」

「は、願ふです。」

巨山殿、仁も徳も、それは貴方、私などの心得たことではありませんが、實際、持餘した處です。何の、かほどでもあるまいと思つたのですが案外な奴等、容易ならんですな。あの勢で御覽なさい、工夫一人を拘引するには、二名の巡查を殺さねばならんです。然も其で、首謀者を捕

縛出來るといふではない。これは別に手段を用るなければ不可んと、考へなかつたぢやないですが、見すく、抵抗をされて、其のまぢや、警察が無くなるですし、殆ど途方に暮れたですよ。

別隊で、對岸へ向ひましたのも、何ですか、矢張貴方の御意見で。」

「其もな、早速、水島の茶店まで、引揚げて呉られました。」

「成程、しかし彼方では馬を取返したとおつしやるから、警部長殿に對しても、幾分か面目がありますか。」

五太夫は心易げに、何事も含んだ頬、ふつくりと打領き、

「其の事は萬々御懸念無用ぢや、些ともな。」

「何分、願ひます。」

と又一禮して、

「それでは私も村長の宅まで参りませう、な、貴方も腕車へ。」

「まづく。」

「失禮」と警部のみ。寄手は先んじて九郎次が方に引取つたれば、靜に一人踵を返した、何となう、劍を帶した後姿の腰附寂しく。

およそ今朝、露を含んだ朝顔の花、薄れゆく霧の中に、濡色を帯びた茅屋の風情、緑深き山の姿を、目を留めて見たものは、巨山ばかりであつたらう。

五太夫は、警部の立去つたあと、彼處に三人の車夫と、一臺の車を控へて、唯一人、然も快げに四邊の景色を尙した。

數分時の前の、此の處一場の光景は、如何なるものなりしぞ。妖雲蔽ひ、戦塵群り、ために暗澹として物凄かつたが、名残もあらず、僅に五尺の軀を以て、太刀風を封じ、血の雨を治めて、幾人の生命を救ひ、莫大な善根を植ゑた三尺の地は、やがて芽を萌し幹を生じ、枝葉長に繁茂して、山鳥も来て、驚も来て、名を後世に傳ふべく、旭影さへ晃々と千代ます松の葉の如く、榮ある光を浴びせた中に、親仁の風采赫耀として、炫く三宮に輝いたのである。

おづ／＼と傍に寄り、

「南無阿彌陀佛、え、旦那様々々。」と揉手をする、年老いた工夫があつた。

五太夫快活な聲で、

「私かの。」

「はい、旦那様、其後は打絶えまして、しばらくお姿を拜みませぬ。」

勿體なさうに顔を上げたのを、唯見ると、巨山が養うて、子の如くに慈む救小屋に、五百有餘の窮民の、いづれ愚はない中にも。女お露の父として、取分け目をかけたにも係はらず、行方の知れなかつた甚平親仁。

五太夫、見るより額に雲、目に稻妻、陰険な顔をしたが、手の裏返して佛づくり。

「お、甚平か、何うしたよ。」

「はい、いやもう、お情を持ちまして、極樂にお引取り下さりましたなれど、前世の業でござりまして、又恚うやつて地獄の苦みを仕ります。」

「甚平や、」

とものやはらかに、更まつて何かいはうとする、腰を折つて、又天窓を下げ、

「さて、旦那様へ、お嬢様が御口上でござります。唯今はお慈悲に因りまして、お役人衆をお有め下さりましたお庇を蒙り、當積の工夫一同、危き命を助かりまして、何ともお禮の申上げやうもござりません。」

就きまして、實は恐れ多い儀ではござりますけれど、お目に懸りまして一言御挨拶が申上げたうござります。尤も、お呼立て申すは重々恐多うござりますが。日かげものの事ゆゑに、罷出ま

するのを憚りますで、何うぞ早や、幾重にも御勘辨下さりまして、此方へお運びが願はしう、はい、お難有い結縁の廉を持ちまして、甚平に、おとも申せでござりまする。」

「お嬢様……とは、誰のおやの。」

「誰が産みましたかは存じませぬが、目上のお方で妙齡でおいでなさりますゆゑ、お嬢様と申します。」

「ふん、」と腑に落ちず、唯頷いたが、巨山は思ひ當つた、豫て聞く、芙蓉湖上の窈窕、地藏堂外の婀娜。

「甚平や、こんな事に、何も禮いはれようとは思はんが、其の嬢様とやら、折角のお志ぢや。此ま、辭退をしては却つて無禮ぢや、一寸行つてお目にかゝる、あゝ、若い者。」と車夫を呼んで、頃刻待つべし、日蔭なくなれば村長の許に行きて休へ、といひつけ、

「大儀ぢやの、甚平、」

「恚うおいでなさりまし。」

お露が唯ある天幕の前に、紫の小旗を取つて、たをやかに待つて居た。

遙に其の、色ある露の花を見るまで、巨山は甚平を先に、磧を長く歩行いたのである。途すがら、此の活佛の來迎を望むもの、風も流も、いづれ小腰を屈めて禮をせぬはなかつたの

で、はじめは、たとひ大なる恩を渠等に被せたりとはいへ、音に聞いた虎狼の輩、五太夫は内心幾分の疑なきにしもあらずだつたが、尾を掉る犬の心地して、

「お精が出るの、」

と一人々々に。

百

お龍は椅子に居たが、しとやかに立つて、お露が先立ちで天幕に入つた巨山を、粗末な卓子に迎へたのである。

五太夫は去ぬる月、粟生の茶店で古襖の天津繪の、若衆と娘とが抜け出して、土間の床几に並んだのを美しく見た夢の、未だ覺め果てぬ？と疑うた。

甚平が案内をして、お露に導かれた、渠等が、阿嬢と稱ふるものは、正に其の時の旅の女。唯、二人は顔を見合した。

巨山は我知らず天窓から足の爪先まで、悚然として總毛が立つた、豫て胸に宿り腸に染んだ、ものの怪の、現實したのを認めたのである。

一度お龍の旅姿を見て以來、其の容貌も、其の言語も、風采も、亦世にあるまじく覺えたので、

地藏堂を焼いた兇徒、湖を侵した船、巨山家に對して、不言不語の間に、恐るべき害心を挾むもの、忽然として手取川の畔に湧いて、出沒隠見する中に、可怪、一條の紅の絲ありて、首尾を縫ひ聯ねつつあることを、其の都度耳にして知つて居たが、十八九の艶なる女の、何とて強盜放火に同一き、罪惡に與すべき。

曼珠沙華は墓に咲き、稻妻は闇夜に迸る、色あり、光あるものの、怪く恐しきことに伴ふと一般、船の中なる月下の美女も、松の小楯の火事場の佳人も、恐らく見たものの目の折からの幻視に過ぎまい。何の狼狽へた、と心にも留めなかつたが、爰にお龍のあるを見て、犇々と思ひ當つた。扱は！夢にも、現にも、不思議に忘れぬ此の女、病は既に心臓に入つたるか、と巨山は、何となく、淺からぬ因縁のあるやう覺ゆるにつけ、禍は是までに渠等がなした、最愛の妻を奪はんとし、慈善の金看板を焼いた、過去の害迫に留まらず、猶幾多の殘虐や逞しうすらむ未來を憂ひて、冷かになるのであつた。

「旦那様、何うぞお掛けなさいまし。」

とお露は傍に居て椅子を進めた。

思へば同じ女である、もろき、かよわき露には限らず、天幕の中に、少し放れて、敷き設けた筵の上に、工夫の半被の、破を繕うて餘念もなげな、見知越の料理店小柳のお松もそれなり、打

見には唯二十ばかりの柔弱女の、朝顔やいづれ、立勝りて、其の色涼しく、其の花艶に、其の輪の大なるのみ、一層日射にも堪へまじき爛々な風情ながら、心ありて見る目には、威あり、品あり、凄味あり、隱然無上の力ありて、巨山は己が身體に宿りたる憂ふべき病の根の、八萬四千の毛穴より、朦朧として抜け出でて、假りに爾く、夏の雪に淡彩せる姿に化して見ゆるよとて、や、ものいはむとしてお龍の、燃ゆるが如き唇の動くにつれて、胸の躍るを覺ゆるのであつた。

お龍もちつと見詰めたが、そらして傍を見返つて、

「お露さん、」

「はい、」

「此のお方？巨山さんとおつしやるのは。」

「はい、旦那様でございます。」

「まあ貴方、しばらく、」

と恍惚したやうにいひながら、腰をおろすと椅子を溢れて長なる黒髪がはらりと靡いた、お龍は洗髪を背後にかけて、軽く新薬で結へて居た。

五太夫も、はじめて心着いたやうに装ひつつ、

「やあ、成程、其の時のお女中ぢやな。」

「ね、あの道中の茶屋でしたね、お珍しい、貴方が巨山さんで在らつしやいますか。」
「然やう、巨山五太夫ぢや。」

「あゝ、活如來様ですか。」といつて容を更めて肅然とした。

百一

「其節は飛んだ失禮を致しました。」とお龍は更めて會釋をする。
巨山も開き直つて、

「いや、私こそ御無禮をな、つい何にも知らんかつたで。」と五太夫の鰭を落さず聲太にいひながら、何となく落着かず、後見らるゝやの趣で、じろく四邊を向したが、なほ傲然たる態度を保つた。

お龍は軽く額を下げ、

「又其折は、お慈悲深い思召で、御しんせつに、鞍ヶ嶽へ、と申しましたをお留めなすつて、芙蓉湯のお邸へ連れて行つて遣らうとまで、おつしやつて下さいました、其のお情も存じませんで、推して参りましたものですから。」

と、あでやかに、黒目勝なのが靜に左右を。

「御覽なさいまし、とうく天狗様に攫はれまして、こんな處に怙うやつて、果敢ない身の上になつて居ります。」

「何、然ういふこともないのぢやらう。あゝ、確か、彼の時は、御亭主を尋ねにおいでぢやとか申されたが、其はお逢ひなかつたかな。」

五太夫は此の間に、お露が汲んだ一碗の茶を喫して、胸も靜まつた風情であつた。

「はい、どうやら念が届いたさうで、逢ひます事は逢ひましたんですが、實に、貴方。」と優しく差俯向く。

「先づそれは何よりぢや。で、其の御主人は此處にお在るか。」

渠は只管何者か此處に大に出現し來らむことを、頻に慮れるなり。

「否、其の事でございます。」

「はあ、はあ、」

「良人がお目にかゝりまして、迎も口や言では盡されませんまでも、兎に角、今日の貴方の御恩のお禮を申しませんければなりませんのですが。」

「其には及ばんよ、何の、何のお前さん。」とおしつけるやうにいつて片頬笑めば、

「お聞き下さいまし、あの、貴方。良人と申しますものが、あるやうな、無いやうな、生きて居

りますやうな、死にましたやうな、宛然煙のやうな、霞のやうな。」

お龍は何か身を震はし、鼠地の浴衣の肩を窄めて、兩袖を胸に淺く、搔い寄せて手を組んだ、小指の白きに指環細き、紅寶石の小なのを爪繰るが如く弄びつつ、

「あの、幽霊見たやうなんでございますから、是へ出まして、御挨拶は申されません。何うぞ御堪忍下さいまし。私から幾重にもお禮を、といひつけられたんでございますが、猶の事、口にも言にも盡されはいたしません。就きましては、ほんのお禮ごころに、一品差上げたいものがございまして、其で、わざ／＼、お呼び立て申しました。」

「其は御丁寧。何もこれ、井戸へ落ちようとする小兒を見れば、危い！と駈けつけて、助けるのが定の事なり、私も一ツは道樂ぢや。挨拶の、禮のといふ、お心遣ひには及ばんで、志だけで澤山ぢやが。然しお前さんが折角のお招待、唯見るだけを受納しよう、何ぢやな。」

「最う貴方、どんなものとおつしやつては、消えも入りたうございます。あゝ、消えも入りたいと申しますとね、そんな、形のないやうな者に連添ふ私、私だつて生があるやら、ござんせんやら、唯お目にかゝりましたばかりです。」

それでは、また不思議な女なら、どんなか寶物でも差上げますれば可うございますが、それは、貴方がお住居の、芙蓉の底にいらつしやる、乙姫様の遊ばすこと。何のまあ、こんなものと、お

驚き遊ばしては不可ません。」

「はての、其は、さて見たいもの、五太夫懇望ぢや。」と椅子を寄せる。

「一寸、お露さん、お松さん。」

「はい、」「はい。」

「貴娘方少し此處を外して頂戴。」

あとは主客が差向。

「此處にござんす、これですよ。」と卓子の引出奥深う、づつと出して、差置いたは、小形の桐の手箱である。中は救小屋の非人控、馬之部、牛之部はいふまでもない。

巨山は蒼くなつた。

續
風
流
線

旅のころも 草いきれ 繪具皿 鐵鉢 轡の音 新關 かな
 俱樂部 竹馬の友 柳の絲 帷幕 うたゝ寐 夜討 黒髮谷
 曼陀羅華 乞巧奠 七箇の池 銀河 大水牛

旅のころも

一

高い山からナ、谷底見ればヨ

お萬かはいや布さらす。

どうくと緩い聲、馬は氣狂ひではないけれども、轡の前の綱に結へて、泥草鞋をぶらりと提
 げたが、白山晴れた東雲の、金澤の町端、並木の松の梢へかけて、軒に薄煙の霰舞く中、露に濡
 色の涼しげな、地摺に曳いて、馬士殿、馬士殿。

いづれも近山から薪を積んで出て、是を市の花主さきへ運ぶのである。
 先へ立つたのが節を伸ばして、

「お萬かはいや布晒らす、と吐かあ。どうノ、
 背後から、

「と吐くかい、どうく、矢張それも姑婆の命令だつべい、亭主の心ぢや、日南で洗濯も爲せた
くはあんめえぞ。」

「然うよの、昔々吉崎の婆々といふのは、嫁を威さうとして被つた面が、しやつ顔へ附着いて、
活きながら鬼になつたといふが、古着屋の姑は、未だハア角も生えねえだ、何爲だかな。」

「何のお前、今朝あたりは、角が生えた時分だつべい、」

「覗いて見さいな、覗いて見せえ。」
一人の馬士がいつた時、他は不圖其の足を留めた、大戸は明けたが薄暗い、一軒貧しげな古着
屋の前で。

「へ、町内一番の早起だ、これも嫁にや辛かつペヤ、」
故と奥の方を透かしながら、

「眞暗だ、見せえ、宛然鬼の棲む洞穴だ、」
尙睨むが如くにして、

「や、お持佛へ燈明を上げたわ、何の事ぢやい。」

「はて、そりや白髪の間から目の玉が光るのだあよ、ドウ、」といふと、後のも、ぐいと手綱。首
垂れて目前の草鞋を見詰めて居た馬は、ふツ、鼻息を荒くして、密と前脚を擡げたが、のツそり

と歩行き出した。是より前、東海道中の畫にある景色で、並木から町の入口、馬士が蔭口を利
いた店頭まで、馬の尾になり腹になり、一所について来た一個見すばらしい、古洋服で、襷れた
状の旅客があつた。

此の人物、馬士が行過ぎたあとに残つて、路の中央に其ま、動かす、腕組をして突立つたが、
然氣なく、熟と其の店を見込んだのである。

馬の尻が圓く見えて、二人連の馬士は彼方に遠く、折から左右に人あらず。
「どう、」

思ひがけない背後の懸聲、片寄ると又馬士なり。旅客と擦々に通る途端に、顔を見合せ、目と
目を屹と、ものをもいはず、小鼻を仰向け、あんぐりと口を開いた、誰ぞや、此の山賤は？ 風
流組新参の働もの、船頭馬方駕籠屋の良助。

爾時店の側に、未だ閉めたまゝであつた、透間だらけの白ツ茶けた潜戸を、がら／＼と開けて、
伏屋の中から、衝と駈出した婦人がある。

惟ふに馬士どもが噂した、嫁といふのは是であらう、圓鬚には結つたが根が弛んで、瘦せた頬
へ鬢の亂れ、芋柄の赤いのもいぢらしいほど、愛らしいが愁顔、尻切の浴衣に二布して、帯だけ
さちんとした尋常さ。禪かけの腕が露出、露か、涙か、袂も裾も何となく雫にしつとり、朝戸出

の脛重けれども、身は軽く、走り寄ると、突然地に片膝つくほど手を伸ばして、路に落ちた、一片の紙屑を拾はうとした。
處を馬で、旅客が身を開いて避けたのも同時、眞黒な獣の腹は、殆ど婦人の、黒髪に乗るばかり、あれ、と胸を反らす間に、屑は疾く鱗爪にかゝつて、濡地に引去らるゝ。

二

婦人は驚いて避けた身を、やがて力なげに後に起して、とも知らず馬士の立去るのを、悄乎と見てゐんだ。

此の體を視めた旅客は、思はず婦人に進み近づき、

「おゝ、姉さん、何うかしたか。」

聲を掛けると、顔を上げて仰いだばかり、何にもいはず俯向いたが、容子は察するに難からず。

「何か踏まれたのかね、」

向直つて、

「おい、馬士、馬士。」

「はあ、私か。」

良助は空惚けて、西か、南か、風の向さへ知らない顔色。

「お前だ、」

「何だ、用かね。」と曳いて居る馬の平首の上へ、頬冠をした天窓を出して、振返つて目をきよろつかせる。

「應、此の姉様が何かお前の馬に踏まれなすつたやうだ、別に悪気でもあるまいが、些と氣をつけて通るが可からう。」

良助案外な面をして、

「へい？」とじろく〜脚下を覗きながら、

「何を踏みやあがつた、ドウ、畜生、」

仰山に一喝し、

「御免なさいやし、はい、済まねえでがす。」

「何うも土が濡れてるから猶始末が悪い、姉さん、今のは何でした、紙切のやうだつたがお手紙か。」

「お大事なものでござりやすか。」

良助も馬の頭を曳廻らした、二人の間に挟まつて、赤い手柄の頸白く、偏に首垂れて控へたの

が、懇に慰められ、慇懃に詫びられて、日影に消えも入りたさう。

「否、何にも存じません。」

「御存じない？」

良助は唯打膽る。

「はい、あの、紙屑でございます。路に落ちて居たのですから、私どものぢやございませぬ。」

少し震へて低聲になり、

「母様が見つけまして、費だから拾つて来い、と申しますから、それで、あの……貴下、最う、私は、

と颯と耳朶を紅うする。

「姉や、姉や、」

此時氣だるさうな咳びた聲して、長く引張つて内から呼んだが、重いものの、胃の腑に響く、快からぬ調子であつた。

「はい、」

「姉や引」

「はい、唯今、」

「お介意なく、」

目禮した目に涙充滿、袂でかくす違もなく、肩を窄めて入らうとした。

旅客は、あとを追うて聲を密め、

「阿母様ツて、姑だね。」

微に頷いて戸を潛つた。うしろ姿は、直に此方へ向を替へて、土間に蹲むと、敷居に手をかけ、此邊でする件の戸を、低い屋根裏へ上げて開けようとした。

屋根裏には、是を支ふる仕切がある、時節だと、燕が巢にするのである。

「姉や、これさ。」

今度は突慳食に呼んだので、戸を其まゝにして奥は闇の、洞穴の如き中へ、吸込まれたやうになつてあはれに隠れた。

「熟と見送つて目を上げて、

「先生、」

「氣をつけて行け、良助。」

「どう、どうツ。」

直に、しやんくく。

旅客は此處を去りあへず、開け切らぬ潛戸に、ぴつたりと身體をつけ、前後を眊して耳を澄ました。

三

「姉や、紙かいの、」

「はい、」

「切ぢやつたかいの。」

戸外で聞くばかり仔細はない他人の耳にも、厭なものいひ。

「紙屑なりや惠比須様、切屑なりや荒神様、元結の切端にももの、それ〴〵神様が宿つてござる、粗末にはなりません。」

私は、目が疎うなつたで、此處からは能う見えんであつたが、何ぢやいの。

やれ〴〵、心ないことかな、誰ぢや知らぬが、路に落して打棄つて置くといふがあるものか、眞個に勿體至極もない。

さ、主が拾うたのを此處へ出され、私が一寸戴いて、それから籠へなど、葛籠へなど、ものによつて藏ひましょ。賣れば五匁でも一分でも、お錢の足になるのぢやでの、さ、見せつしやい、

見せつしやいよ、これ、何うぢやいの、姉や。」

嫁は口籠つて、あるか無きかの返事、漸々聞取られた。

「母上様、」

姑は疊みかけて、

「これ、何うぢやいの。」

と吸殻を拂く音、コト〴〵と極陰氣。

「濟みません、母上様。」

「濟まぬえ？ 何がい、主が打棄りはしましき。はあ、それとも、彼が、一所にお錢でも落ちて居たのを、密と隠す氣にならさつたか、あ、そりや悪い料簡ぢや、針一ツでも、秘し隠しをさつさると、直にソリヤ針の山ぢや。ものを隠すといふがの、盗賊をするはじまりで、撮食をするわいの。密通もするわいの。怪我にでも、そないな心出して見され、背中も腹も爪も口も、頭髪も裂けるぞい。」

なう、氣がついたら大事な、さ、見せやれ、ちやつと出され、これさ出されといふに。」

「否、拾ひましたのではござんせん。」

「何ぢや、拾はぬか。」

「あの、母上様、濟みません、此處で貴女が御覽なすつて、拾つて來いとおつしやいました。」
「おいの、それをお主に聞かいかいの。」
「はい。」

と言ひ淀んで、しばらくして、

「直に駈出して參つたのでございますが、あの、拾はうとします處へ、丁ど馬が來ましたもの
すから、吃驚して退りますと、何でございます。足で踏みつけましたものですから、何處か見え
なくなつて了ひました。」と嫁はおろくする氣勢。

「馬に踏まれたや。」

「最う一足、疾く參りますと、可うございましたものを……、」と又口籠る。

爰で少時寂寥したが、やがて稍聲高に、

「お節や、」

「……………」

「足を出され、」

「え、」

「足の裏を出して見せやれ、」

「あの、足を、」

「おいの、」

「何爲でございます母上様、」と震へていふのが手に取るやう。

「はて、何を然う、うぢくするぞい、これさ、出して見せるのぢや、堅うなつて窄めては埒明
かん、」

「あ、れ、でも、勿體ないではございせんかねえ。」

「何の、用がありや喰物も足で踏むわ、姉や、私が吩咐ぢや、」

じり、詰め寄つて退引きさせず、と思ふと、ぴしやり、無慙な物音。

「あッ」と忍び音に泣くと同時に、火のつくやうな嬰兒の叫び。

「いや、何といふ不作法な、たとひ何が何ぢやとて、勿體ないといふ口の下から、假初にもこれ
親と名のついた私の鼻頭へ、踵を突出して濟まうと思ふか、思ふのかいの。うんにやさ、」

斜ッかけの無理難題。

四

「これい、主がやうなもののは、他人が裸になれというたら、下メから前へ解く人ぢや、いけ、

けたいの悪い、よくも〜おいそれと私に踵をつン向けさつた！ 不躰な人ぢや、一層思ひ切つて、すつと出され。うむといへば、すつとやら、人が見せやれというたればとて、何がなしに親の前へ足を出いた極印を、汝、其の太座へ、此の火箸で打てやる。」

「御免なさいまし、母上、」

はつと忍音に泣くのが聞えて、

「勿體ない、失禮な事とは存じましたけれど、お、お言に背きましては、猶此の上御機嫌が、」

と切れぐにいはせもやらず、

「何ぢや、勿體ない、お言に背かぬものが、何で又吩咐たら直に駈出して拾はんよ。ほんの二息疾いと遅いで、屑は馬めに引かれたらうが。」

これ、私がいふのは其の事ぢや、ソレあ、爲つされ、アイというて、まつとうに飛んで出りや、あの屑一片反故にはならぬに、今も見りや、生ツ白い、主が踵は綺麗なこと。何で跣足で駈けて行かぬ。寐惚眼で土間を捜して、ぬらくら蝮を拵への、赤い鼻緒を穿く中には、馬士も通るわいの、馬も来るわいの、

亭主どのは久しい留守なり、地體又何の藝に、見得外聞をさつしやるよ、うゝ、これさ、」

「はいではない。しねくねと、白狐が、化け様の尻尾見るやうに、臀を視めて小半日、踵を湯屋で磨く隙に、其の兒のおしめを何爲洗はぬ、日がなく〜小便と涙で、内中が濡りくさい。何ぢや其の泣き状は、お佛壇の前で、あらうことか、宛然これ、焼野の雨の姑獲鳥ぢや、南無阿彌陀、失せくされ、足があつては消え憎かる、親の目前へ突附けた、汝、其の白いものを、捻抜いて、ものにせう、」

「苦、あ痛、」

きやつと再び嬰兒の悲鳴。

堪らず二ツ三ツ足踏して、

「御免よ、」

と聲高く、潛んだ姿を明白についと出た、旅客は店頭へ突立つて、

「一寸願ひます、居ませんか、誰も居ないのでですか。」

「はい、誰方ぢや。」

應答は姑がして、稍あつて、お節と呼ばれた嫁は悄然と立ち出たが、花屋にしをれた撫子の買はれて露を得た風情。

見知越の會釋はさせず、突然其處に釣しかけた、宗旨は知らず墨染の法衣の、賣物なる端を引

いて、旅客は先づ顔を背けた。

品は唯其ばかり、古足袋が二三足、他に此のあたりの名物とて、菅笠が四ツ五ツ、鼠が着さうな蓑もありけり。

今度は嬰兒を抱いて居たから、

「おかみさん、是は幾干だ。あゝ、然うか。成程正札」と振つて見て、

「可し、可し、ぢやあ、貰ひますよ。大分正札が古くなつたね、多時曝されて居たと見える。急に儲かないからといつて、ヤケに打棄れば其切だ、辛抱をなすつたから、何うです、些とも値切らない私のやうな客が出来た、御大事になさいよ、商賣は、」

熟と見て、目を瞬き、忽快活に、

「はゝゝはゝ、幾干がもんです、否、大口を利くわけぢやない、こりや此の儘着られるだらうね。

何か豪さうなことはいつたが、私にや、なかゝの大金だ。いくら世棄人の着るものだつて、片袖もないなんと来た日にや困る。怎う唯捻くつた處ぢや、尋常の着物と違つて薩張見當が分らない、可いか、大丈夫なんですか。」

お節はうつとりした面色で、

「誰方が召すのでござんすえ。」

「誰方ツて、私が着る。」

といひかけて自分の姿、古洋服の腕を視め、づいと伸して呵々と笑ひ、

「こりや腕いで落して行く、此の大な屑はね、お前さんお拾ひなさい。何、其かはり其の菅笠を頂戴しよう、それも無錢とは謂はんです。」

草いきれ

五

「お爺さん、お爺さん、おいでな、お茶をおあがんな。」と縁側に立つて生垣越に、隣の空地に草を取る、よぼけた老人を招いたのは、水にこそ数入れたれ、白地の小瀟洒した浴衣がけ、縞子の帯を引かけ結び、衣紋寛かに小股の緊つた束ね髪の中年増。團扇を片手にすらりとしたのは、螢に、月に配すべく、軒の蜘蛛の圍、草いきれ、日盛には風情過ぎたる、これなむ幸之助の姉にして、落魄不遇の浮世繪師、狩谷秀岳が内縁の、名さへお妻といふのである。

絶る小草の露涸れて、石に火花の散るばかり、鎌の柄に汗を握つた、草刈の親仁は菅笠を仰向

けて、眞赤な目で此方を向くと、皺面に笑を含んで、ひよろ／＼と腰を伸し、手水鉢の傍なる、内證で出入する垣の破目から、曳、やつとなと入つて來た。

草染の筒袖、同じ色の半股引、襟に黒く博愛と染めたは、巨山に養はるゝ小屋ものの記號と見える、牛か、馬か、知らず垣を潛つたのは犬であらう。

笠を取つた兀天窓に、煮染めたやうな手拭で、捻顛卷の額が、ぐツたり、縁へ擦付けるばかりにして、

「是は御新造様、厳しいことでござります。」

「暑うございますねえ、まあ、肌でもお脱ぎなさいな、さあ、お茶を入れました。」

お妻も其處へ、團扇を軽く片膝支く。

「何にもありません、また附木のやうなお煎餅、澤山おあがんなさいませよ。」

「はい／＼、頂きます、頂きます、いや最う御遠慮はいたしませぬ、あゝ結構な。」

「ごくりとお茶飲み、齒のない口で、びた／＼と舌打して目を塞ぎ、

「眞個でござります、はい、辭儀挨拶をいたしますやうな、身體ではござりません。さもしいことといふと思召しませうが、飲むにも食べるにもがつ／＼して居りますので、お隣の草撈りに雇はれましてから此の何でござります、二三日な、恙うやつてお内方でお茶を下さりまするが何より

樂みで、はい、張合になりまして、何分か其の苦勞も忘れます、はい、はい、難有いことでござります。」

と過度の勞働に眩んだ目に、朦朧と極樂でも見たやうな、あはれなことをいふのであつた。

「まあ、お爺さん大變だねえ。お年寄だから眠くないかも知れないけれど、些と横になつてお休みなね。」

「もし飛んだことをおつしやいます。」

片手に茶碗を持つたまゝ、目の上で手を振つて、

「なか／＼以ちまして御新造様、お小屋づきの役人が、各自の仕事さきへ、見廻りが烈しうござります、晝寐どころではござりません、恙うやつてお内方でおやつつを頂いて居ります處でさへ、見付りましたら、直に仕置をされまするで、

といひかけて深い溜息。

「可訝いねえ、何故でせう。」

「はい、直に其のお雇主の、賃錢に差響く所爲でござります。」

「だつて、巨山の小屋に世話になつておいでなさる人達は、何だつていふぢやありませんか。雇ふ方でも、巨山に免じて、何だかね、慈善事業とかいふものの、手傳をする氣だつて、餘所のよ

りか賃錢が多いッていふぢやありませんか。だからお爺さんなどは、そんなに働かないたつて、寝酒の一合ぐらゐ飲めさうなもんだわね。」

「へい？」

「といつたが怪訝な様子で、お妻の顔を瞻りつつ、

「へい、御新造様、貴女は、巨山の小屋、とおつしやりますか、巨山に免じて、とおつしやりますか、巨山と。」

「何、巨山が何うかしたの。」

親仁は心から笑傾け、

「へ、へ、へ、こりや初耳でござります、つひぞ未だ、呼つばなしに巨山とおつしやる方を、聞いた事がござりません。」

六

お妻は婀娜に浅笑せり。

「あゝ、然う悪かつたね、活如來様だつけ。」

「何が活如來、」

と親仁は四邊を向した、お妻が中腰に凭りか、つた、障子半ば開いた中に、繪の具皿が見え、机が見えて、一人背後向きになつて晝寐した男がある。そよくと風は通すが、此の小座敷を開放さず、浅室で押入の中さへ知れる、穴だらけな、隙間を塞いで居る御新造は、内を庇つた風采であつた。

親仁は氣を兼ね、

「旦那様はお寐みでござりますか、此處で饒舌りましてはお騒しうござりませう。」

お妻は一寸振り返り、覗くやうにすると、後毛がはらりと。

「否、内のぢやないんです。でもね、些とも氣づかひな人ぢやありません。」

「いや、最う、みるめかぐはなでござりますに因つて、虚氣呼棄てに出来るわけではござりませんが、御新造様が、あの巨山の、とおつしやるにつけて、申すまいことも申します、はい。

何が如來、貴女、何の彼が活如來でござりませう、狼と申したけれど、もつと恐しい、虎に法衣でござります。

それでも根深く巧んだと見えまして、何處へ行つて誰に聞いても、拜まぬばかり、蔭でも神佛に扱ひまして、つひぞ是まで、呼棄てになんぞしたものにはござりませぬ。

御新造様、世の中は盲目千人と申しますが、些とは道理に明い人もある筈でござりますに、彼

を佛と申すに就けて、もし、佛といふものが、あんなものでござりますと、最うこれ、死ぬのばかり待ちまする、老耄の後生が頼になりませぬでござります。」

と衣着する齒もなく、老の唇寒からずや。

お妻は然り氣なき面色で、

「まあね、私たちは、世間で皆がいふやうに、そんな難有い人だとも思はないけれども、あゝやつて人氣のある處を見れば、萬更でもないんでせう。そりやお爺さんをはじめ、大勢世話になつてお在だから、長い間には、些とやそつと、おもしろくないこともあらうけれど、」

「御新造様々々、」

親仁は膝頭で腰を捻り、

「些とや、そつとは親兄弟、何の中にもござりますが、いやはや彼の化虎と來ましては、お話になるのではござりませぬ。」

お聞きなさりまし。

先づ私ども、喰ふや喰はずに居た困窮人が、小屋へ入れられたと思召すかい、巨山の情に救はれて、分相應、裏店でも、極樂へ引取られたと思はつしやりませう。

あだげた言を。他人様は御存じない、宛然活きながら地獄の境界、今時の懲役同様。

近い話が、慥うでござります。

小屋で養はれますからと申して、唯口を開いて巨山の掌を舐るではござりませぬ。年寄は年寄、若い者は若い者、婦人は婦人で、皆それ〴〵勤をせねばなりませぬ、働かねばなりませぬ、なもし、仕事をせねばなりませぬ。

是は活きて居ります冥加、當前の事でござりますが、其の働きますに就いては、いづれ手間賃を取りまする。」

「あゝ、」

「其の時間が貴女、御新造様、自分世帯で遣つて居りますものより、小屋者の方が、すつと餘分に頂けますので。」

「結構ぢやありませんか。」

親仁は兩手で壓へる眞似して、

「否、先づお聞き下さりまし。私は何も、御新造様のお情に、甘やかされて附上つて、榮耀に愚癡を申すではござりませぬ。」

土臺あの巨山が、鬼と佛の相違ぢやで、此處へ雪が降りまして一寸は然うかとはおつしやるまい。」

日ざしに蔭なく、白山あり、畠續の場末の庭、蟬の聲じりくと、笠には蜻蛉が、きらりとキの字。

七

親仁は番茶で一息吐いたが、他人なき四邊も憚つて、嘗めるやうなひそく談話。

「先づ積つても御覽じまし、何處の國にか晝寐をしてはならぬといふ、因業な佛様がござりませう。罰利生あれば又格別でござります、何う間違へば汗を減らす、恚う仕損へばお飯を當がはぬと、目くじら立てて仕置三昧。

其又お飯と申しますのが、形のある菩薩でもあることか、法華念佛の差別もない、どろく粥でござりますが。はい、三度々々。

然も生のあるお米から拵へるではござりません。不殘な、兵隊屋敷の殘飯を買込んで使ふでござります、米磨水の生溜いやうな粥の中から、澤庵の尻尾やら、鮎の天窓やら、車麩の食缺から、不圖すると貴女様、漉返し紙屑が、舌苔へ、ぬるくくく。」

お妻は艶麗に眉を擧めた。
「まさか、お爺さん。」

「あれ、それぢやで口惜うござります。世間一體の並でなうて、巨山を然まで難有いともお思ひなざりませぬ貴女、御新造様でさへ、恚う申すのを眞個にはなざりませぬ。

外様ぢや、巨山の奸計が圖星に當つて、如來様あつかひでござります、お賽錢、お冥加でも差上げます氣でござりませう。

今の世には珍しい、人扶助をなさる、というて、我も人もお小屋の方へ、寄進に着くでござります。また、そんな人達ぢやからと申して、全く小屋ものが可哀相ぢや、氣の毒ぢや、あの大勢を巨山ばかりでは遣切れまい、少し宛でも手傳はうといふ深切が、あるやら、ないやら、分つたこつちやござりませぬ。

大方は何でござりませう、のし進上、救小屋へながし、と新聞に書き出します、それを見得とするのでござりませう。

新聞ばかりか、野町(地名)と大樋(地名)と兩方の町盡には、大な札を建てて、施主の名が麗々と乗せてござりますわ。

彼を、加州の金看板ぢやと、土地のものは自慢にして居りますが、當事もない見當違。本氣に小屋ものが不便といふなら、表向きでなうて、恚う、蔭で差向になりました時、茶の一杯も振舞うてくれたが可いのでござります。

それに何と御新造様、小屋ものと見れば汚らはしさに、戸外で逢うても遠くから避けるやうにしますなり、内で仕事をさせた處で、直接には快く熱い湯も飲ませませぬ。

大工、左官、日傭、何でも町方から頼まうより、小屋ものにさせる方が、利方で可い。

第一、掟が正しいで、朝も早く来りや晩く歸る、晝休はせず、おやつつの心配も入らぬ、と此處で算盤を持ちますぢや。

巨山の救小屋へ、金子を出さうといふ情があつたら、世話になつて居ります私ども各自に、思ひ遣りがありそなものを、もし、勸定が合ひますまい。」

「まあね、」

とお妻は頷いていつた。

「其の癖、賃錢は、自前で稼ぎますものに較べて、二割方、三割方値が高うござります。當節柄不景氣に就いて、傍では貴女、日に二貫五百、三貫といふ處を、小屋ものは三貫五百、四貫づゝも取りますでござりますよ、はい。」

お妻は膝のあたりなる、團扇を手まさぐつて、くるりと廻すと、牛乳屋の配物か、赤ツちやけた大牛の晝が顯れた、是も暑い。

「それが可訝いぢやありませんか、自前で稼ぐものより、餘計な、お錢が取れて、口が先方任せ、

まあねえ、お粥にもしろさ、其の兵隊屋敷の残物をどろくにした、澤庵の尻尾だの、鮎の頭だの、漉返しの紙だのがぞろく浮き上るッていふ、おほ、おほ、お爺さん、眞個かい。」

親仁は、むくく口を動かし、

「申戲ではござりません。」

「否、まあさ、それにした處で、お小遣に不自由はなささうなもんですね。」

「何、貴女、其が不殘、虎の餌食になりますので。」

八

「其の、もし、小屋ものが、二割増三割増に稼ぎます賃錢を、悉皆巨山が取上げるのでござりまして、はい、四文だとして労働者に歩を呉れはいたしませぬ。尤も雇ひ主とは、直接に約束が出来て居りますで、左官は幾干、大工は若干、草刈は草刈と、賃錢を極めて取引をするのでござりますから、眞似方ばかりも小屋者の方から、収入高を少くして、係りの役人へ差出すわけには参りませぬ。もし又其が露顯れてでも御覽じまし、甘い、容易い折檻ではござりませぬが。

何の、恚うやつて半死半生、生きて居るか、死んで居るか、分りませぬ身體でござります、打たれたり、撲かれたり、蹴られたりは、何の道棄身ぢや然ほどとも存じませぬが、祟が直に食物

に來るでござります。

働き盛の壯俊でも、それ一件のどろくで、朝晩を凌ぎますので、皆が飢饉年の亡者のやうに、餓ゑ切つて居ります處、仕損があるといふと、天窓から食減しで、一日腹を干されますので、是が最う、耳を殺されるより切ないのでござりますよ。」

餘の事に、氣色ばみつつ、

「それが何で情だらうね。」

「何が情でござりますか、親仁などは、生れてから六十にもなりますが、一向に分りませぬ。」

「そんなお粥を啜るのに、何も巨山の小屋へ入らなくつても可さうぢやありませんか、お爺さんはじめ、ねえ、お爺さん。お前さんの稼ぎ高で、残飯を買つて暮さうとなつたら、三人口は過せようと思ふにね。」

親仁は汗を拭ひながら、夥度頷いて、

「其處でござります、其處でござります、御新造様、其處が些と、ものでござりまして、それは貴女、露命が繫げますくらなるなら、人には乞食あつかひにされます、巨山の小屋へなんぞ、誰が入りますものでござります。いづれ今時の蚯蚓のやうに、尾も頭も目も口も開かぬやうになりまして、のたり込むのでござりますが、此處が變でござりますぢや。親仁をはじめ、大勢の小屋

ものは、たとひ羅亭屋にしろ、何にいたせ、相應な稼業のないものはござりませぬ。其の稼業が貴女、引續いた不景氣で、まるで上つたり、勘定して米の代ほど、掌で數を讀むお鳥目は、かいつき見ることが出来ませぬで、仕方なしに小屋入をいたしますが、一旦入りますと、懲うやつて、何か不知仕事にありつくでござります、然も二割増三割増で、くどうはござりますが、巨山の懐へ入るやうにな、はい。

何ぢやといふと、ソレたゞでも寄附をなさらうといふ見榮坊なお方々が、差當り取急がぬ仕事でも、小屋ものを使つて遣れ、慈悲ぢや、功德ぢや、巨山様の手傳ぢやといふ腹でござります。

又せねばならぬ仕事でも、同一ことなら小屋のものにさせる方が、第一人聞も可し、世間體も可し、お上からも譽められる、新聞には名が出る、取締が行届く、朝も疾くから勤めりや、遅くまで晩も働く。晝休なんぞはせず、算盤と外聞を、兩天秤でござりますで、壓れ壓れに、日一日と、自前で拵ぐものは、魚屋八百屋まで花主がなくなりませぬ勘定で、其困つたのが、追々に殖ますな、人數が多くなりや、巨山の人望も大くなりや、寄附金も澤山。

小屋から出ます商人には間屋でも安値に卸す、それが又賣れますわ。日に三度のお粥を資本に、巨山は五百六百、買殺の下男を置いたも同様、女などは、抜目なく、あの奥様の實家でござります、豎川の製絲場へ通はせますかい、其處から又残飯を無錢同然に掃込みますな、是がソレ、と

横撫でにすゝり上げた、親仁は厭な顔をして、
「どろく粥、いづれ漉返しなぞは其の邊の出物でござりませうてサテ、かゝつたこつちやござりませぬ。」

呆れ果てて、お妻、
「馬鹿にしないねえ。」

繪具皿

九

「そんな處へ良人を入れようといふんぢやありませんかね、巨山の小屋へですよ、まあ、兄さん、お察しなさいな。」

「ぢや何だ、旦那がそんな處へ入るとなりや、お前も入らうといふもんか、む、お妻、と冷奴のつまも見て、苳の實をぐいと抜き、指の尖を嘗めながら、膳の上の猪口を取つた、まくり手の色の白い、目の鋭い俵な奴、お妻に兄さんといはれたのは、幸之助にも兄に當る、浪裡白跳河童の多見次。」

晝寐のあとを明け放して、秀岳が留守の晝室に、妹と膳を中。

「まあ、何しろ世話場だぜ困つたもんだな。眞個によ、そんな中で、こんな心配をして呉れぢや氣の毒だ。」

昨夜夜中ツからぐつと伸して、今朝はしら／＼に此内へ飛び込んだといふもんだから、そら寐が足りないや、草臥ちや居るし、何だか汝の顔を見たら、久しぶりで、死んだ阿母の懐へ入つたやうな氣がしたらう、人情も會釋もなし、腑が抜けて、ぐつすり寐込んだ。目が覺めて、ぼつと熱つた處へ、此の又ピンと利く奴を冷して置いてくれた處なんぞ、こりや阿母にや出来ない仕事だ、南無お妻さん大明神よ。」

「あとでお爛をつけませう、眞個にしばらくですなえ、」といそ／＼しつゝ、もしめやかな夏の夕、垣根に近い裏田圃の小川の流潺々たり。

多見は一口、

「涼しくなると水の音まで聞えて来るな、日中は蟬の聲で打消すから此處で叶はねえ、何年経つても相變らず流れて居ら、眞個に多年だつけ。しかし恙う多年にしちや、から一向な御馳走だ、すらりと數々並んだ處は大層なもんだけれど、苳に生姜よ、蓼に大根おろしか、葱をぢよき／＼と行つて、此處に小殿原といふ形で、青唐辛子が二本と反を打つて控へたね、私ア千裁物市場の

氏神か、盂蘭盆の精霊といふもんだ。
と唐辛子を綺麗な前歯で、カチリと嚙んで涼しさう。

「ほ、ほ、おんなじやうに皮肉をいふのね、最う些と経つと、何か拵へて上ますよ、それで
もね、兄さん、大概お察しなさい、そりや酷いんだから、まるで可笑い位ですよ。」
胸のあたりで團扇をくるく。

「正直な處、恚うやつて、骨ばかりにもならないで、お目に懸れたのが不思議なんですわ。」
と何時か黙つて細い呼吸、團扇も静と差俯向く。

「いや、串戯はよして、お妻、此の上心配をしてくれちや居た、まらねえ、夏向は是が一等だ、
處で、」

多見は肩を聳かして、首を傾けて小な暖。

「立入つた話だが、此のお薬味連は、此邊蚊が多いお庇にや、其處等で、たゞ取だ。汝が一寸
姐さん被で出かけりや、蓼も唐辛子も直に間に合はうといふもんだ、けれども奴豆腐な、酒よ、
こりやお錢が出て居らあ、ソレ徳利もあり猪口もあり、汝だつて萬更裸體に前垂をしめて居よう
ぢやなし、見な、床の間に三味線草が生えて居る次第でもねえ。
第一、眞晝間は戸外を歩行けねえやうな私から見や餘程増だ。」

して見りやお前、巨山の小屋へ入るまでにや、未だ階子が四五段もあらうぢやねえか。目の覺
際にうと／＼しながら聞いて居たが、あの草撈の親仁なんざ、乞食よりは情ない境界だぜ。

べらぼうめ、汝の旦那は、立派な晝師だつていふぢやねえか、何も貧乏は構はねえ、大道へ毛
氈を敷いて、へまむしよ入道を描いた處で、粥ぐれえ啜れねえことはなからう、恚う、血が通つ
て居る内に、如來様なんぞの世話になるなよ。アン獸アどんな聲を出して啼くか聞きてえや、巨
山め、
と衝と煽つていふ。

十

少時ものもいはないで、お妻は思ひ屈したか、引入れられさうな様子であつた。

多見は故と元氣よく、

「何しろ一盞やらねえか、御馳走は難有いが、一人で遣つて居ちや杯が泥んで不可え。つい前の
事を思つて氣が着かなかつたが、汝も藝者をして居たから、今ぢや些とは利けるだらう、おい、
來た。」
「難有う、頂きます。」

「大分御慇懃だな、いや、しかしお見事々々、何だか憊う妹ぢや配合が悪い、殊に世帯染た處な
んざ、姐はんと行きてえやうだ。」

「極の悪い事だらけだわ。」とぼつたり團扇を下に置く。

「七轉八起だ、些も極の悪い事はねえ、面を被るんなら私が被らあ。東隣の庫なんざ、今ぢや
風通しの邪魔になる、戸前も向うむきになつて居るが、私が業といふもんだ、面目ねえにや面目
ねえのよ。」

だつて又何うするもんだ、我慢しねえ、是で内が困らねえで、汝も藝者をしねえで見や、お詠
の情夫が出来たか何うだか、家も庫も整然として居て、却て姑や小姑のある、へちむくれにでも
縁附いて、泣を見たかも知れねえぜ。然うすりや、可い加減に飲潰した私は蔭の媒妁人だ、何し
る婿さんが畫師と來ちや、粹で高等な職人だ、申分はねえ。

何か其處等にある、御小皿に、ほたくと憊う、蝦夷菊が眞盛てツたやうな工合なのは、其奴
ア職業道具だな。」

「繪の具ですよ。」

「ふむ、」

としたゝかに感歎して、

「綺麗ぢやねえか、其の紫だの、紅だの、緑だの、黄色いんだの、其をソレ筆のさきで、自由自
在にすらくとやらうといふんだ。一寸櫻、山吹、牡丹、芍薬か、菖蒲よ、杜若よ、山水——佳
いな、別嬪も遊ばすか、はてな、雪も降りや、月も出る、筆一本ですぐにお座敷は月雪花だ、素
晴しいもんです。」

汝も何だ、そんな亭主を持つた冥加だ、紙子を着たつて驚くない。直に秋草でも其の繪の具で、
さら／＼と描いて貰つてよ、雁金の畫なんか天井へ貼つて、廂から月が射しや、灯だつて要らね
えや、ぐツと浮世を下目に見て澄すさな、錢金づくぢや出来ねえ洒落だ。婿殿も婿殿よ、自分が
道具の、美しい繪具皿の間に交つて、女房の白粉があらうといふもんだ、恐れたもんだぜ。」

「まあ、お酌をしませうよ、御機嫌ねえ。」

「おつと、おつと、待ちねえ、一寸手を見せや。」

とお妻の掌をかへして、多見は仔細らしく手を添へて、膳の上で熟々視める。

「何よ。」

「お手の筋拜見だ、は、あ、紅さしに紅がついて、白粉の香がする處、何様こりや畫師を亭主に
持つ相だ。」

「厭ですよ、兄さん、そりや繪の具を溶いたんです。」

「お手傳が出来ますかい！」
「婦人の方がね、細く溶けて工合が可いッて、」

「はてな、綴質細だと仰せあるかい、厭味だな。」

「打ちますよ。ほ、ほ、ほ、」

顔を背けて背戸の方。

「瑩が飛ぶわ。」

草の上をすらりとして、縁もやがて暗くなつた、皿の繪の具に、映つて、消える。

「あ、涼しくなつた。時に何は、婿さんは未だ歸らねえのか、今朝ツから見えねえやうだぜ。

折角溶いた、汝の繪具が乾くだらうに、」

と何となく親身になつて、多見は差覗くやうにする、お妻は思はず悚然として、ほろ／＼と落

涙した。
「紅を溶いたり、胡粉を溶いたり……兄さん。」

「む、」

「それが待人になりましたつけ、頃日ぢや何時歸つて來るか分らなくなりました、眞個に便がな

「はて、そりや又何ういふもんだ、それに幸之助も居ねえぢやねえか。」
幸之助、と口にした時、多見が目の色は鋭かつた、妹は知つては居ないか、既に其の事の報告

があれば、渠は湖畔の兇賊なり。

十一

けれどもお妻の顔の色、何等變ることを認めなかつた。先づ可し、と多見は心を安んじたら

う、酒も甘さうに舌打して、

「今朝、此の縁側で草鞋の紐を解いた時から、風の便に聞いて居た、其の婿殿といふのも見えな

けりや、幸の野郎も居ねえから、留守かそれとも別ツこか、聞きたいにや聞きたかつた。尤もま

あ慙ういつちや汝の前だが、婿殿の方は未だ知己にもなつたのぢやねえのだから、然までも思

はずよ。疾い話が逢つた處で、此方人がやうな、こんな厄難な附合ぢや通るめえ、否さ、そんな

氣象の男ぢやねえからたつて、おいそれで濟むわけぢやねえや。窮屈な思ひをして、割膝で畏つ

てよ。不束な妹でございやすがトソレ行末長く申上げ奉らなけりや納るめえ、ありやうは嬉しく

ねえ、決して腹ア立てなさんな。

だが幸の野郎は然うぢやねえ。

「汝も然うだが私にや宵ねえ可愛い奴だ、これで初中氣にか、つて忘れたことはねえからな、
 といひかけたが、芙蓉の館の二階の事、氣がさしたか咳をして、
 「彼よ、何處へか行つてゐるかとか何とかな、其處は尋ねても見たかつたが、私も、これ、汝達を
 路頭に迷はせるばかりにして、フイと出たツ切、何時が日にも音信はせず、嘸怨まれて居るだら
 うと思ふから、意氣地はねえ。
 幸は何うしたと、心配らしくは、餘り白々しくつて言出せめえ、實は汝にだつて、顔を見た時、
 おや根太板でも剥しに來たの、と皮肉にでも出られはしめえかと、内々是で怯氣々々もんでな、
 上げて呉れたのを見つもの、極は悪し、言句は出で、其處で何がなしに打倒れたわ、疲勞が
 出たので寐つ了つたといふもんだが、恚うお妻、眞個の處、頃日ぢや幸の野郎は何うして居る。」
 「……」お妻は何とも答へなかつた。多見は故と、眉を擧め、
 「へ、へ、へ、矢張り何處か白々しいか、え、」といつて乗出した。
 「聞かしねえな、お妻、私ア何うも此の愁が利かねえのが性分だ、顔に配合ねえから不可えス、
 茶番に入つたつて、つひぞ泣いたことはねえんだから、堪忍しねえ。」と苦笑。
 お妻は浴衣の袖口で、一寸目を拭いたが暗まざれ、衣紋と項ほの白う
 「兄さん、最う久しい間、三人で顔を合せて、半日だつて、一所に、居たことはありません。」
 「然うよ、まあさな、む、む、」と何か口へ入れたま、ちら／＼宵月に照れて居る。
 「私ア兄さん、幸ちゃんにも棄てられました。」
 「へい？ 幸ちゃんに棄てられた、はてな、私と違つて幸之助は、姉さんを見棄るなんて、そん
 な氣の利いた野郎ぢやねえがな。」
 「否、見棄てたんですよ、最う久しい以前にね、あの、巨山、知つて居ませう、國々まで音に響
 いたもんですから、」
 活如來を説いて我に及ばず、扱は愈々御存じないぞ。
 「あ、聞いてるよ。」
 「其の何ですよ、芙蓉湯の別荘へね、あの、些と深いわけがあつて、私から使者に行つて貰つた
 んですがね、其切歸らないんです。」
 「音信もないのか、其切歸らない？」
 「ですから私を棄てたんでせう、」
 多見も是は意外であつた。
 「變ぢやねえか、何うした譯だ」
 「大方愛想が盡きたんでせうよ。」

汝も然うだが私にや宵ねえ可愛い奴だ、これで初中氣にか、つて忘れたことはねえからな、
 といひかけたが、芙蓉の館の二階の事、氣がさしたか咳をして、
 「彼よ、何處へか行つてゐるかとか何とかな、其處は尋ねても見たかつたが、私も、これ、汝達を
 路頭に迷はせるばかりにして、フイと出たツ切、何時が日にも音信はせず、嘸怨まれて居るだら
 うと思ふから、意氣地はねえ。
 幸は何うしたと、心配らしくは、餘り白々しくつて言出せめえ、實は汝にだつて、顔を見た時、
 おや根太板でも剥しに來たの、と皮肉にでも出られはしめえかと、内々是で怯氣々々もんでな、
 上げて呉れたのを見つもの、極は悪し、言句は出で、其處で何がなしに打倒れたわ、疲勞が
 出たので寐つ了つたといふもんだが、恚うお妻、眞個の處、頃日ぢや幸の野郎は何うして居る。」
 「……」お妻は何とも答へなかつた。多見は故と、眉を擧め、
 「へ、へ、へ、矢張り何處か白々しいか、え、」といつて乗出した。
 「聞かしねえな、お妻、私ア何うも此の愁が利かねえのが性分だ、顔に配合ねえから不可えス、
 茶番に入つたつて、つひぞ泣いたことはねえんだから、堪忍しねえ。」と苦笑。
 お妻は浴衣の袖口で、一寸目を拭いたが暗まざれ、衣紋と項ほの白う
 「兄さん、最う久しい間、三人で顔を合せて、半日だつて、一所に、居たことはありません。」
 「然うよ、まあさな、む、む、」と何か口へ入れたま、ちら／＼宵月に照れて居る。
 「私ア兄さん、幸ちゃんにも棄てられました。」
 「へい？ 幸ちゃんに棄てられた、はてな、私と違つて幸之助は、姉さんを見棄るなんて、そん
 な氣の利いた野郎ぢやねえがな。」
 「否、見棄てたんですよ、最う久しい以前にね、あの、巨山、知つて居ませう、國々まで音に響
 いたもんですから、」
 活如來を説いて我に及ばず、扱は愈々御存じないぞ。
 「あ、聞いてるよ。」
 「其の何ですよ、芙蓉湯の別荘へね、あの、些と深いわけがあつて、私から使者に行つて貰つた
 んですがね、其切歸らないんです。」
 「音信もないのか、其切歸らない？」
 「ですから私を棄てたんでせう、」
 多見も是は意外であつた。
 「變ぢやねえか、何うした譯だ」
 「大方愛想が盡きたんでせうよ。」

「貧乏で、」

「否、頼んだ、其の用で、」

「質か、」

「え、」

「質かよ、蚊帳でも殺しに遣つたのかい。」

「厭な兄さん、蚊が出たもんだから厭味をいつてさ、親身の話ぢやありませんか、ね。」

「だからよ、親身でなくつてお前、こんな話が出来るもんか、それとも布子でも持たして遣つたか。」

「はい、鯛とね、鼓を持たせて遣りました。」

十二

「はてな、鯛と鼓、鼓と鯛、何だか判じもののやうで分らねえ、異な質種を持たせて遣つたもんぢやねえか。」

「質々つて何ですね、然うぢやありませんよ。あの芙蓉湯の別荘に居る、巨山の夫人といふのはね、兄さんは初ツから、滅多に内になんぞ居た事はないから、能く知らないかも分りませんが、

私は友達だつたんです。お隣のね、鼓のお師匠さんの許へ、何時もお稽古に來た、お美樹さんといつて、そりや何ともいひやうのない佳い婦人。」

「其奴ア難有えな、」と額を叩いて、多見は何となく紛らした。

「何が、そんなに難有いんですね、」

「だツて、佳い婦人だといふからよ。」

「ほ、お生憎様ですが、最う縁付いて了ひました。」

「なあんの事だ、可笑くもねえ。然うか、巨山の夫人だつけ。」

「ですから、友達が縁付いたんですから、幸ちやんに御祝儀を持つて行つて貰つたんです。」

「成程、其處で壽留々々かい、鼓は何だ。」

「其のお美樹さんは、今もいつた通り、水上さんに教はつてね、幸ちやんと合弟子だつたから、お對手を爲せるつもりでね、其邊に其の情があつたんです。」

「其の情だな、幸の野郎が愛想を盡かしたらうツて、氣を揉んでるのは。ふむ、質ぢやねえ、何ういふ理窟だ。」

「お妻は是には答へないで、少時して唐突にいつた。」

「兄さん、蚊が酷くはありませんか。」

「何、お前。」

「灯を点けませう、暗いと猶のこと、ぶん／＼いひます。」

「待ちねえ、折角月が射さあ、膳の上まで、こら、こんな事は容易にねえ、何うだい此の涼い景色は、私がやうに殺風景でも悪い心持ちやねえんだから、」

多見は慙くいふ時、手取川の畔を想つた、唯見る赤き瓦礫の中に、狼藉たる鶴の嘴の、骨と骨と相撃つて修羅の劍戟憂々たるを、こゝには月の影豆腐を冷して、蓼の葉蒼く露ある風情、多見には得難き趣であつた。

「それぢや、些と極の悪いことですから、灯を点けない中に話しませうね。」

「然うしねえ／＼、だが慙う、口説くんぢやあるめえな。」

「兄さんも！」

「他に極の悪い事はねえ、是でも惣領の甚六だ、兄妹の中ぢやねえか。」

「實はね、あの、幸ちゃんにね、情人になれツて含めて遣つたの。」

「情人になれ？ 誰の、」

「お美樹さんの、」

「巨山の夫人だな、」

「あ、」

「ぢや密通かい。」

「……………」

「密通だ。」

「然う……ね。」

「待ちねえよ、」

「腕を一杯に張つて胡坐に手を支き、」

「一番色仕掛けで取り込んだな、密通け、といつて遣りましたかね。」

「其がね、」と口籠る。

仰山に、

「いや、此奴ア話せる、隣の空地に茄子はねえが、此方の畠は瓜の蔓だ、面白狸となりましたな、ふウ、こりや飲める、慙う姉御、一杯景氣よく酌いで呉んねえ。」

「あい、」

とお妻はふさいだ風采、河童頻に浮上り、

「おつと、おつと、いたゞき横丁の裏木戸だ、何でも世の中は、然う來なけりや異でねえ。其處

で何ういふ狂言だ、いづれ、巨山の屋臺骨を根こそぎとか何とかいふ、
びたり蚊を打つて乗出した。

十三

お妻は聲も打沈み、

「兄さんてば、そんな氣樂なんぢやありません。道ならぬことを頼んだ私も、よくくの思ひな
ら、頼まれて出た幸ちやんも、どんな心持だつたでせう。」

厭とはいはれない羽目になつて、一旦引請けて行つたにや行つたけれど、大方邪慳な姉だと思
つて、先方へ行つてから屹と氣が變つて了つたんです。一度も音信がないんですもの。」

眞面目になれば眞顔で聞いて、多見も何時しか耳を傾け、
「だがお前、妙な註文をしたぢやねえか、主ある婦人と密通けといつて、弟を遣るつてことは、
つひぞ、聞いた事がねえ、變なわけだな。」

「然うでせうとも、全體私にだつて分りませんから、」

「何だ、自分にも分らねえ？ 汝に分らなくつて誰に分る。」

「誰に分るつてこともありませんがね、秀岳なら能く合點めますよ。」

「それぢや、婿さんの吩咐か、何か、御當人巨山の夫人といふのに怨恨でもある處から、一番幸
の助をおとりにして、墮落して呉れうとでもいふ事だらう。」

對手が魔物なら寶の珠でも奪取るかい、敵討なら要害でも探るてツた寸法だ、いづれ怨恨があ
るんだな。」

「否、怨恨があるやうなら、些とも心配はないんですがね、秀岳が彼のお美樹さんを、宛然天人
かなんぞのやうに、餘り信仰し過ぎるから起つたんです。」

「ぢやあお婿さんは、何の事はねえ、辨天様に、こんがら童子を、けしかけたんだ、幸の野郎と
いふのが又人間の雄にしちや、些と出來過ぎた容子だからな。」

「否、」
と壓へて、月に清らかな項を斜に、肩のあたりの蚊を拂ひ、

「秀岳にも内證なんです、幸ちやんを芙蓉へ遣つたことは、秀岳ぢや些とも知りません。心配を
してき、ます時は、いつも幸ちやんが口癖のやうにいつて居た、兄さん、お前さんの行方を尋ね
て、當なしに、順禮でもする氣で出て行つたと、いつて居るくらゐですわ。」

多見は少時呆氣に取られ、目を睜つて黙つたが、
「恚う、可い加減にしねえな、焦つてえ、汝に分らねえといふから、婿はといへば婿も知らず、

てつて汝にも分らずといはあ、人、おもしろくもねえ、何の事た。」
「ですからさ、頼んで出したのは私だけれどね、實は秀岳が用なんです、其ね、繪の事に就いてですよ。」

「繪の事か、はあ、其奴あ私には分らねえ、成程、繪が何うしたんだ。」

「其の事ですよ、巨山の小屋へ入らなけりやならないかと思つて鬱ぐのは。」

「あの獸が何うかしたのか、」

「手取早くいふとね、私を何して呉れたり、幸ちゃんを見て呉れたりしたので、それから、それ

へとね、借金が出来て、巨山にも大分借りたとお思ひなさいな。工業學校の教師もして、些とは

お給金を取つただけけれど、そんなこんなで、其方も罷めるし、大層困つて來た處へ、巨山から

注文があつてね、繪を一枚描けていふの、美人をツて。

おいソレと描いてさへ遣れば、面倒な事はないんですが、其が秀岳に出来ません。

それがね、慙うなんです。

學校へ見に来たこともあるし、何處かの園遊會とかいふのでも逢つたし、二三度お美樹さんを見て知つて居るもんですから、あの人の容色の佳いのが邪魔になつて、自分の繪が出来ないんですつて。

まあね、秀岳が自分の腕が、お美樹さんの顔容に負けるんですとさ。

尤も何ですよ、あんな姿は、私だつて然う思ひます、なか／＼錦繪にだつてないんですものね

え。」

多見は犇々と思ひ當る。

十四

「そんなら他にお美樹さんに負けないやうな佳いのが出来さいすりや可いんですが、目許だつて、口形だつて、是一ツ違へて描いて、お美樹さんにひけないのは逆も拵へられないツていふんです。

秀岳ぢや又然うかといつて、頼まれて仕事をするのに、いくら其上の考がないからつて、注文主の夫人を手本にした繪を描いて、はい、是でございまして見せるわけには行かないツて、何時までも出来上りませんもんですから、段々催促をされるんですが、夜の目も合はないやうにして、何處を何う工夫しても、筆を持つて絹地を見ますと、唯最うお美樹さんの姿ばかり、ちらついで、何處へ手をつけて可いか、目が眩んで了ふんですつて。」

多見は噓を仕損つた顔色して、

「申戯ぢやねえ、白癡が女郎に惚れやしめいし、然りとは術がなさ過ぎるぢやねえか、目前に歴

歴見えるなんざ、お月様に目鼻をつけた。ボンチ畫といふもんだ。
 「男の癖に意氣地が無いと思つてね、私は兄さん口惜しかつたわ。」
 「妬きやがつたな。」
 「はあ、妬いたの、」
 「うんと妬け、私が味方だ。汝といふものを前に置いて、人の女房がちらくは些と酷からう、焦げるまで遣つけねえ。」
 「ですがね、繪の方の事ですから、私なんぞにや分りません、兄さんだつて分らないでせう。そりや又ね、ちやんと理窟があるんですから、」
 「大に其處もございませうよ、何、お妬き遊ばさうが、遊ばすまいが、貴女様御存分。」
 「あれ、兄さん、」
 「だつて亭主を庇ふからよ。」
 「人情ですもの、」
 「へい、へい。」
 「そんなで、日ばツかり經つもんですから、催促の仕やうが厳しくなつて、はじめは然うもいはなかつたのが、金子を返せつて、いひ出したんです。」
 皆まで調はないでも、私が又泥水に、と相談して見たんだけど、他の事なら然うもしよう、自分が商賣の、其仕事が出来ないために、女房を苦界には、と秀岳ぢや意地を張つて肯きません。然うかといつて晝は描けず、心配をして瘦せるばかり、落着いてお飯も喰べ得ないで、目も血走つて来るんですもの、何うすれば可いんだつて聞きますとね。
 詰りお美樹さんが、容色なり、心掛なり、餘り良くツて、人間業——今の自分の腕ぢや、お美樹さんの掌の外へ飛出して、別なものを見附けるだけの力がない。どんなに拵いても直にあの袖の中に巻込まれる、些少でも、何のあんなもの、と思へるやうな、隙間か、越度か、お美樹さんにあるさへすりや、其ま、別な處へ抜け出して、勝手に働いて見ようものを、残念だ、と髪を搦つて口惜しがりますから、それで、あの思ひ着いて、幸ちやんを頼んだんです。
 あんな初心な兒ですから、極を悪がつたが、義理づくに引承けて呉れました。
 幸ちやんになら迷ひませう。女に取つて、此の上の罪はないのですから、其を聞いたら、あ、幸之助と不義をしたか、いや呆れた婦人だ、と秀岳が夢も覺めようと思つたからですね。
 巨山だつて風説のやうな善人ぢやありません、お美樹さんもお美樹さん、はじめ戀つた人があつて、其の行方が知れないのに、家も身分も打棄つて、情を立てようとは思はないで、爺に縁附いた見得坊ですもの。其位な水は向けても可いし、又、幸ちやんの出世には、大した邪魔にもな

378

るまいと思ひました。

もしか、私のした事に、罪も報もあるものなら、身體一ツに引被つて、良人のためです、未來は地獄でも厭ひません。兄さん、幸ちゃんも貴兄の弟、濟まない奴とお思ひなら、私は打たれても、蹴られても、殺されても可いんです。

と崩折れながら凜として、お妻は月の疊を擦寄る。

多見は腕組をして黙つて居たが、解くと手を舉げて抑へながら、
「まあさ、然う六ヶしく出なさんな。」

十五

「恚うお妻、何だか理合は合點めねえが、私にも話は分つた。其處で一旦承知をして出て行つた、幸の野郎が其ツ切、音信をしねえといふんだな。」

「ですから、屹と愛想を盡かして、最う歸つて來ないかも知れませんが、いたづらを教へるやうな、姉だと思つて見限つて。」

「ふむ」といつたが思ひ出した、嘗て湖畔の浮城なる、夫人の閨に忍びし時、先に忍んで居た幸之助、折から四邊に人はなし、主人が留守の夜更といひ、密語く聲も聞えたのは、何か其間にい

はれがあらう、けれども今は何も不言。

「そりや何とも知れねえな。一體、幸の野郎ばかりぢやねえ、恚うやつて困つてる處を見ても、汝をはじめ婿なんぞ、此の土地にや見限られて居るんだぜ。見限られた土地に愚圖々々して、しみつたれて居ねえたつて、金澤ばかり日は照るめえ、何處すらかつて了ひねえな。而したら婿も描けねえ繪に、苦むことは要らなからうといふもんだ。」

「何うして兄さん、些とでも巨山にかゝりあひのあるものが、身體が抜けますもんですか。御覽なさい晝間の、あの、草刈の爺さんね、あんな情ない思ひをしても、救小屋から足を抜いて、乞食にだつてなればしません。第一ね、此の土地は、乞食ッてものが出來ないんですとさ。皆巡査が引立てて、其の小屋へ投込む、直にお粥で養つて、然うして仕事をさせるんですもの。偶に遁げようとするものがあつても、直に見付つて、其筋なり、何處からなり、又巨山の方へ戻されて了ふんです。」

警察はじめが感心をして了つて、巨山の身體から後光が射すくらるに思つて居るんですから、仕やうがありませんわ。

土地で食ふに困るものを、他國へ出しては、石川縣の恥だつてね、何だか一寸道理のやうに聞えるぢやありませんか。

それに巨山ばかりだと、そんなにもないんですが、お美樹さんが縁附いてから、大變な評判になつたんです。何だつて、あの方は、十八九の時分から、國中の、月か花かのやうにいはれて居た人なんですから。

お仕被を被た小屋ものが、密と抜けて、田圃道でもかゝつて御覽なさい、鉞を持つた百姓までが、何の事はない、佛様の情を仇で、恩に背く、悪魔外道のやうに思つて、直にどやしつけて捕へるツて騒ぎですもの。小屋の中の大勢は、蠶のやうにうよくして、口から血の絲を吐きながら、巨山の名を美しく飾つて居ます。」

多見は、何にもいはないで、唯打領くばかりであつた。

「而してね、兄さん、繪も出来ないし、金子も出来ないもんですから、巨山の小屋へ入つて、九谷焼に赤繪を描く、其の教師をしろつていひます。普通の小屋もの扱にもしますまいけれど、一度入れば同一です。」

それだから一時免れで、良人は内にや居ないんですよ。二日も三日も歸らないこともあります。が、廣いといつても地方ですから、そんなに知己の處もなし、たまにはお宮の縁なんぞに寝ることもありません。」

と聲も次第に、雲折々。

多見次 杯を丁と置き、

「お妻、土産だ。婿に一番素晴らしい手本を見せて遣らう、何だらう、恠う、姿なり、容色なり、梅と櫻と違つても、較べて見劣りのしねえ別嬪があつたら、立派なものが描けようぢやねえか、屹と承合つて見せてやらう。」

最も頼母しく、いひ放つた、心の中に、お龍のあることは言ふまでもない。

「それとも金子で濟まさうと思ふなら、可いや、耳を揃へて出して遣る。又、綺麗薩張と、土地を離れるなら、お茶の子だ。尻押をして遣らあ。三ツに一ツ、どうにかなりや、汝、鼻唄で爪弾ぢやねえか、些とも案ずることはねえや。其の代、お妻、私が折入つて頼みがある。唯何だぜ、私の事を人にいふな、それから、何をしてるなんて、聞かうとも思ふんぢやねえぜ。」

鐵 鉢

十六

「え、待て、待て此奴等、一體何處へ行く料簡だ。」
法三章の札ならず、並木の松の間を透く、遠山の峰に並び、左右ひらけた田の端に、月影を睨

に倒して、高き巨山の金看板、寄附金の掲示の下に、ぬつと突立つた木谷轉倒太。

刑事の志願者を中央に、右は單衣に白き襦衣、鼠の兵兒帶、半靴で、杖を支いたのは三宮村の正訓導、當時、救小屋の事務員で、傍ら貧民に倫理を講ずる、好男子垂井である。

左に制服の巡查が一名。

三人の前に土下座をして一すくみになつて居るは、お仕被で分つた二個の小屋もの。お妻が語つた言に因れば、蠶の如く蠢いて、血の絲を吐きながら、巨山の名を美しく飾りつつある動物であつた。

轉倒太は其の威、其の權、地藏堂に於てお龍に對し、手取に力松に對した時の如きものにあらず。

「こら、貴様等遁走をしようといふんだらう、怪しからん奴等だ。」と先づ喝する。

小屋もの、ぺたくと額を地につけ、

「御免下さりまし、御免下さりまし。」

「お見免しを願ひたうござります、お慈悲を願ひます、」といふ聲も腹に便りがなささう。

甲といはず乙といはず、目は窪み頬はこけ、髻すくくと髪亂れて、淺黄木綿の影の薄さ。

「何、お見免を願ふ、慈悲を頼む——お前達にいはれんでも、慈悲は我々が知つて居るのぢや、

馬鹿め、」と訓導垂井氏はたしなめた。

「馬鹿。」

馬鹿とばかり、巡查は足許に跪いた餓鬼の影にのしかゝる。

「歸れ、さつさと、お小屋へ歸れ、幾分の慈悲を垂れて遣る。」

蚊の鳴く如く、口の内でつぶくと、

「其のお慈悲がござりましたら、此のま、お見免し下さりまして、私どもが参ります處へ、隨意にお遣しが願ひたう、はい、お情でござります。」

「お情でござります。」

「何ぢや、其では歸らんといふのか、七面倒な、君、引立てて呉れたまへ。」

と轉倒太が目くばせする、ト巡查眼を剥き、

「土性骨を踏んで呉れう、此の溝板め、然したら自然に撥上ツぢや。」

「あ、待ちたまへ、参考のために、一應此奴等が行かうといふ處を聞いて置く。おい、難有い御小屋を抜けて、何處へ突走らうといふ目的ぢや、それをいふ、うむ、それをいふ！」

少きが恐々頭を擡げ、

「へい、もし、旦那方、私どもは仕事はなし、食ふ事が出来ませぬで、巨山様のお慈悲を頂

いて居りましたが、此の頃承りますれば、其の何でござります、手取川の鐵道工事に、人足が入りますので、望みのものは雇うて呉れると申しますから、其へ参りませうと存じまして、はい、お係へ申上げましたけれども、お聞届け下さりませんに因つて、奮發をいたして出かけましたに相違ござりません。

「や、鐵道の人足だ、」

激しく口早に問返した、轉倒太も、訓導も、巡查も颯と色を作した。

「然うでござります。」

「誰がいうたか。巨山様に案内もなしに、お前達を雇ふと、何者がいうたんぢや。」

「え、え、一人の旅僧でございまして、」

「坊主な、」

「へい、道中手取川を通らつしやいました時、そんな風説を聞いた、確な事ぢや、と申してでござりました。」

時に町はづれの方より、細長き並木深く、月の暈の小暗きあたりを、漂々然として近いた、風采乞食の如き旅僧あり、透し見て、墨染や、松の蔭、忍んだのを誰も知らない。

十七

「約束だつて證文だつて、當にやらねん世間ではないか、通りがかりの坊主がいうたことなんぞ頼みにして、先方へ行つて拒絶られたら、お前たちは何とする。」と稍穩なる語氣を以て、訓導諭す處あり。轉倒太は尾について、

「こら、其期に及んで、食へんからというて、行倒れになつた處で、然うくはお慈悲がないぞ。」

小屋ものは却つて驚かず、

「其は最う、一旦慪うやつて駈出しました上は、勿體ない、埒明かんからと申して、のめくと御厄介を掛けまするやうなことはござりません。」

「豪い顔を叩き居る、厄介には成らんのか、お慈悲は願へず、食ふことは出來ず、而して、貴様等は何うするのか。」

「乞食をいたします、と猶豫は殆ど同音に答へたのである。

「乞食をする？」と倫理講師は呆れた顔色。

「其の方が勝手なのでござります、はい。」

「そりや、成らん。苟も當國に巨山様のいらつしやる間は、たとひ如何なる事があつても、同郷の人民を乞食には遊ばされん。此の思召し洪大ぢや、因つて其の意を奉戴する我輩等も、又當のない處へ行つて、見すく乞食をするやうな事は爲せられん、屹とお小屋まで引戻す、愚圖々々いはんで歸つて了へ、手のつけられた奴等ぢやない。」

「でござりませうが、旦那様、ものが是、御馳走を頂きました處で、蟋蟀は籠の中が厭でござります。實お慈悲がござりましたら、はい、私等が思ふやうにおさせ下さりますし、其が、如何ほどお難有いか知れませんが」と血を吐く蠶も五分の魂、額づきながらきつぱりいふ。

「黙れ、」

と巡查は一喝して、

「心得違をする奴を、説諭せんで置けるものか、好きなやうにさせるといへば、拘賊も盗人も勝手だわ、馬鹿なことを！」

「否、金満家になりたいの、盗賊をさせうのと、心得違をいたすではござりません。」

「へい、唯人足に雇りたい、出来ません時は乞食をしようと申す儀でござります。」

「不可んぞ、君」と轉倒太を見返つて、訓導は其の教鞭を擲つた。

縛ッ了へ。」

「やあ、何の咎ござりまして。」

「汝等、鐵道工夫の夥間入をしようと吐すか。手取川邊の彼賊どもは、放火、強盜、人殺の團體ぢや、汝等も同類。」

「不埒漢め、」

喚くや否や、巡查は一人の脊骨を踏んだ、轉倒太は最一人の、頤の邊を、したゝかにボンと蹴る。

「わあ引情ない。」

「ぎやッ、」

と泣くを、左右から引立てるに、下手が使ふ土偶の如く、骨もなく踏躐めきながら、淺黄の仕被は月影に、朦朧として消え行く後、がちやん洋刀を引摺り、大手を振り、杖を支いて、町の方へ、どツたどた。

犬が鳴いて、並木は明るく寂となる。

立樹の裏から、枯枝の瘦せた姿で、ぼつりと出た乞食僧。

松の葉影は法衣を通して、肩に背に透くばかり、墨染薄き袂を吹いて、山ある南へ靡くのは、北の方、遠く海を渡り、芙蓉の湖をすらくと撫でて、時に螢を流しながら、青田を通ふ風であ

る。

屹と見れば、既に垂井等が影もあらず。

乞食僧は深く被つた、竹の子笠を、かなぐり取つて、兩の手首を搔合せた、破法衣の袖を拂ふと、右手に一個、隕石滑にして光冷かなる鐵鉢を携へたるが、其容貌の怪、眼の嶮、全幅を擧げて、一種いふべからざる妖氣を籠め、樹々の翠の雲近く、脚下一條の銀蛇を踏んで、爰に巨山の金看板、建札の許にイミたる、二座の兇星きらりととして、宿つて雙の眸にあり。

十八

時に這個乞食僧は、掌に据ゑたる鐵鉢を胸に上げて、左の中指を差入れて、中なる布施を掬ふやうに、横ざまに唇に銜へたのである。

銜へたまゝ、暫時身動きもしなかつた。

やがて持直して兩手に取つて、月さす松の下路を、遙に背後に曳きながら、金澤の市の方に打向ひ、建札に面して、高く、額に捧げて禮拜した。

修行者の、請けたる報捨を、恚くして檀越に感謝するのは、何等訝しい次第ではない。けれども、こゝに表した渠の態度は、極めて奇怪なるものであつた。

先づ四邊に人もあらず、見るものはなき暇ならずや。

單に無人の境ばかりではない、其の風采といひ、舉動といひ、洵に知り難く解し易からじ、何者の潑禿顛ぞ、爾く疫病の神に肖て、且つ災害の豫言者に髣髴たる。

殊に町盡に程近き、松並木の此の邊は、鈴ヶ森、小塚原などと一般、舊藩の仕置場であることが、愈々乞食僧の姿をして、不思議なる趣を呈せしめた。

惟ふに現在、仁惠恩徳の、記號の札、巨山が金看板の立つたるは、以前、紫の刃閃めき、碧き血汐のほとばしつた、礎柱のあとであらう。月は際立つて其處に暗く、松は際立つて彼處に濃い、此の乞食僧の佇む處。

首の無き地藏尊、四角なる石を頭に於て、其丈三尺ばかりなるが、朦朧として煙の如く、乞食僧の法衣の袖と、僅に色を分けて立ち給へり。

彼と是と相並んで、僧は恰も影の如く、罪囚の記念の地藏は却つて生きたるもの如し。折から烏がガツと鳴いた、のさくと來たのは犬で、尾長く、耳の先尖り、胴細く、肩のこけたのが、足許の地を求獵る。其の烏の聲、犬の形、いづれ腸を裂き、眼を抉つた、先祖の系統が

表れて、今もなほ昔の榮華を夢みつつ、人の匂を慕ふのである。

此の景、此の時、鐵鉢を捧げ、押頂いて乞食僧の咄くを聞け。